

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第80集

西分増井遺跡

新川川広域河川改修に伴う西分増井遺跡発掘調査報告書

2003.2

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

西分増井遺跡

新川川広域河川改修に伴う西分増井遺跡発掘調査報告書

2003.2

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

西分増井遺跡は、高知平野西部の一翼を占める吾南平野にあります。この遺跡は、平成2年に最初の本格的な調査が実施され縄文時代後期から弥生時代前期、後期、古墳時代初めを中心とする集落址であることが明らかとなりました。この時には17棟の竪穴住居を検出し、出土遺物では吉備や阿波、河内など遠隔地からの搬入品がまとまって出土するなど県下でも一躍注目される遺跡となりました。西分増井遺跡の近隣には弥生時代前期の山根遺跡や古墳時代の馬場末遺跡、古代寺院の大寺廃寺跡などがあり、この周辺は高知平野西部における先史・古代史の中心舞台として捉えることができます。

今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代を中心とする竪穴住居に加えて、これまでの調査ではほとんど例を見なかった古代の良好な土坑を多数検出することができました。これらの遺構は、大寺廃寺との関連をもった遺構となる可能性も考えられるものであり、高知平野西部に新たな歴史の一ページを加えました。また、多種多量の青銅器や鉄器製産との関連が考えられる1000点を超える鉄片や砥石なども出土しており、全国的な注目を集めるようになっていきます。これらの成果については次年度以降報告していきたいと思えます。

新川川とその支流を含む流域一帯は、大規模な河川改修工事によって大きく変貌しつつあります。このような中で、吾南平野に生きた先人によって刻まれた遺跡が明らかとなり記録されたことは、地域の歴史を復元する上で、或いは地域を理解し正しく未来を展望するためにも有意義なことであると思えます。本書が地域の歴史資料として、また斯学の向上と寄与することができれば、この上ない喜びであります。

今後とも埋蔵文化財に対しまして一層のご理解とご協力を頂けますようお願い申し上げます。最後に、炎天下、現場作業に従事して下さいました方々、ならびに調査に全面的な協力を頂きました高知県伊野土木事務所の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成15年2月

財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 島内 靖

例 言

- 1 この報告書は、平成13年度に実施した新川川広域河川改修工事に伴う西分増井遺跡群発掘調査報告書である。
- 2 遺跡は、高知県吾川郡春野町西分成岡、中央、他に所在する。
- 3 この報告書は、調査区 A・B・C区の古代の遺物・遺構について報告するものである。
- 4 調査面積： A・B・C区の調査面積は1,700㎡である。
- 5 調査期間： A・C区(2001年10月1日～2002年3月10日) B区(2002年4月8日～7月30日)
- 6 調査体制
 - (1) 2001年度

調査員	出原恵三(財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター 調査課第三班長)
	田坂京子(同 専門調査員)
	泉 幸代(同 専門調査員)
	山本純代(同 非常勤職員)
総務担当	中条英人(財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター 総務課主幹)
 - (2) 2002年度

調査員	出原恵三(財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター 調査課第三班長)
	山本純代(同 非常勤職員)
総務担当	中条英人(財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター 総務課主幹)
- 7 方位Nは、公共座標によるGNである。
- 8 本書の編集は、出原が行った。執筆は . . . 章を出原が、 . . . 章を山本が担当した。
- 9 現場作業および整理作業は下記の方々に従事して頂いた。

現場作業：有藤充晴 上田善右 大崎一虎 大崎数恵 岡崎速男 岡田稔夫 岡村昭子
小嶋美知子 川野孝典 国沢数代 国沢節子 久保壮司 酒井雅代 田代 勝
田村 明 田村美賛子 近沢恵美子 富本泰雄 富本紀恵 中村和夫 中山幸生
弘田 由 松本明美 矢野眞弓
整理作業：松木富子 浜田雅代 山口知子
- 10 出土遺物は、2001年度調査については「01-21HN」、2002年度調査については「02-2HN」と注記し、関連図面・写真とともに(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第 章 調査に至る経過	1
第 章 遺跡の位置と環境	3
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	5
第 章 調査の概要	
1 各調査区の設定と調査期間	8
2 A・B・C区の調査方法	8
3 A・B・C区の概要	10
第 章 調査の成果	11
第 章 考察 「製塩土器について」	38
第 章 まとめ	48

挿図目次

Fig. 1	西分増井遺跡位置図	1
Fig. 2	新川川の浸水状況	2
Fig. 3	新川川流域の地形区分図	3
Fig. 4	周辺の遺跡	4
Fig. 5	試掘グリッド及び調査区位置図	9
Fig. 6	調査区位置図	10
Fig. 7	区遺構配置図	12
Fig. 8	基本層序	13
Fig. 9	SB 1、SA 1、SA 2 遺構平面・エレベーション図	14
Fig.10	SK 1 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図	15
Fig.11	SK 1 出土遺物実測図	16
Fig.12	SK 2 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図	17
Fig.13	SK 3 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図	18
Fig.14	SK 4 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図	19
Fig.15	SK 5 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図	21
Fig.16	SK 5 出土遺物実測図	22
Fig.17	SK 6 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図	23
Fig.18	SK 6 出土遺物実測図	24
Fig.19	SK 8 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図	25
Fig.20	SK 9 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図	26
Fig.21	SK10、SK11 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図	27
Fig.22	SK12 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図	28
Fig.23	SK14 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図	29
Fig.24	SK15 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図	30
Fig.25	SK16 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図	31
Fig.26	SK25 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図	32
Fig.27	P29、P38、P40、P41 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図	34
Fig.28	P51、P67、P68 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図	35
Fig.29	包含層出土遺物実測図(1)	36
Fig.30	包含層出土遺物実測図(2)	37
Fig.31	高知県の製塩土器出土遺跡位置図	38
Fig.32	下ノ坪遺跡出土の製塩土器	42
Fig.33	具同中山遺跡出土の製塩土器	43

表目次

Tab. 1	西分増井遺跡周辺の遺跡一覧	5
Tab. 2	製塩土器出土遺跡一覧	39

写真図版目次

- PL1 : 調査区全景 (西から) 同 (北西から)
- PL2 : SK1、SK1 (土器出土)
- PL3 : SK3・11、SK3 遺物出土状況
- PL4 : SK5 遺物出土状況
- PL5 : SK5 セクション、SK5 完掘
- PL6 : SK3 セクション・同遺物出土状況、SK6 セクション・同完掘状況、SK8 セクション
- PL7 : SK8 遺物出土状況・同完掘状況、SK9 完掘状況、SK12完掘状況・同土師器
- PL8 : SK15完掘状況、SK16セクション・同完掘状況、SK25セクション・同完掘状況
- PL9 : A区完掘状況 (南から) 同 (西から)
- PL10 : 須恵器蓋・杯、土師器杯・皿
- PL11 : 須恵器脚部・蓋・杯・鉄鉢・鉢、土師器羽釜
- PL12 : 須恵器蓋・杯・鉢・播鉢、土師器皿
- PL13 : 須恵器杯、土師器皿
- PL14 : 須恵器杯・脚部、製塩土器
- PL15 : 砥石

第 章 調査に至る経過

1998年9月24日高知県中央部は、集中豪雨（高知豪雨）による甚大な被害を被った。特に春野町の新川川やその支流の浸水被害は大きく、氾濫水は流域のほとんど全域で堤防を越えて、家屋や田畑を泥土の海と化してしまった。家屋の床上浸水290棟、床下浸水411棟、氾濫面積703ha、一般被害額170億円にのぼった。新川川流域は河口付近の低平な地形や河口での滞留、戦後実施せられてきた圃場整備事業等によって川幅が狭められていることにより、流下能力が低いことから度々浸水被害を繰り返していた地域であったが、今回のような被害は空前のものであった。

新川川及び芳原川、北山川、大用川などその支流域においては、治水効果を高めるための河川災害復旧等関連緊急事業が採択され、1999年から2001年度に事業が実施されることとなった。これらの河川流域ではすでに幾つかの埋蔵文化財包蔵地が確認されており、特に大用川、十田川流域においては、西分増井遺跡や馬場末遺跡、大寺廃寺など縄文時代から古代に至る県下でも著名な遺跡の集中するところである。

高知県教育委員会は遺跡保護の立場から、事業主体となる高知県伊野土木事務所と協議を行い、沿線全域の踏査と試掘調査を実施することとなった。試掘調査は、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが担当することとなり、大用川、十田川流域については、Fig. 5 に示したように、沿線に27個所の試掘グリッドを設定し、2001年8月1日から9月30日、2002年7月1日～7月4日まで実施した。その結果、第 章で述べるように7地点で遺構を確認し、7地点3,510㎡について緊急発掘調査を実施することとなり、2001年10月1日から着手した。

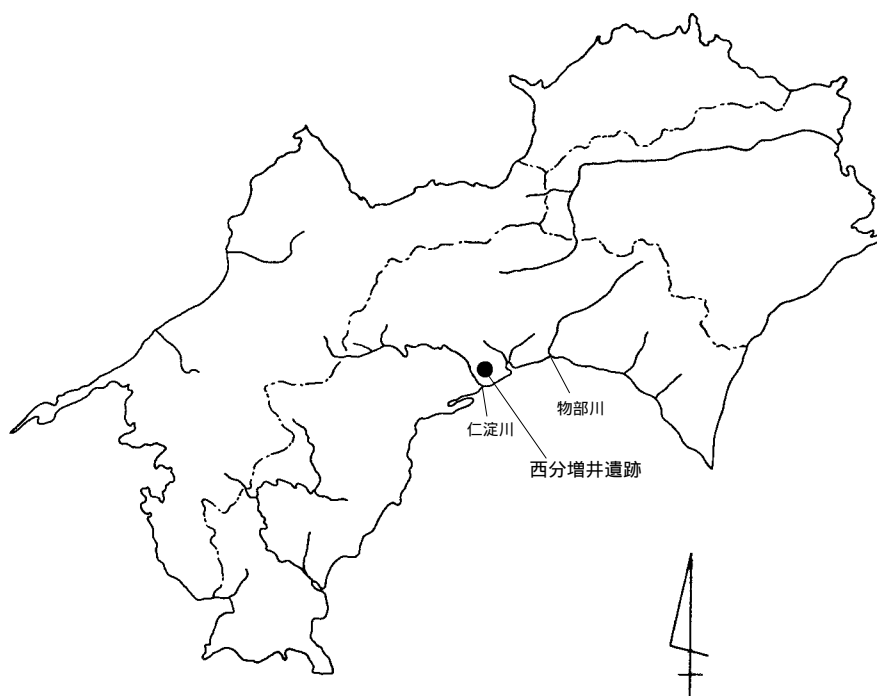


Fig. 1 西分増井遺跡位置図

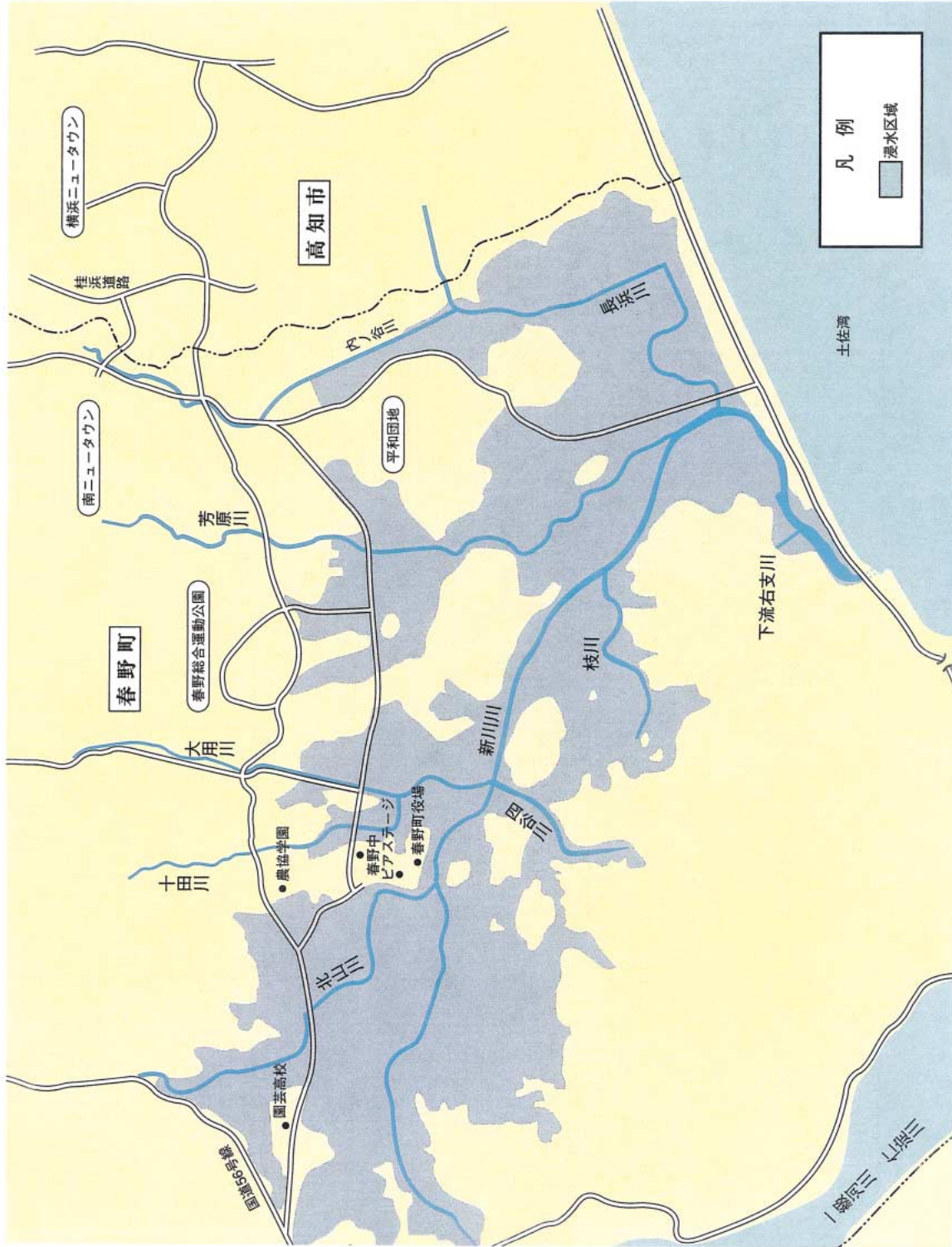


Fig. 2 新川川の浸水状況 (高知県『新川河川改修事業』2000年より引用)

第 章 周辺の地理・歴史的環境

1 地理的環境

高知県は四国の南部に扇状に広がり、北は四国山脈に隔てられ、他の三方は海であり長い海岸線を有する。西分増井遺跡のある春野町は、県中央部に広がる高知平野の西に位置する。北を高知市、西を土佐市、西北を伊野町に接し、南は太平洋に面する。地形的には町の北側に標高200m以上の山脈が連なり、高知市との境をなす。西側には仁淀川が土佐湾に注いでおり、土佐市と隔てている。仁淀川は標高1,982mの四国の霊峰石鎚山に源を発する高知県第二の河川である。古来より水害の激しい川として、その分流である新川川とともに流れを変化させてきた。春野町中央部は仁淀川とその分流によって形成された堆積平野で、旧中州、自然堤防、後背湿地などの微地形が入り組んでいる。北側の山脈から派生する山脚が随所に形成され、侵食谷と山脚の微高地とが複雑な地形を成している。微高地上は集落の営まれるところとなっており、侵食谷の深い低湿地も現在は圃場整備され、盛土により園芸ハウスなどに活用されているが、現存する長谷、根木谷、大谷などの字名に、深田の名残を留めている。1998年9月に県下を襲った「高知豪雨」では、春野町も甚大な被害を被り、このとき中央部の低湿地部分はことごとく冠水し、かつての様子を彷彿とさせた。西分増井遺跡は新川川左岸に形成された自然堤防上に立地している。

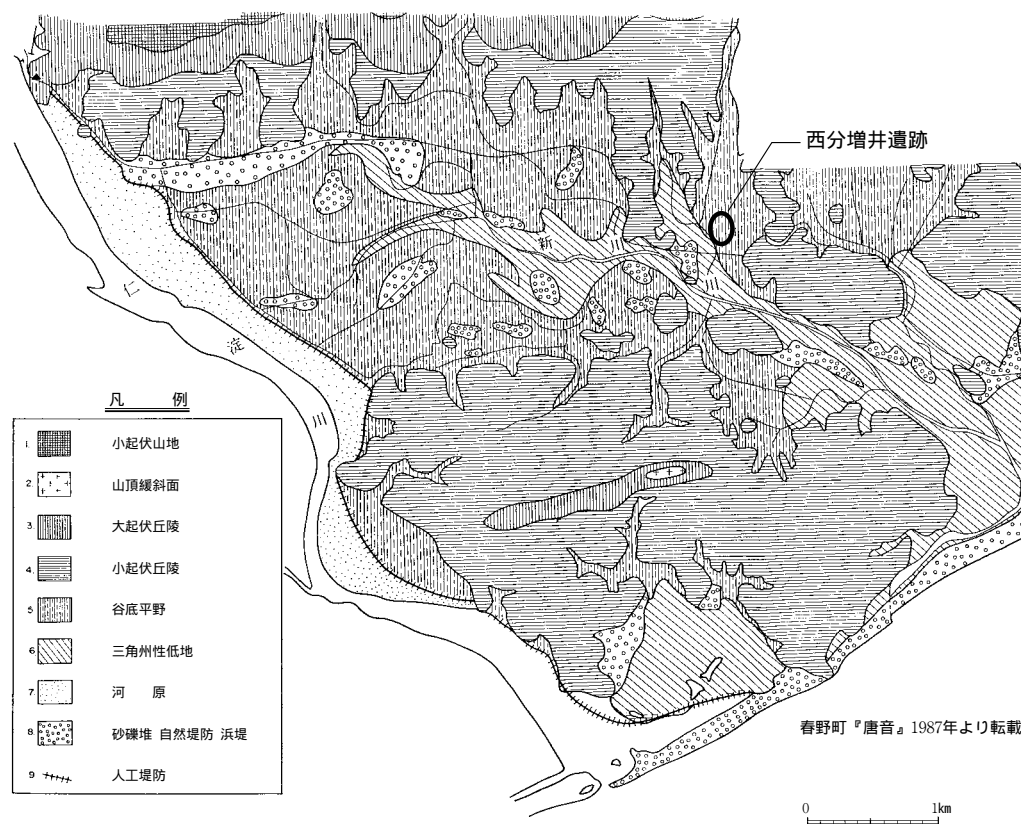


Fig. 3 新川川流域の地形区分図



Fig. 4 周辺の遺跡

2 歴史的環境

西分増井遺跡及びその周辺部においては、縄文時代後期にまで歴史を遡ることができる。山根遺跡は縄文時代後期～中世まで続く複合遺跡で、1973年から1980年にかけて4次にわたる学術調査と2次の緊急発掘調査が行われている⁽¹⁾。遺構は確認されていないが、後期前葉の松ノ木式土器や石器が出土している。西分増井遺跡では1990年に圃場整備事業に伴う調査で、縄文時代の土坑9基とピット19個以上が確認され、後期中葉の片粕式土器、後出する広瀬上層式土器および石鏃、磨製石斧、打製石斧、石錘、石棒等の石器が出土している⁽²⁾。遺物の出土状態から集落の一部であるとされ、周辺部には竪穴住居址の存在が考えられている⁽³⁾。これらは高知平野では田村遺跡群に次ぐまとまった資料であり、遺構の検出は初めてである。続いて王子遺跡では1991年に行われた調査で、縄文時代後期末から晩期前半の土器片が出土している他⁽⁴⁾、北川内遺跡において晩期中葉の資料がみられる⁽⁵⁾。

海岸部に位置する仁ノ遺跡において、前期前葉の西見当式土器が出土しており、当地域の弥生社会の開始期と考えられる。次いで西分増井遺跡で、「松菊里型住居」と呼ばれる前期中葉の竪穴住居址が1棟確認されており、南四国においては、田村遺跡以外での唯一の検出例である。この後、西分増井遺跡は、前期末葉の竪穴住居址3棟と土坑16基、および土器・石器も確認されている。山根遺跡では1976年に行われた第4次調査で、前期末葉の竪穴住居址と貯蔵穴や、中・後期の遺物が確認された⁽¹⁾。1980年の調査でも同様に前期の竪穴住居址が発見されており、当地における中心的な集落であったと考えられる。西分増井遺跡と山根遺跡は共に、県下で数少ない前期集落の様相を知る事ができる貴重な資料となっており、「田村遺跡の位置付け、評価とともに、南四国における弥生文化の成立・発展を考える上での重要な歴史的意義を有するもの」とされる⁽⁶⁾。その後、中期の資料を欠くが後期中葉になると、東江曲遺跡において竪穴住居址4棟と土坑、溝等が確認されている⁽⁷⁾。その内の1棟では高松平野からの搬入土器が出土している。

青銅器については西畑フケ遺跡が銅矛埋納遺跡として知られており、1873年と1877年に、山麓の自然崩壊により2本の銅矛が発見されている。1本は焼失したが、もう1本はその穂部と基部が残っており、中広型の式であると考えられている⁽⁸⁾。また1990年調査の西分増井遺跡では、土器洗浄中の発見ではあるが、古墳時代初頭の竪穴住居址であるST5埋土中から、鏡片が確認されて

Tab. 1 西分増井遺跡周辺の遺跡一覧

1	西分増井遺跡	弥生～古代	11	二ノ城跡	中世	21	巖島遺跡	古代～中世
2	大寺廃寺跡	弥生～奈良	12	西畑城跡	〃	22	八幡宮西ノ遺跡	中世
3	太用遺跡	弥生～室町	13	西畑遺跡	弥生～古墳	23	奥谷遺跡	弥生
4	山根遺跡	縄文～中世	14	フケ遺跡	弥生	24	吉良屋敷跡	〃
5	和田・片廻遺跡	〃	15	大上遺跡	古代	25	吉良城跡	弥生・中世
6	秋山遺跡	中世	16	二ノ堀遺跡	弥生～中世	26	後田遺跡	弥生～中世
7	小野遺跡	〃	17	森山城跡	中世	27	王子遺跡	縄文～中世
8	久保田遺跡	古代	18	天皇遺跡	〃	28	大小路遺跡	弥生～中世
9	仁ノ遺跡	弥生～古代	19	西ノ芝遺跡	弥生	29	西谷遺跡	中世
10	寺見ヶ谷遺跡	古代～中世	20	古市遺跡	中世	30	木塚城跡	〃

いる。

東江曲遺跡では、弥生時代後期中・後葉以降古墳時代前期初頭にかけても、引き続き集落が営まれ、土器の集中廃棄跡地や、土坑が確認されている。この時期、西分増井遺跡でも13棟の竪穴住居址と土坑、および方形周溝墓がみられる。中でもST 8からは、大量の土器が廃棄された状況で出土している。出土遺物の中にはいわゆる小型三種と呼ばれる小型器台や小型丸底壺の他、吉備型甕、東阿波型土器、庄内式土器等の搬入品が含まれており、庄内式の新相と布留式が共存する一時期に、時間的併行関係が求められている⁽⁹⁾。西隣の馬場末遺跡からも庄内式土器が出土している。これらの資料は地域間交流を知ることでできる好例でもある。また方形周溝墓の発見は、南四国では初例であり、当該期の墓制を考える上で貴重な資料といえる。

東江曲遺跡は古墳時代初頭を最後に終焉を迎え、西分増井遺跡も竪穴住居址 1 棟を残して、集落は急速に衰退していく。南四国においては、この時期を最後に一斉に集落址がみられなくなることが知られるが、当地域も例外ではない。しかしながら馬場末遺跡からは遺構は確認されていないものの、古墳時代初頭の土器を主体にしながらやや後続する時期の土器が比較的まとまって出土している⁽¹⁰⁾。後者について岡本健児氏は「馬場末式土器」と命名され、ヒビノキ 式土器に続く、南四国における第二段階の古式土師器として位置づけられた。当型式は、今日では「古式土師器 2 期」として編年されている⁽¹¹⁾。また王子遺跡、南浦遺跡⁽¹²⁾でも土師器高杯や甕が出土しており、いずれも水辺の祭祀に関するものと見られる。古墳時代の集落については、その存在が明らかになりつつあるが、古墳の確認例は僅少で、弘岡中横手に 7 世紀代の小型円墳が存在し、須恵器の杯が出土したとされるが、現存せず詳細は不明である⁽¹³⁾。

7 世紀代には、馬場末遺跡の西隣に大寺廃寺が建立される。発掘調査は行われておらず、伽藍配置等詳細は不明であるが、周辺の畑地から瓦が多く発見されている。当廃寺は南国市比江廃寺、高知市秦泉寺廃寺と並び、土佐国では最も古く、数少ない 8 世紀ないしそれ以前に遡る寺院跡である。百済系の有稜線素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土しており、秦泉寺廃寺で出土した高句麗の要素を加味した白鳳様式のものと同系譜と考えられている⁽¹⁰⁾。また、大寺廃寺の北側丘陵の大用遺跡では、須恵器の杯や甕等が出土しており、寺院に関連する窯跡の存在が考えられている。律令期になると、当地域は吾川郡仲村郷に編入され、付近には郡衙が置かれていたとの推定もなされている⁽¹³⁾。また山根石屋敷遺跡の第 4 次調査では緑釉陶器が多く出土している。

このように西分増井遺跡とその周辺部は、縄文時代後期から古代に至るまで高知平野西部、仁淀川下流域の中心舞台となってきたことが窺える地域であり、これらの資料の蓄積により東部の物部川下流域との比較研究が可能となっており、今後の研究が待たれる。

註

- (1) 岡本健児・廣田典夫『山根・石屋敷遺跡』春野町教育委員会 1976年
岡本健児・宅間一之・山本哲也『山根遺跡の発掘』春野町教育委員会 1981年
- (2) 春野町教育委員会『西分増井遺跡群発掘調査報告書』1990年
- (3) 出原恵三「考察」『西分増井遺跡群発掘調査報告書』春野町教育委員会 1990年
- (4) 山本哲也・曾我貴行・江戸秀輝『王子・西ノ芝遺跡の調査』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992年
- (5) 小嶋満博『北川内遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年

- (6)(3)に同じ
- (7)(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『東江曲遺跡現地説明会資料』2001年
- (8)岡本健児「高知県発見の銅矛について」『高知の研究』清文堂 1983年
- (9)(3)に同じ
- (10)岡本健児『日本の古代遺跡39 高知』保育社 1989年
- (11)出原恵三「小籠遺跡出土の弥生後期土器及び古式土師器」『小籠遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年
- (12)江戸秀輝『南浦遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1993年
- (13)春野町『春野町史』 1976年

第 章 調査の概要

1 各調査区の設定と調査期間

大用川左岸を 区、大用川右岸及び十田川右岸を 区に大区分した。廃土置き場や道路通行止め、用地買収の進捗などの関係から煩雑ではあったが各地区を以下のように小区分して調査を行った。

A区：試掘NO.16・17の周辺で、町道成岡-東林坊線より北側の調査区。

B区：町道とその周辺部の調査区。

C区：町道南側の調査区。

D区：大用側下流域の調査区。

A区：大用川右岸の最も大きな調査区で、更に北と南に分かれる。

B区：十田川右岸の調査区。

C区： A区の西隣の調査区。

D区： C区の西隣の調査区。

各調査区の面積と調査期間は下記の通りである。

調査区	調査面積	調査期間
A区	1,000m ²	2001年10月1日～2002年3月10日
B区	400m ²	同 上
C区	300m ²	2002年4月8日～2002年7月30日
D区	250m ²	2002年9月2日～2002年11月30日
A区	610m ²	2001年10月1日～2002年3月8日
B区	500m ²	同 上
C区	200m ²	2002年4月8日～2002年7月30日
D区	250m ²	同 上
	計3,510m ²	

2 A・B・C区の調査方法

A・B区は、2001年10月から併行して調査ができたが、C区については町道掘削が伴うことから着手時期が大幅におくれた。各調査区ともに表土、客土は重機を用いて掘削し、遺物包含層から下層については人力掘削で掘り下げた。ただし、今回報告する古代の遺構面は、客土直下で検出できた。遺構番号については、A・B・C区ともに統一して通し番号を、遺物の取り上げや遺構実測については、公共座標に依拠した4mメッシュを組み、東西方向に西からA・B・C・D・・・、南北方向に北から1・2・3・4・・・のNO.を付し、北西角のNO.を各4m方眼のNO.とした。遺物番号については、A・B・C区共に統一の通し番号を付けた。

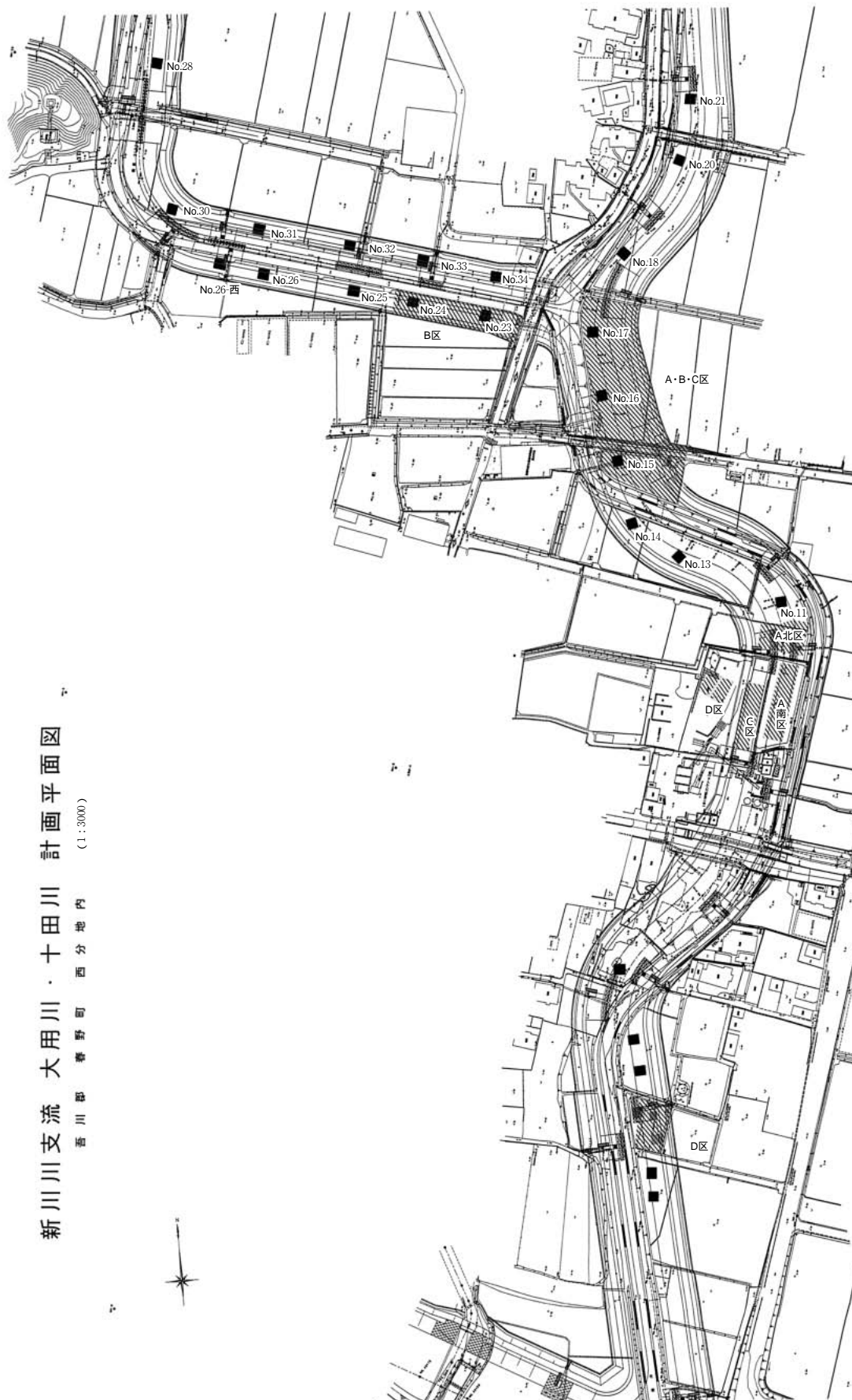


Fig. 5 試掘グリッド及び調査区位置図

3 A・B・C区の概要

当該調査区の検出遺構は、弥生・古墳時代の竪穴住居16棟、同土坑9基、古代の土坑15基、同柱穴、時期不明の掘立柱建物1棟などである。また弥生後期～古墳時代前期初頭に属する焼土や炭化物の広がりも数箇所検出されている。これらの多くには、砥石や被熱赤変した台石、叩き石などが伴っている。

遺物は、縄文後期土器から弥生土器、古式土師器、土師器、須恵器、製塩土器、青銅器、鉄器が出土している。今次報告の古代の遺物については、各土坑から8世紀代を中心とする比較的まとまった土師器、須恵器等が出土しており、これまで良く解っていなかった高知平野西部の古代史について一定の具体像を与えるものとして注目されよう。

青銅器と鉄器の出土も注目される。青銅器は、すべて破片ではあるが竪穴住居床面や包含層中より銅鐸、銅矛、銅戈、鏡、銅釧など18点が出土している。一つの遺跡からこれ程多種類の青銅器が出土したことは全国的にも例のないことであり、出土状況や分布論についても青銅器一般に対するこれまでの考え方に再考を迫るものである。また鉄器は、製品は僅少なながら製作途中で生じたと考えられる鉄片が2,000点近く出土し、多量の砥石や叩き石、使用痕跡のある被熱赤変した台石などを大量に伴っている。これらの遺物は、当遺跡において鉄器製作の行われたことを示唆する遺物であり、南四国においては初めての事例である。これらについては、竪穴住居址など遺構と共に弥生・古墳時代編として次年度に報告する予定である。

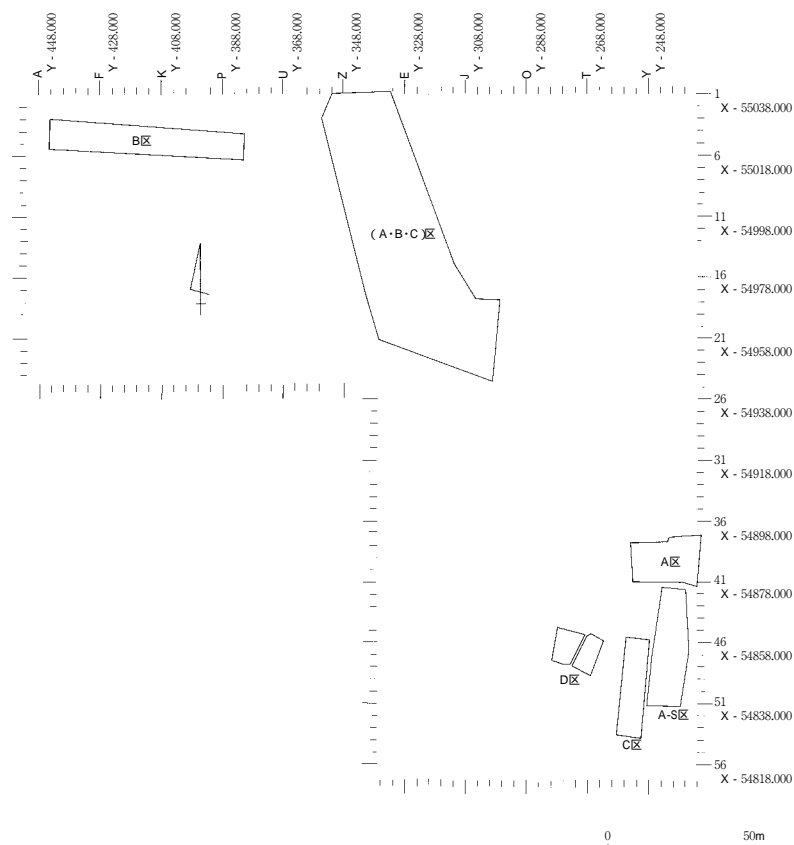


Fig. 6 調査区位置図 (S = 1/2000)

第 章 調査の成果

1 基本層準

調査区は、現況水田であり耕作土の下に厚さ30～50cmの客土の堆積が見られた。この客土は圃場整備の際に入れられたものである。客土除去すると、古代の遺物包含層はごく薄くしか残存せず、部分的には弥生時代の包含層が露出していた。基本層準は調査区の南北に残したバンク東壁の層準を示す。

層：黄色シルトで均質なシルト状の地山層である。縄文時代晩期の遺構検出面である。

層：黄茶色シルトで弥生時代後期の遺物包含層で層厚20cm前後を測る。

層：茶色シルトで弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物包含層で層厚40cm以上を測る。北に向かって緩やかに傾斜し層厚を増している。

層：濃茶褐色シルトで鉄を多く含み、赤く変色する。弥生時代から古墳時代前期の遺物包含層であり、古代の遺構検出面である。圃場整備の際に削平を受けたものと考えられ、一部でしか認めることができない。

分層、遺構検出は困難を伴った。遺構検出では古代の遺構は、埋土に多くの灰、炭化物を含んでいたことから比較的容易であったが、弥生時代、古墳時代の遺構検出は、多くの場合 層上面での検出となった。

2 検出遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

SB1 (Fig. 9)

調査区中央で確認された、4間×2間以上の南北棟で、ほぼ真北を向く。柱間距離は梁間が1.80mと1.90mで、桁行が1.64～2.00mを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

(2) 柱列

SA1 (Fig. 9・27)

調査区中央東寄りで検出された、4間以上の柱列である。東側は調査区外に続く可能性がある。また柱穴規模からも建物跡の可能性はあるが、他の柱穴は確認されなかった。柱列方向はN - 78° - Wで、SB1に直行する。柱間距離は1.46～1.60mを測る。P29からはFig.27 - 217の須恵器杯が出土している。

SA2 (Fig. 9)

調査区中央で検出された、3間の柱列である。柱列方位はN - 86° - Wで、SB1に直行して、重複する。柱間距離は2.00～2.60mを測る。



Fig. 7 区遺構配置図 (S = 1/300)



(3) 土坑

SK 1 (Fig.10)

調査区の東南に位置する。長軸2.40m、短軸1.80mの楕円形プランを有する土坑である。深さは50~60cmを測り、床面は段状をなし北側半分が5~20cm程高くなっている。壁は直線的に立ち上がり断面は台形状を呈する。埋土は、層：茶黄色シルトで部分的に焼土の薄い層を挟んでいる。層：灰黄色粘土で炭化物を多く含み、上層に焼土の薄い層を挟む。層：灰色粘土で炭化物を多く含む。層：黄茶色シルトで北側にのみ堆積が認められる。層と層との間には厚さ1cm未満の炭化物が広く堆積している。

遺物は、土師器、須恵器、製塩土器、土錘、砥石などが出土している。土師器は杯底部、皿(1・3)、蓋(2)、高杯脚部(4)が見られる。これらの土器は、ヘラミガキや暗文が施されるなど全体に丁寧な作りのものが多い。須恵器は杯(7~16)、蓋(5・6)、壺(17)、甕(18)が見られる。図示し得なかったものも含めて須恵器の供膳形態を口縁部の点数で見ると、杯15点、蓋5点、鉢1点である。杯は高台付きのものが多い。同様に土師器は皿2点、蓋1点である。供膳形態の土師器:須恵器の比率を、細片も含めた重量比で見るとおおよそ1:2となる。製塩土器(19)は、細片を含めて95gが出土している。土錘(20)は図示できなかったものも含めて2点出土している。この他粘土塊が数個体、130g出土している。砥石は大小5点、石材はすべて砂岩である。

これらの遺物は、主に層から出土しており、特に両層間に堆積した炭化物の上に散乱した状態で出土している。床面出土の遺物は、須恵器坏(13)のみである。遺物の多くは、層が堆積した直後に炭化物などと共に廃棄されたものと考えられる。須恵器杯(16)のように明らかに混入と考えられるものもあるが、床面出土の土器と層出土の土器とは同時期のものであり、一括性の高いものと考えられる。

SK 2 (Fig.12)

調査区の東南に位置する。長軸1.20m、短軸0.92mの楕円形を有する土坑である。深さは30cm前後を測り、床面は僅かに舟底状を呈する。埋土は、層：暗灰色粘土で炭化物を多く含む。層：灰黄色粘土。

層：灰茶色粘土である。埋土中には弥生土器細片が多く含まれている。

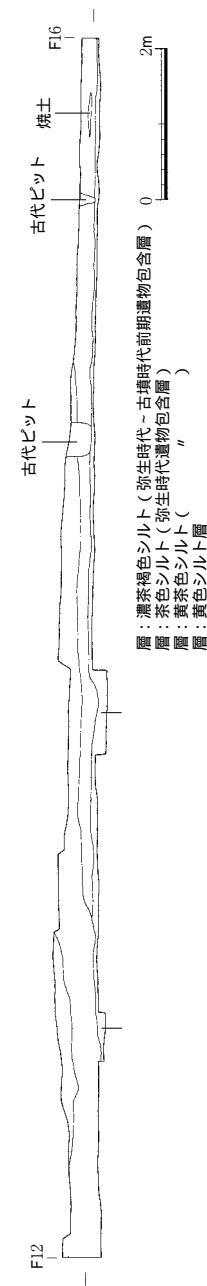


Fig. 8 基本層序

古代の遺物は、土師器が圧倒的に多く須恵器は僅かに細片2点を認めるのみである。土師器は皿、杯(26・27・29~31)、椀(28)、甕(32)が見られる。この他黒色土器A類椀(33)が1点出土している。土師器甕(32)が層出土で、他は全て層からの出土である。

SK 3 (Fig.13)

調査区の南寄り中央部にあり、SK11と切りあっている。長軸1.65m、短軸0.80mの楕円形プラン

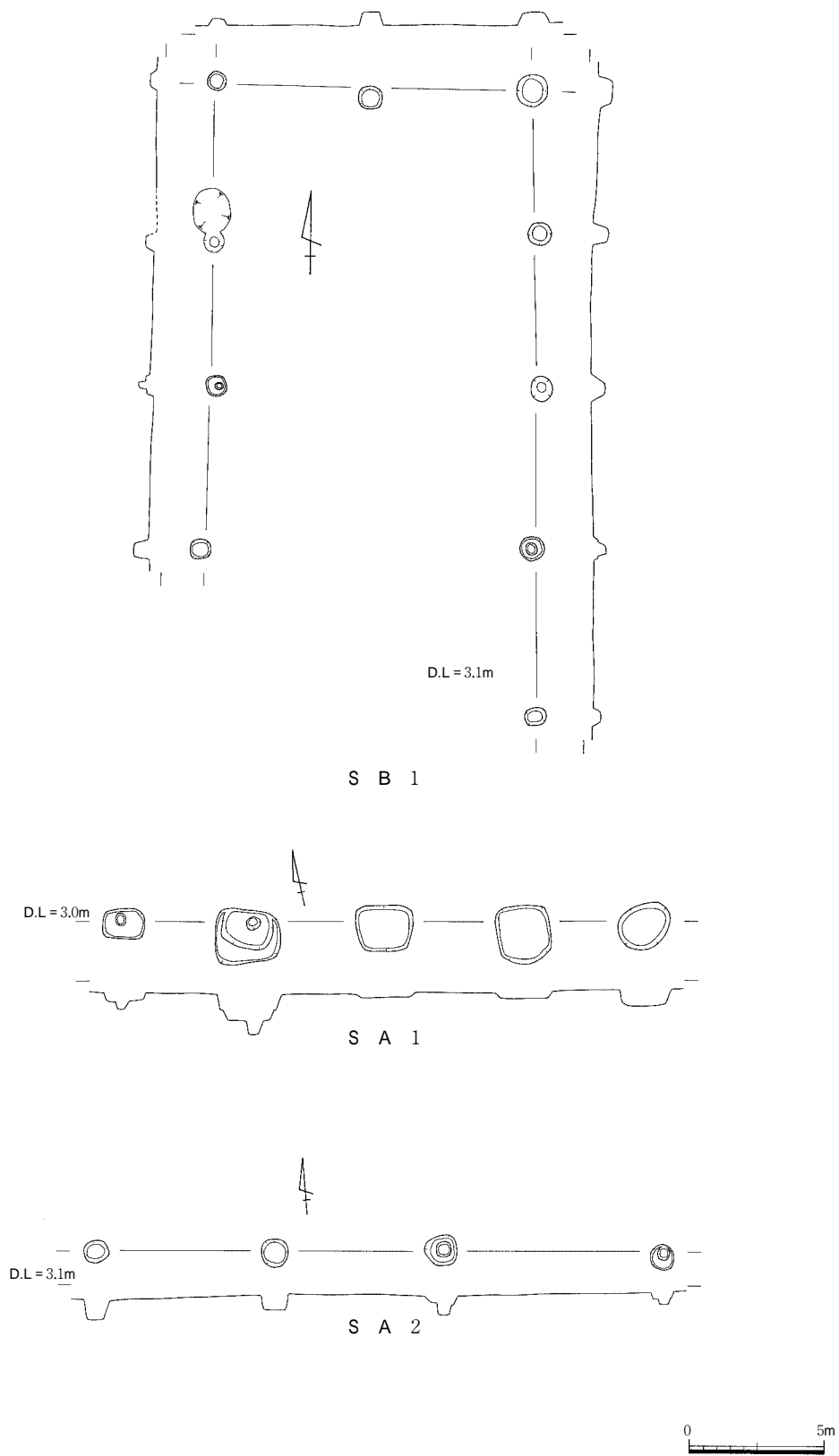


Fig.9 SB1、SA1、SA2 遺構平面図及びエレベーション

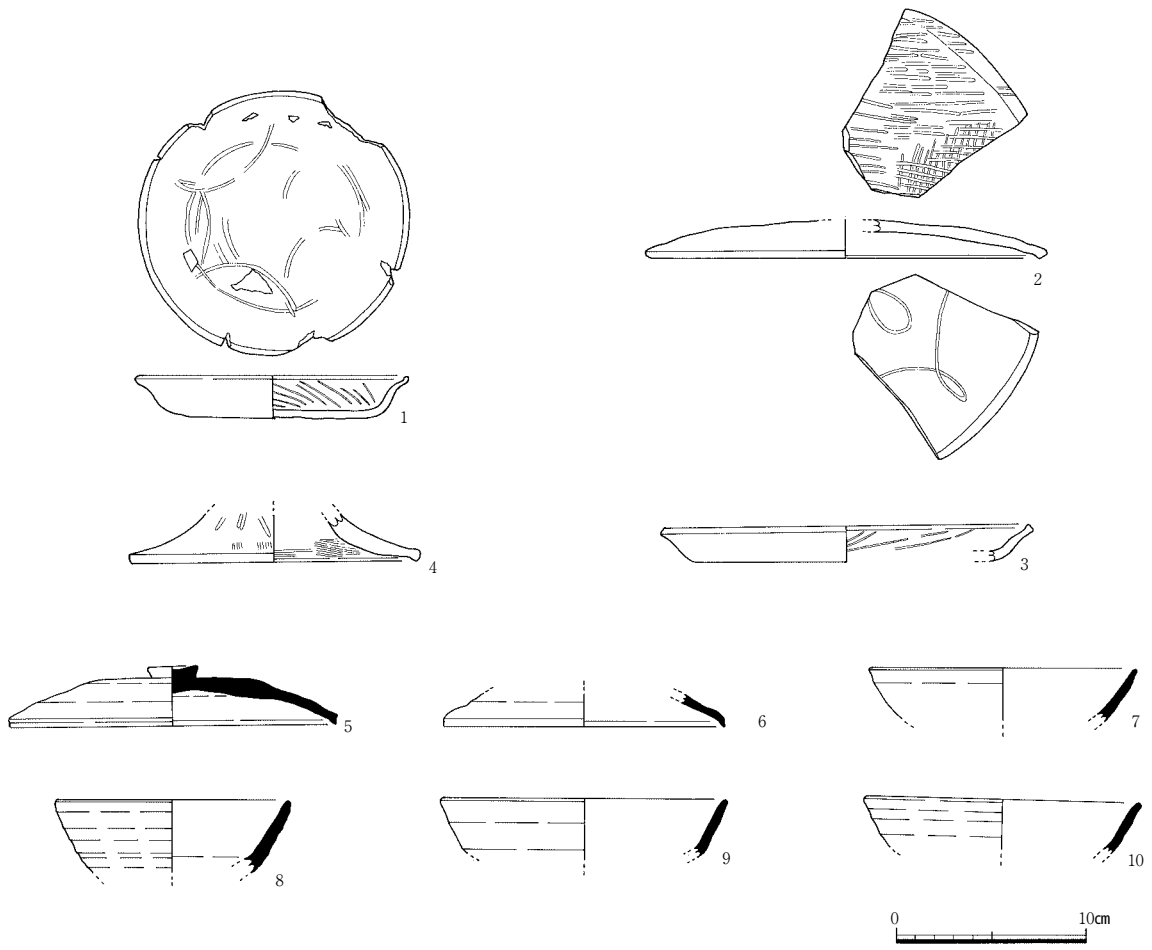
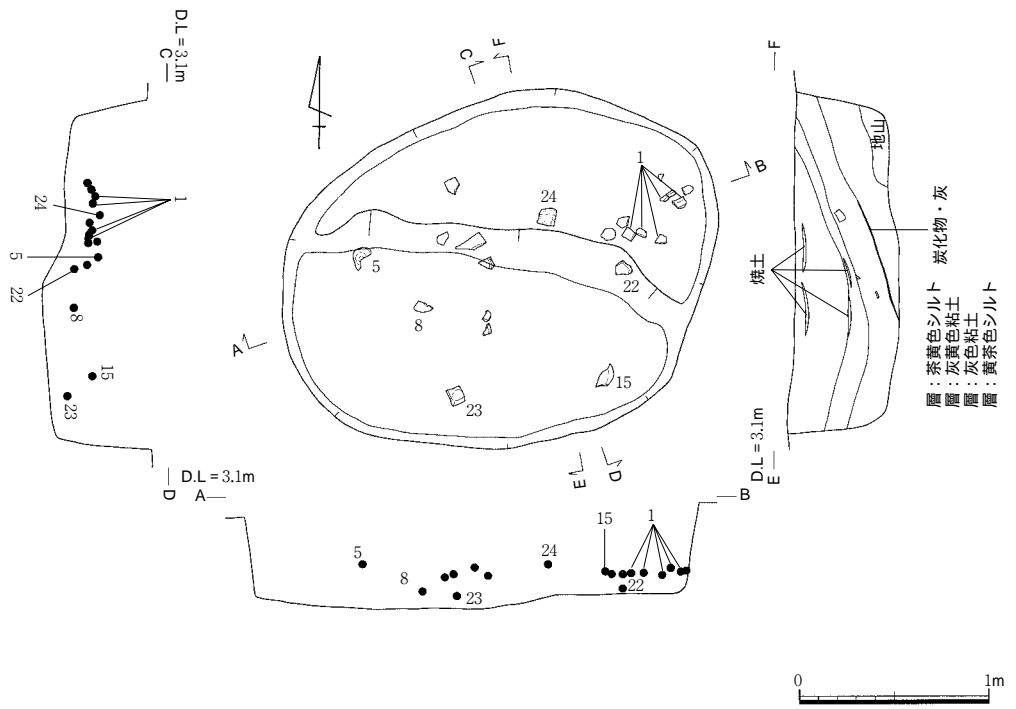


Fig.10 SK1 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

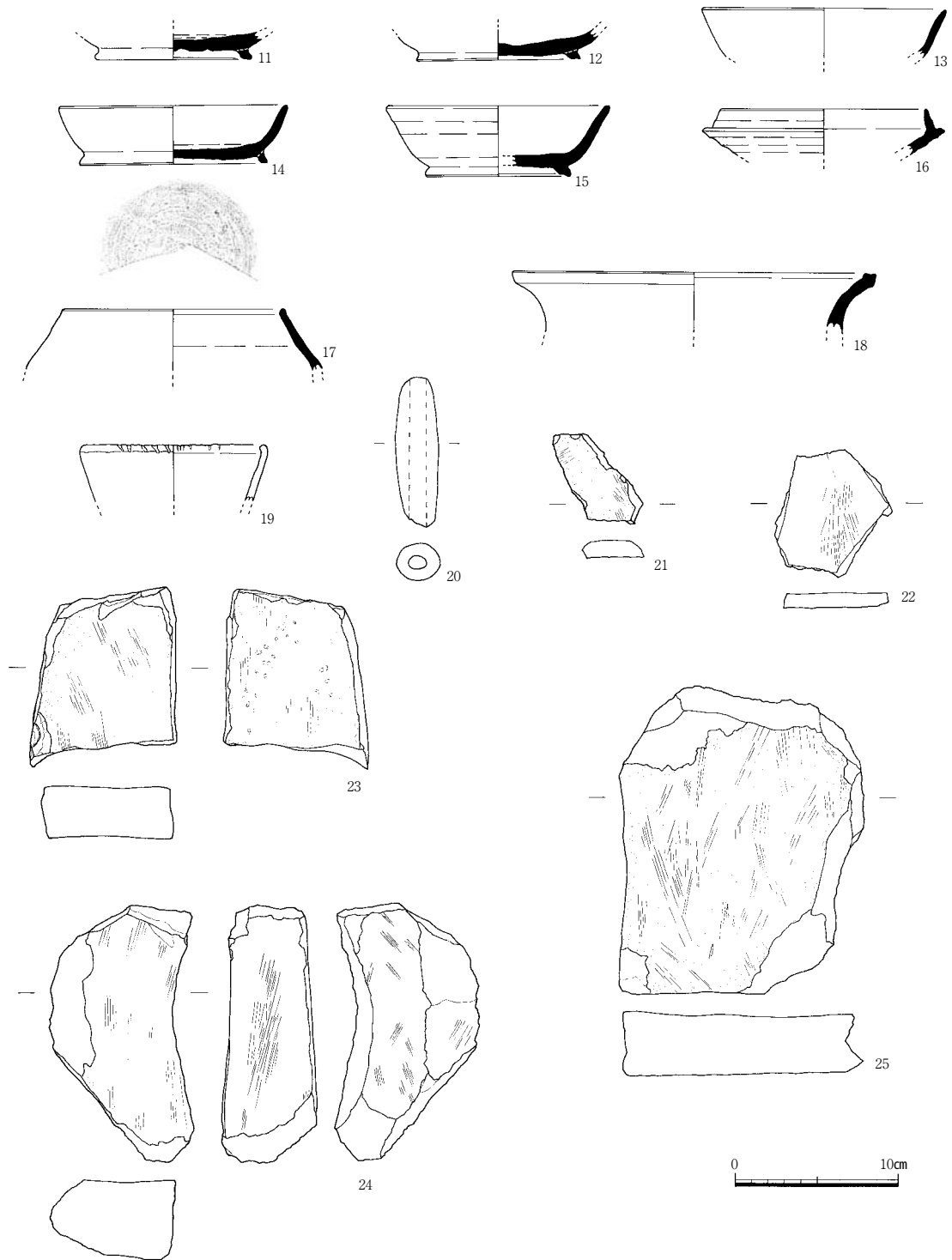


Fig.11 SK 1 出土遺物実測図 (20はS = 1/3)

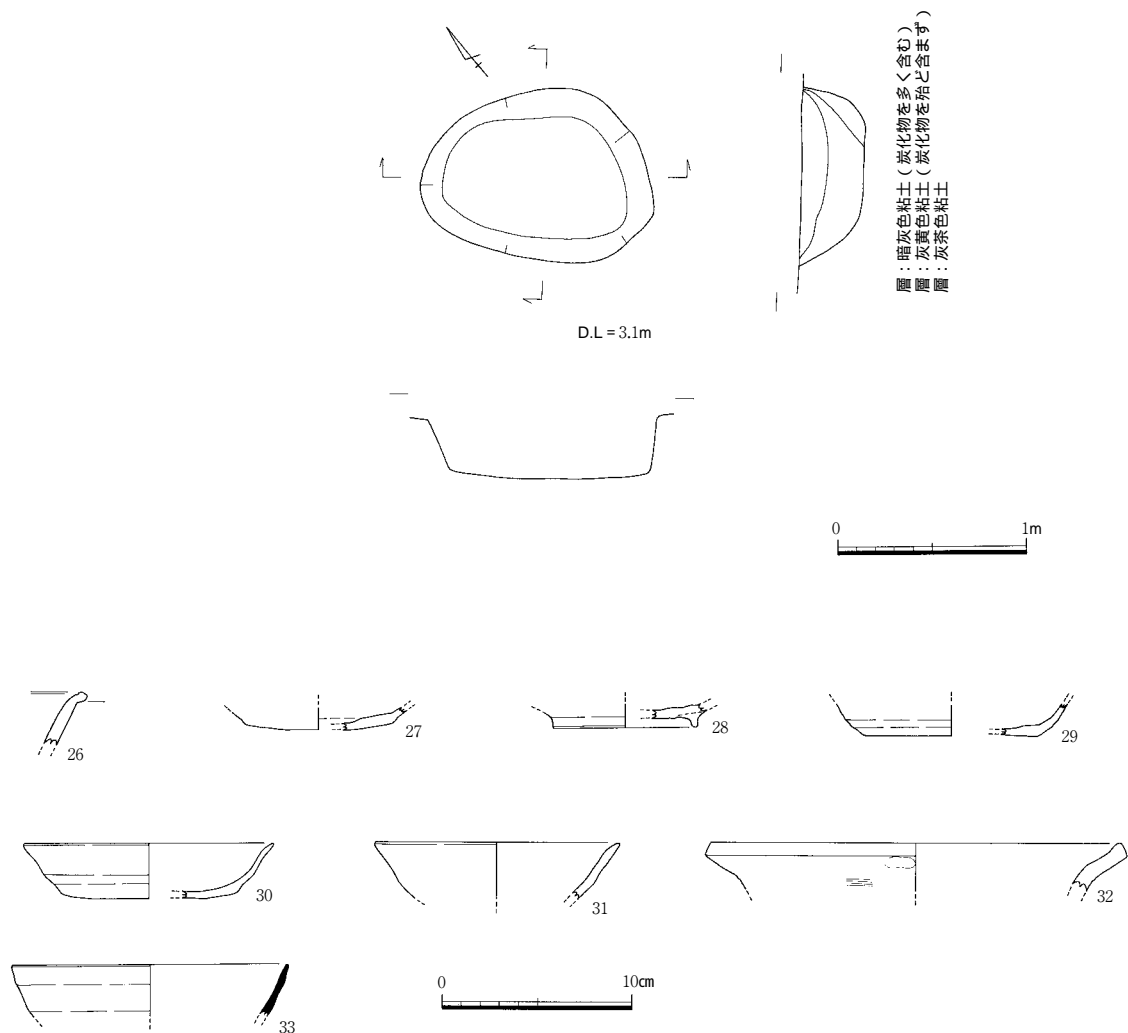


Fig.12 SK2 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

を有する。深さは40cm前後を測る。検出時点では、SK11と同一の土坑として捉えていた。掘削の途中で各々独立した遺構であることが判明したために西側の肩部は明確にすることができない。

埋土は、層：暗灰色粘土で炭化物を多く含む。層：黄色シルトで遺物をほとんど含まない。

層：暗灰色粘土で炭化物を多く含む。層：灰黄色粘土である。

遺物は、土師器、須恵器、製塩土器、土錘、瓦片、粘土塊、鉄片が出土している。土師器は皿(34~37)、杯(38~40)、甕(41)が見られ、皿には37のように外底にヘラミガキを施したものも認められる。皿35~37は、図示したように西壁の立ち上がり部から出土している。須恵器は皿(42・43)、杯(44・45)、高杯脚部(46)が見られる。図示し得なかったものも含めて口縁部片の点数で供膳型態の組成比を見ると、土師器は皿7点(19.4%)、杯10点(27.8%)、須恵器は皿10点(27.8%)、杯8点(22.2%)、高杯1点(2.8%)であり、土師器と須恵器の比率はほぼ同等である。製塩土器(47~52)は、細片が多いが、その総重量は1,020gである。土錘も多く出土しており、

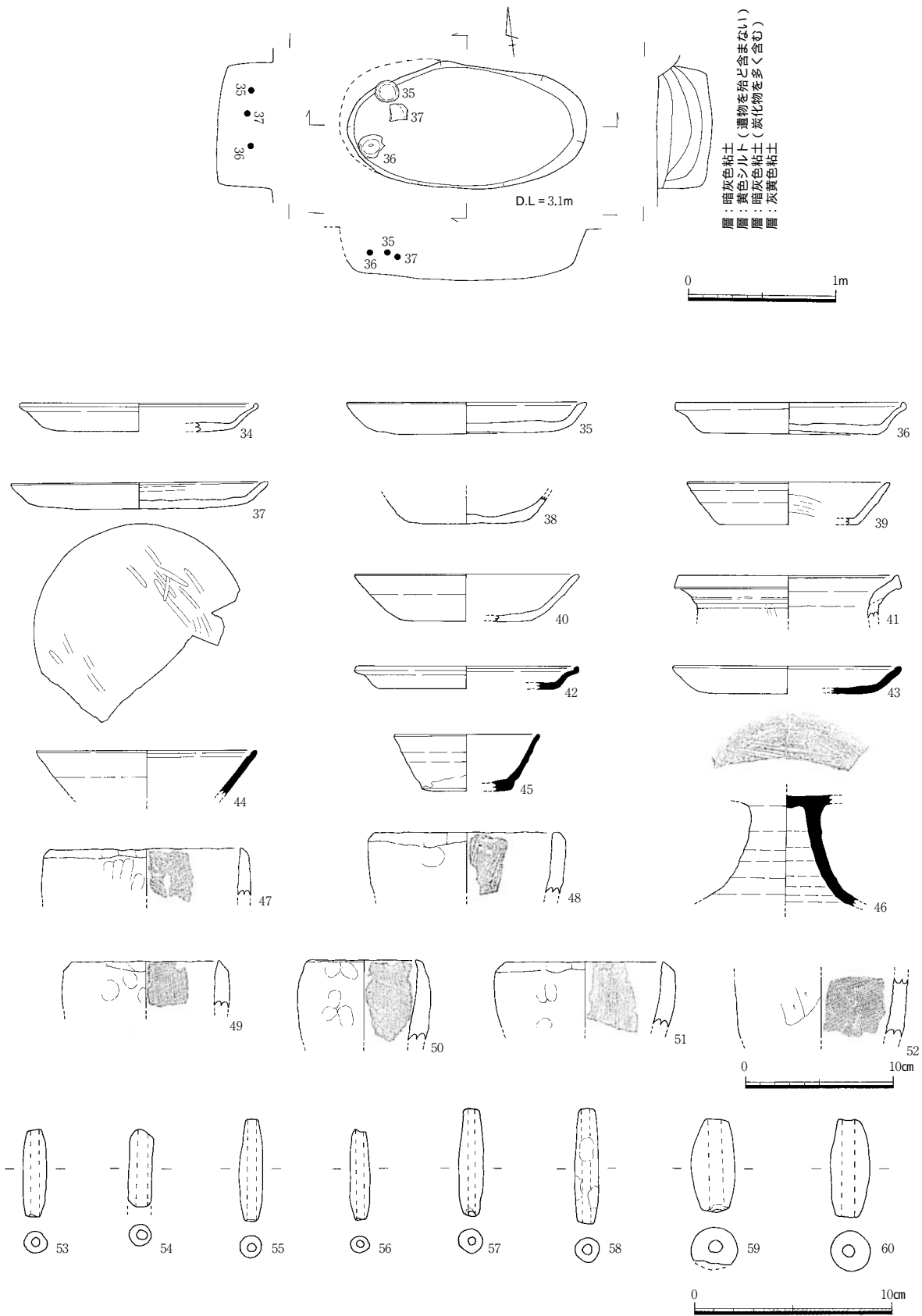


Fig.13 SK3 遺構平面・セクション・エレベーション及び土遺物実測図

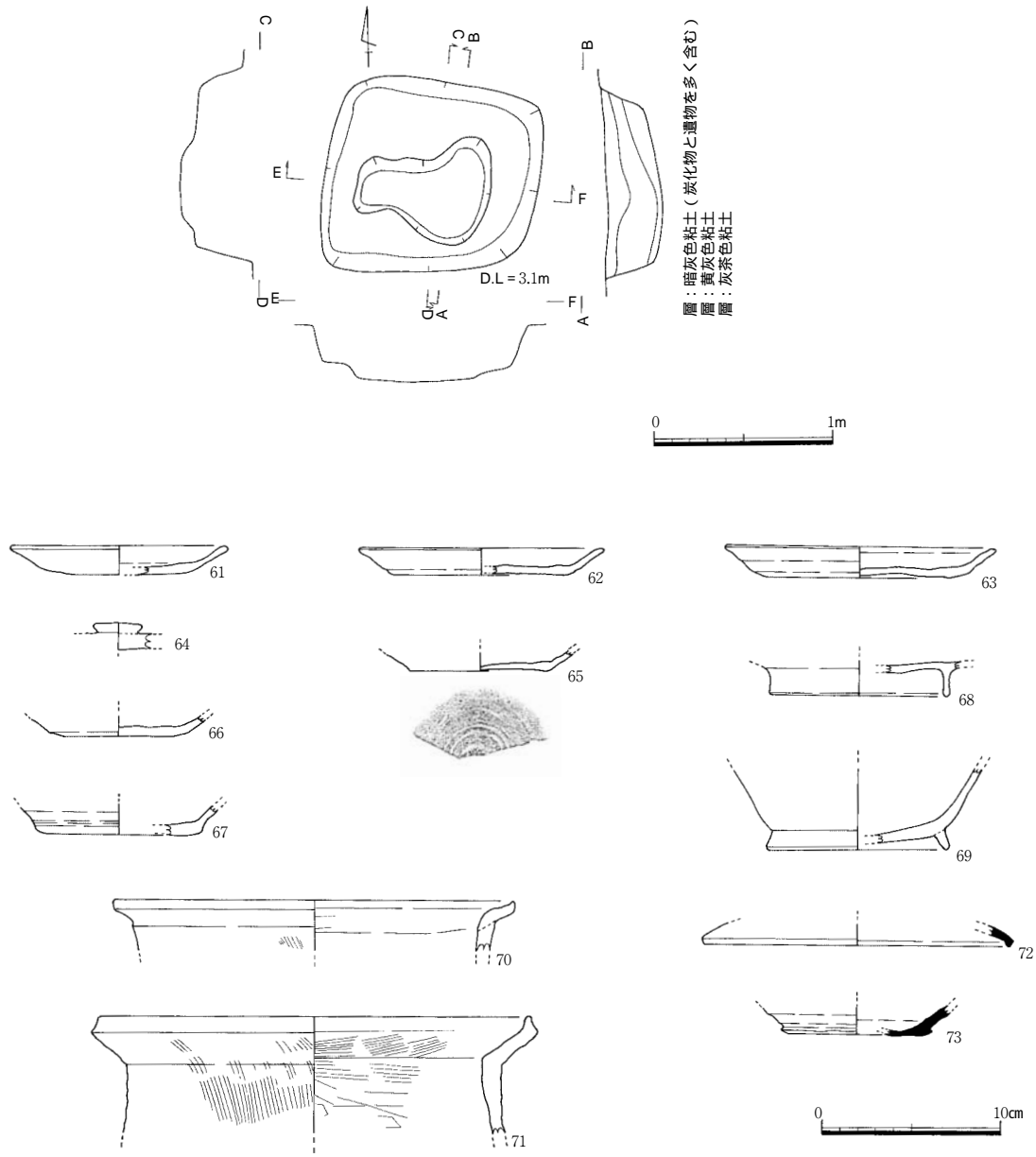


Fig.14 SK 4 遺構平面・セクション・エレベーション及び土遺物実測図

細長いタイプ(53~58)と太いタイプ(59・60)がある。この他瓦の平瓦細片と粘土塊数点(25g)鉄片2点が出土している。以上の遺物は 層からの出土が多く、一括性の高いものとして捉えることができる。

SK 4 (Fig.14)

調査区の東南、SK 1 の約2.4m南に位置する。長軸1.16m、短軸1.12mの隅丸長方形プランを呈する。深さは約22cmを測り、床面中央に長軸74cm、短軸26~62cm、深さ約10cmの不整形の掘込みが認められる。壁は斜め上方に立上がり、断面形は台形状を呈する。埋土は、 層：暗灰色粘土で炭化物と遺物を多く含む。 層：黄灰色粘土。 層：灰茶色粘土である。

遺物は土師器、須恵器が出土している。土師器は皿(61~63)、蓋(64)、杯(65~69)、甕

(70・71)がみられる。皿の底部は切り離し後、削り調整を施しナデ調整で仕上げられている。杯69は、高く外側に踏ん張る高台をもつ。須恵器は蓋(72)、杯底部(73)の2点のみである。73は底部外面に×印のヘラ記号が認められる。図示し得なかったものも含めて供膳形態を口縁部点数で見ると須恵器1に対して土師器30であり土師器が圧倒的に多い。この他に弥生土器細片が少量出土している。これらの遺物は64・69が床面から、他は 層から出土している。

SK 5 (Fig.15・16)

調査区の中央部にあり、SK 3・11の北側に近接する。長軸2.50m、短軸1.20～1.78mの不整楕円形プランを呈する。深さは41～53cmを測る。壁は東西壁は直線的に立ち上がるが、南北壁は階段上に立ち上がる。埋土は 層：灰褐色粘土で炭化物、遺物を多く含む。 層：暗灰色粘土で炭化物・灰・焼土が多量に堆積する。また激しく被熱した砂岩角礫が3点含まれていた。 層：灰黄色粘土で遺物を少量含む。

遺物は 層に最も多く含まれ、土師器、須恵器、緑釉陶器、製塩土器、土錘、鉄片が出土している。土師器は皿(74～79)、蓋(81～83)、杯(84～98)、高杯(80)、甕(99・100)がみられる。このうち供膳形態は、大半がヘラミガキや暗文が施されており、丁寧な作りである。杯は器高指数が22～23を示すものが多い。須恵器は皿(101～104)、蓋(105～108)、杯(109～117)、甕(118)がみられる。図示し得なかったものも含めて、土師器供膳形態を口縁部点数でみると、皿5点、蓋13点、杯31点である。また供膳形態の土師器：須恵器の比率を、細片も含めた重量比でみると、おおよそ2：1である。製塩土器(120～124)は細片を含めて約140点、1,340gが出土している。土錘は図示できなかったものを含めて23点出土している。全て細身で小型のものである。この他最大で70gを測る粘土塊が9点と、鉄片が2点出土している。粘土塊にはスサの付着しているものがみられる。これらの遺物のうち、土師器杯(94)、須恵器杯(109・110)は検出面からの出土であるが、大半は 層、 層からの出土である。 層から須恵器杯(111)が出土しているが、床面からの出土遺物はない。これらの遺物は 層が堆積した後、灰、焼土等と共に一時期に廃棄されたものと考えられ、一括性の高いものとして捉えられる。

SK 6 (Fig.17・18)

調査区中央西寄りに位置する。長軸2.18m、短軸1.52mの楕円形プランを呈する。深さは最大68cmを測り、底からなだらかに湾曲して立ち上がる。断面形は舟底状を呈する。埋土は 層：灰黄色シルト。 層：灰色シルト～粘土で遺物、炭化物を多く含む。 層：茶黄色粘土である。

遺物は土師器、須恵器、製塩土器、土錘、砥石などが出土している。土師器は皿(132・133)、蓋(134～136)、杯(137・138)、甕(139～141)がみられる。須恵器は蓋(142)、杯(143～147)、高杯(148)、壺(149・150)がみられる。須恵器・土師器ともに供膳形態はヘラミガキや、丁寧なナデ調整が施される等、全体的に丁寧な作りのものが多い。製塩土器(151～153)は細片を含め37点、計265gが出土している。155は石英粗面岩製の砥石である。4面に使用痕があり、一面には細い溝状の擦痕が認められる。この他粘土塊が9点出土しており、最大のもので10gを測る。供膳形態の土師器：須恵器の比率を、細片も含めた重量比でみると1：1である。これらの遺物は主に 層から出土している。須恵器蓋(142)、杯(144・145)、壺(149)が下層から出土しており、床上出土遺物は須恵器高杯(148)のみである。

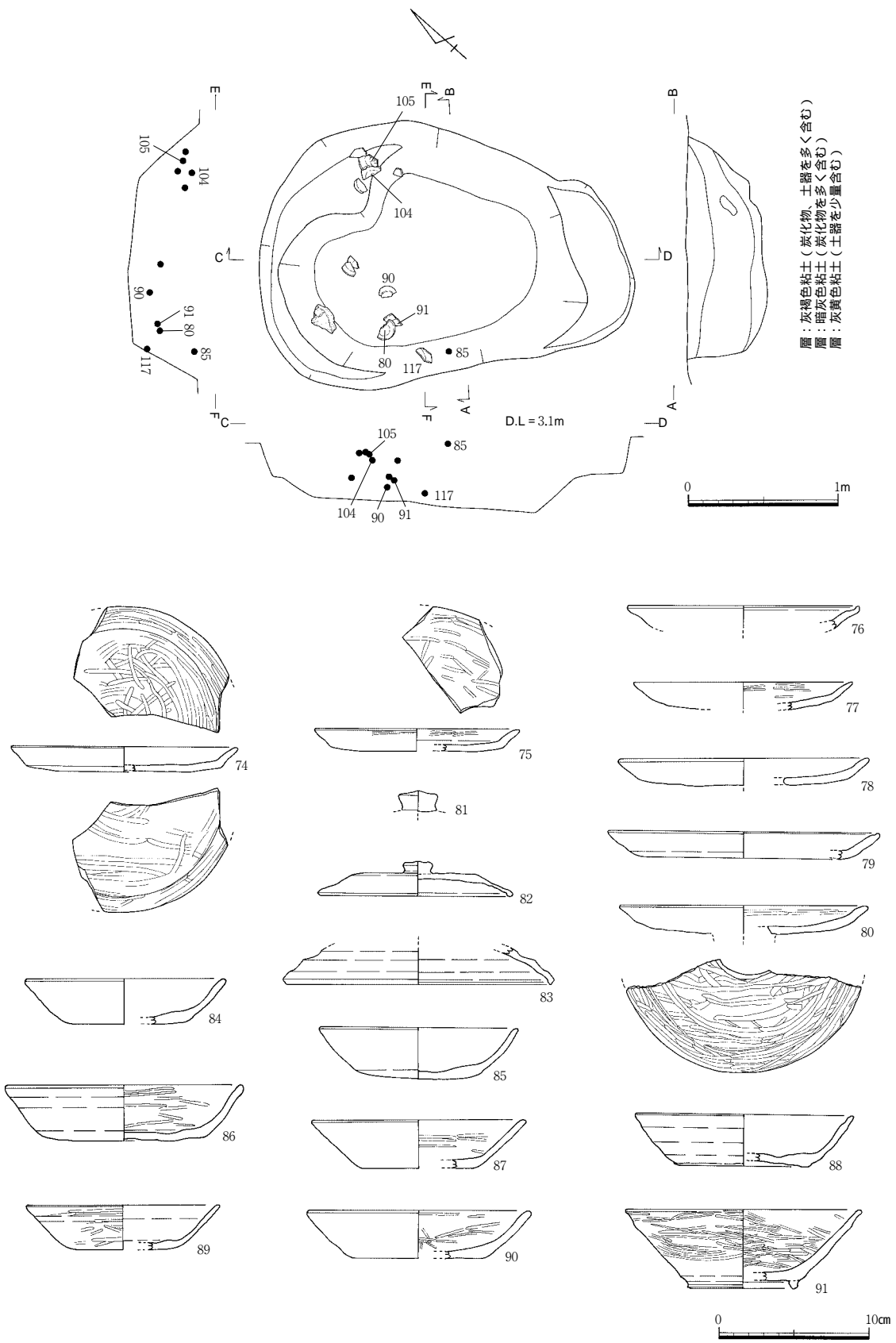


Fig.15 SK5 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

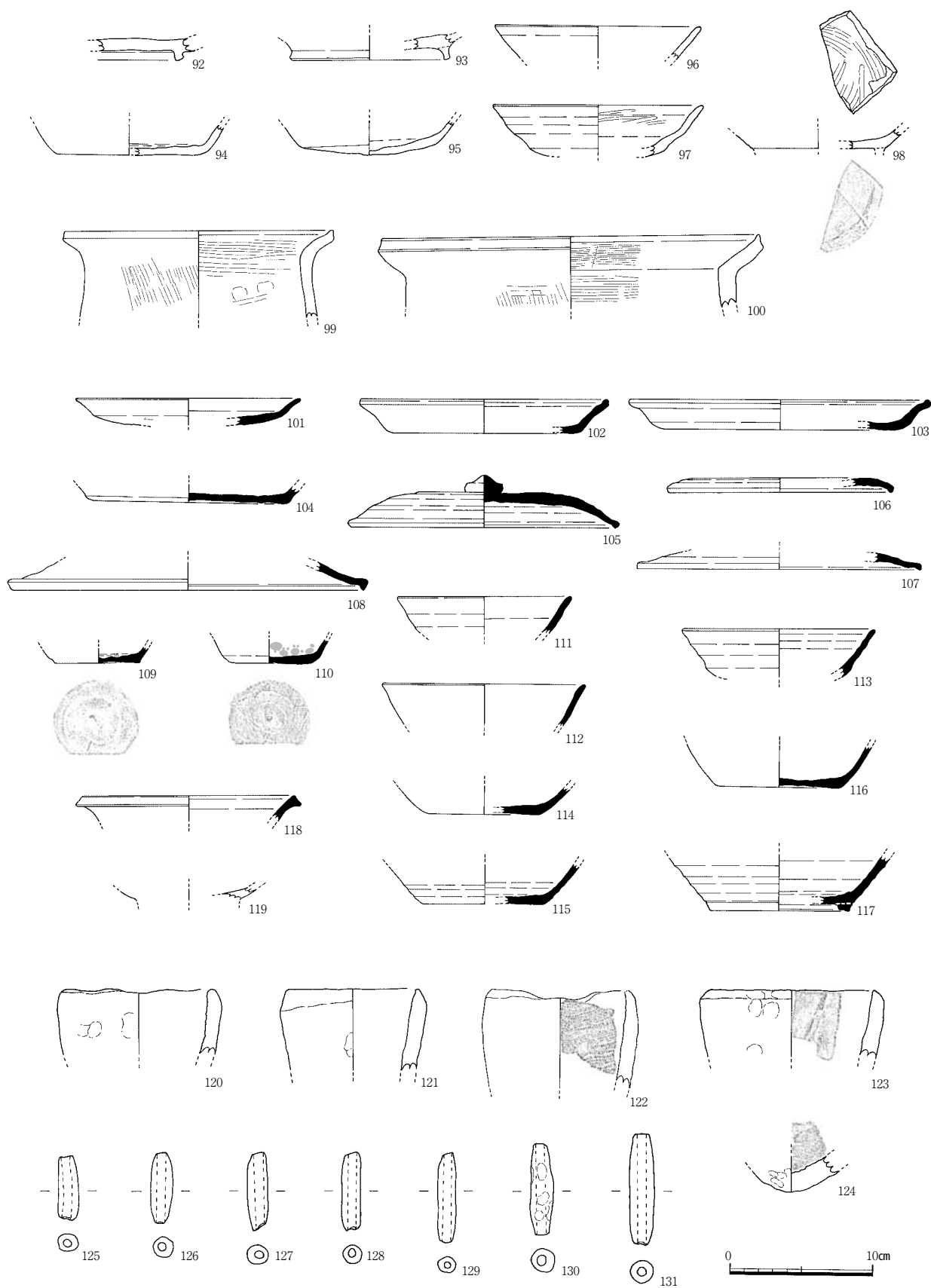


Fig.16 SK 5 出土遺物実測図 (125~131はS=1/3)

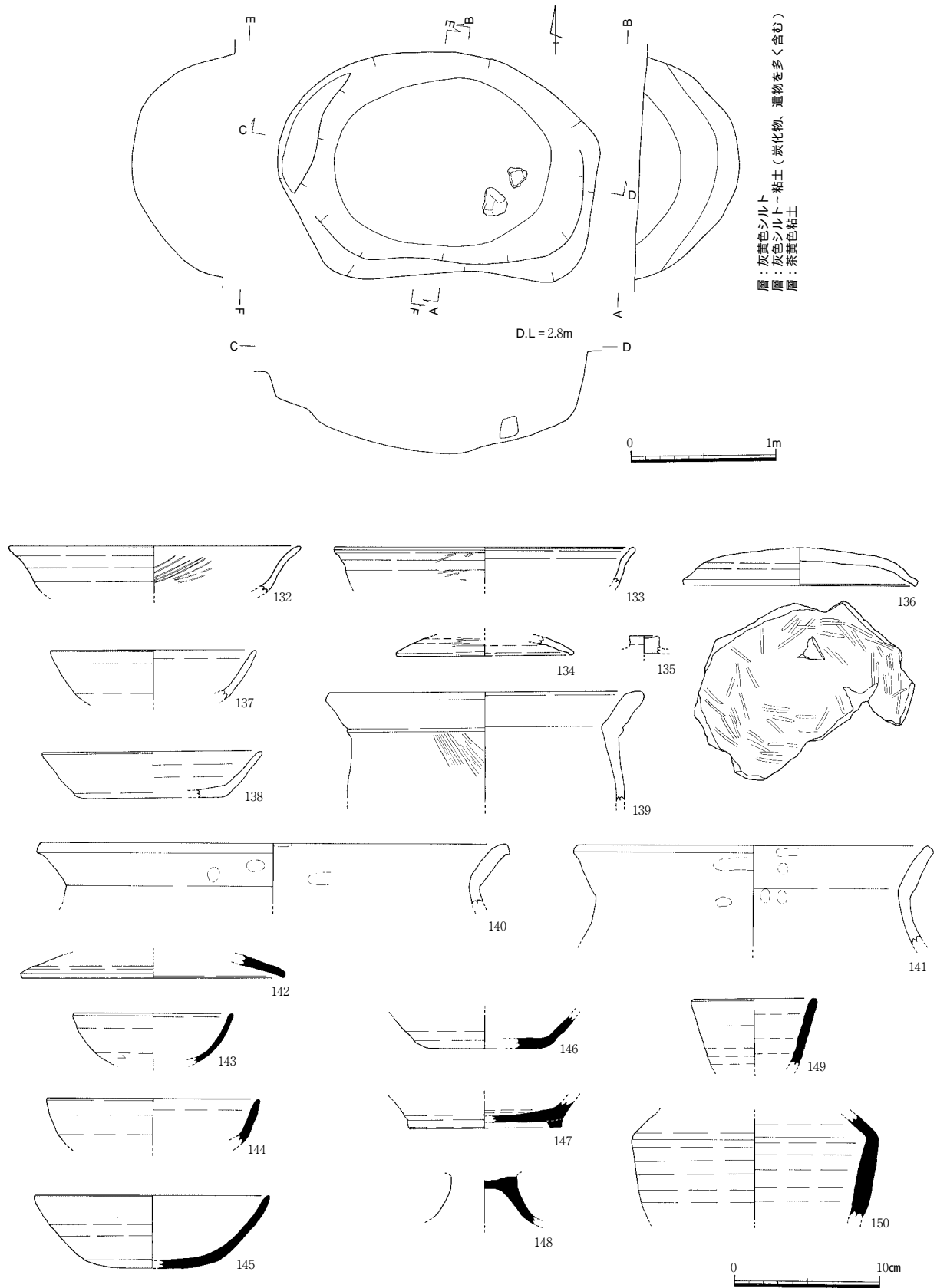


Fig.17 SK6 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

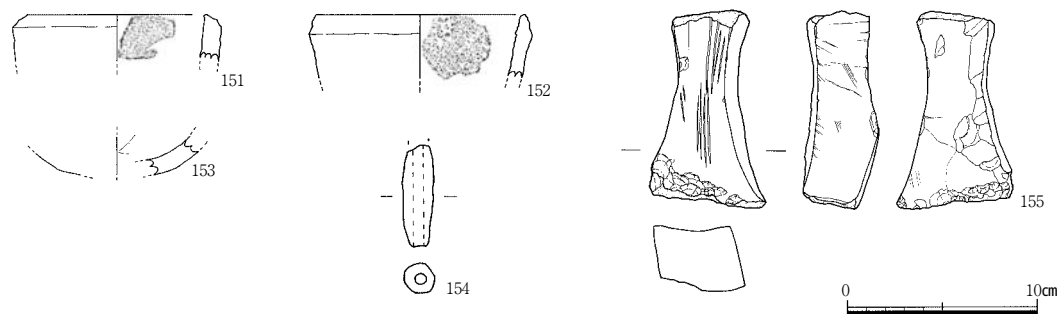


Fig.18 SK 6 出土遺物実測図 (154はS = 1/3)

SK 8 (Fig.19)

調査区中央に位置し、直径1.44mのほぼ隅丸方形プランを呈する。深さは20cmを測る。床面に24×16cm、深さ16cmのピットを有する。断面形は概ね舟底状を呈する。埋土は 層：灰黄色粘土。層：茶黄色粘土である。

遺物は土師器、須恵器、土製品、軽石が出土している。

土師器は皿(156)、杯(157・158)、甕(159)がみられる。杯(157)は赤彩が施され、調整も丁寧である。搬入品とみられる。164の土製品は土錘に似るが孔が貫通しておらず、用途不明品である。須恵器は杯(161・162)、蓋(160)、鉢(163)がみられる。杯(162)は外底に×印のヘラ記号がみられる。供膳形態の土師器：須恵器の比率を、細片も含めた重量比でみるとおよそ5：4となる。この他、製塩土器、粘土塊が出土している。製塩土器は図示し得たものはないが、細片が計230g出土している。粘土塊は2点みられ、最大15gを測る。以上の遺物は全て 層の上方からの出土であるが、出土状況から見て一括性の高いものと考えられる。

SK 9 (Fig.20)

調査区中央SK 6の東に隣接する。長軸1.50m、短軸0.92mの不整楕円形プランを有する土坑である。深さは12～18cmを測り、床面には24×18cmを測るピットがある。壁はなだらかに立ち上がる。埋土は 層：黄灰色粘土。層：灰茶色粘土で炭化物、灰、遺物を多く含む。炭化物、灰は中央に多く、ラミナ状に堆積する。

遺物は土師器、須恵器、製塩土器、鉄片が出土している。土師器は高杯(166)の他、供膳具細片が十数点、甕細片が二十数点出土している。166は搬入品とみられ、内面に暗文・ヘラミガキが施される。須恵器は皿(167)、蓋(168～172)、杯(173)がみられる。皿167は丁寧に作られており、内底部に同心円状の当て具痕があり、外底にはヘラミガキ状の調整が施される。土師器：須恵器の比率を、細片も含めた重量比でみるとおよそ5：6となる。この他製塩土器の細片220gと、鉄片1点が出土している。

SK10 (Fig.21)

調査区中央SK 9の東に隣接する。長軸0.84m、短軸0.62mの隅丸長方形プランを有する土坑である。深さ8cmの浅い皿状を呈する。埋土は灰茶色粘土単純一層である。

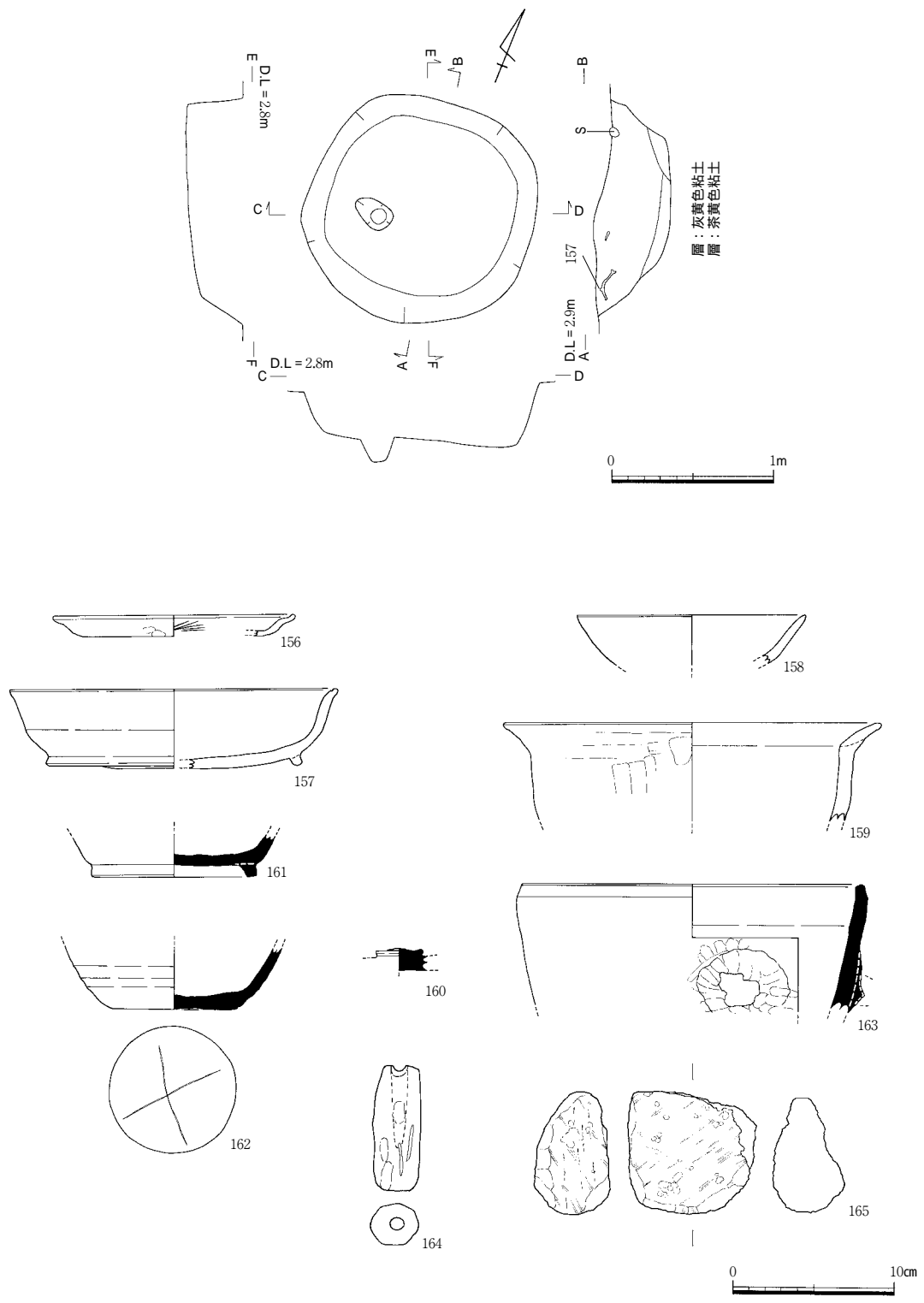


Fig.19 SK 8 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図 (164はS = 1/3)

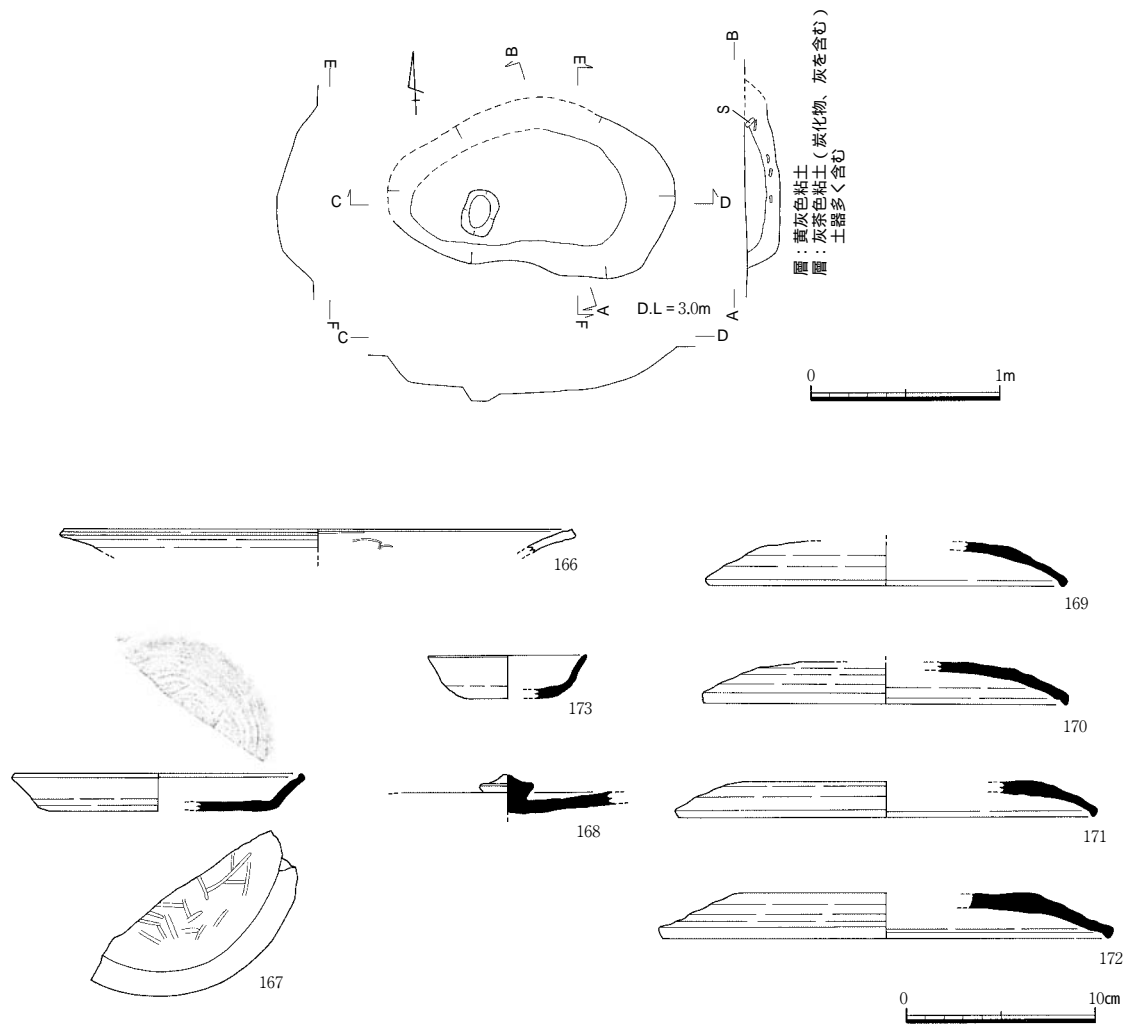


Fig.20 SK9 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

遺物は土師器、須恵器、製塩土器などが出土している。須恵器は蓋（174）の他、細片が2点、土師器細片は20点余みられ、製塩土器は総量150gを測る。この他鉄片が1点出土している。性格不明の小土坑である。

SK11 (Fig.21)

調査区南寄り中央部に位置する。前述したようにSK3と切りあっており、南側の肩部は明確にすることができなかった。長軸1.24m、短軸0.96mの楕円形プランを有する。深さ7~24cmで北側に向かって浅くなる。埋土は 層：灰黄色シルトで炭化物を少量含む。 層：暗灰色粘土で炭化物、遺物を多く含む。

遺物は須恵器、土師器、土錘（175）、製塩土器、鉄片がみられる。須恵器、土師器はいずれも細片であるが、中では土師器製の細片数が最も多い。製塩土器は総量75gを測り、鉄片は2点出土している。また弥生土器の細片が少量出土している。

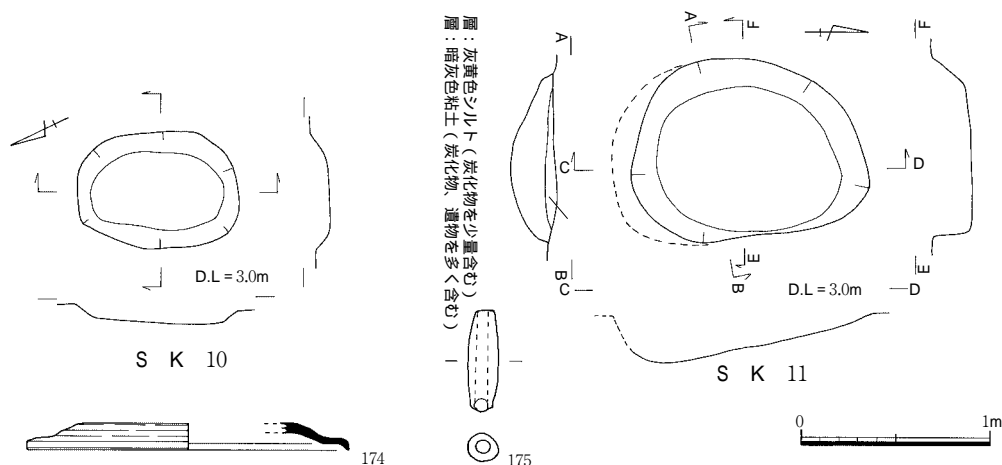


Fig.21 SK10、SK11 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図 (174はS=1/3)

SK12 (Fig.22)

調査区北東寄りに位置し東側は調査区外に出ている。長軸2.2m以上、短軸2.28mの不整楕円形プランを呈し、深さは42～56cmを測る。床は段状をなし、北東側が約10cmほど高くなっており、断面形は舟底状を呈す。土坑中央は試掘時のトレンチ調査により切られている。埋土は 層：灰黄色シルトで暗褐色粘土をブロック状に含む。炭化物・遺物が少量含まれる。 層：黄色シルト。 層：灰色粘土で炭化物・遺物を多く含む。 層：黄茶色シルトで灰色粘土をまだらに含む。炭化物・焼土を少量含む。

遺物は土師器、須恵器、叩き石などが出土している。土師器は皿 (176・177) がみられる。これらは2点とも手づくねによる成形で、暗文または暗文風のヘラミガキが見られるなど丁寧に調整される。176は外底に部分的に弱いヘラケズリ調整が施される。他に甕細片が約40点出土している。須恵器は皿 (178) 蓋 (179・180) 杯 (181・182) 壺蓋 (183) 甕 (184・185) がみられる。この他約半分が残存する土錘が2点、大きいものが12gを測る粘土塊2点、弥生土器片10点、3×2cm大の砂岩円礫が出土している。これらの遺物のうち182は混入したものと考えられるが、他は主に 層からの出土であり、層状に堆積する灰層の上下に散乱した状態であった。これらは灰とともに一括廃棄されたものとみられる。

SK14 (Fig.23)

調査区南西寄りに位置する。長軸1.60m、短軸1.36mの楕円形プランを呈し、深さは65cmを測る。南西側が10～30cmほど高くなっており、段状をなす。東西方向の断面形は台形、南北方向は、かなり凹凸をもって立ち上がる。埋土は 層：黄灰色シルトで炭化物を多く含む。 層：茶灰色粘土。 層：茶色粘土である。

遺物は土師器、須恵器、製塩土器などである。土師器は皿 (187) 甕 (188) がみられる。

須恵器は蓋 (189) 杯 (190・191) 掘り鉢 (192) がみられる。193は製塩土器であるが、器壁が薄く二次焼成痕跡がみられない。製塩土器は193を含め30gが出土している。このほか鉄片2点と粘土塊が2個出土している。これらの遺物は主に 層よりの出土であるが、一括性の高いものとみられる。

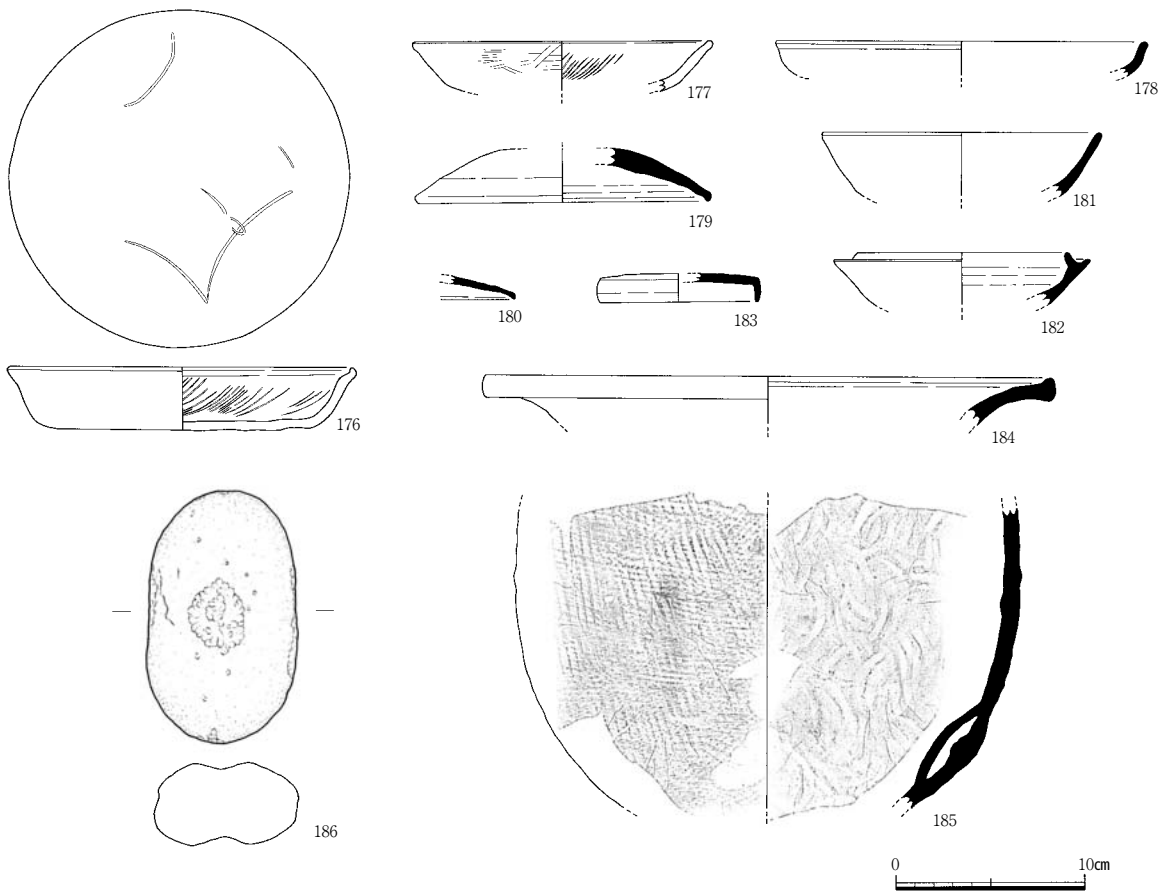
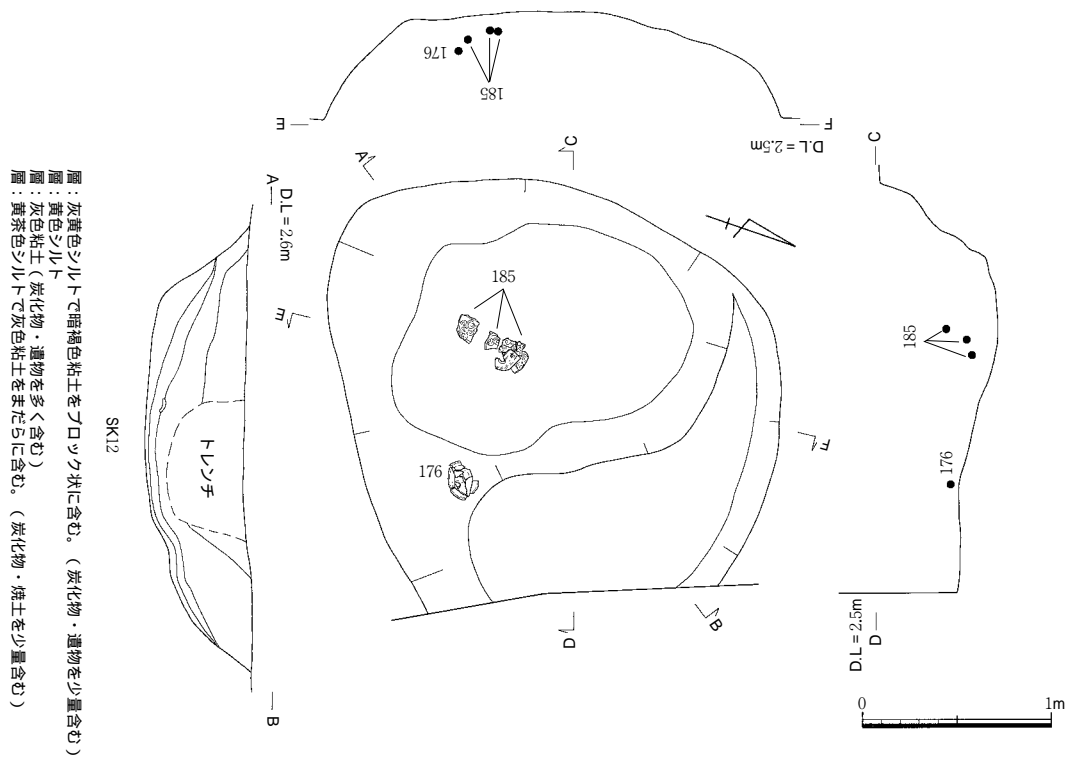


Fig.22 SK12 遺構平面・セクション・エレベーション及び土遺物実測図

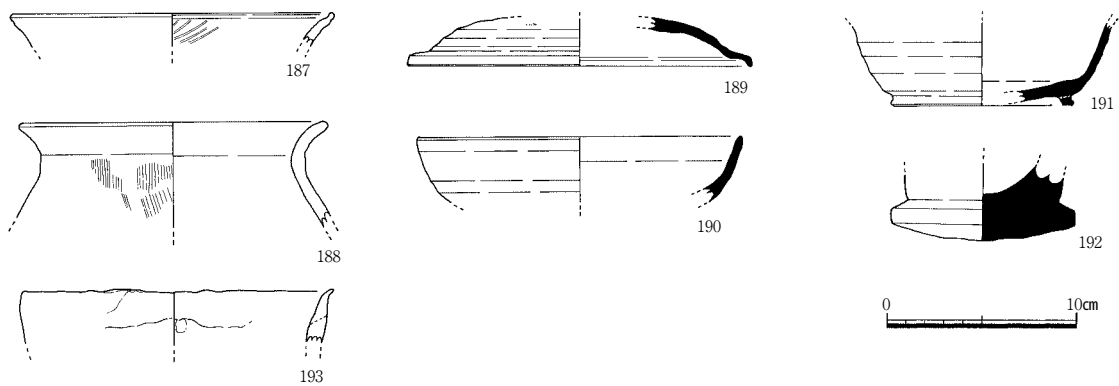
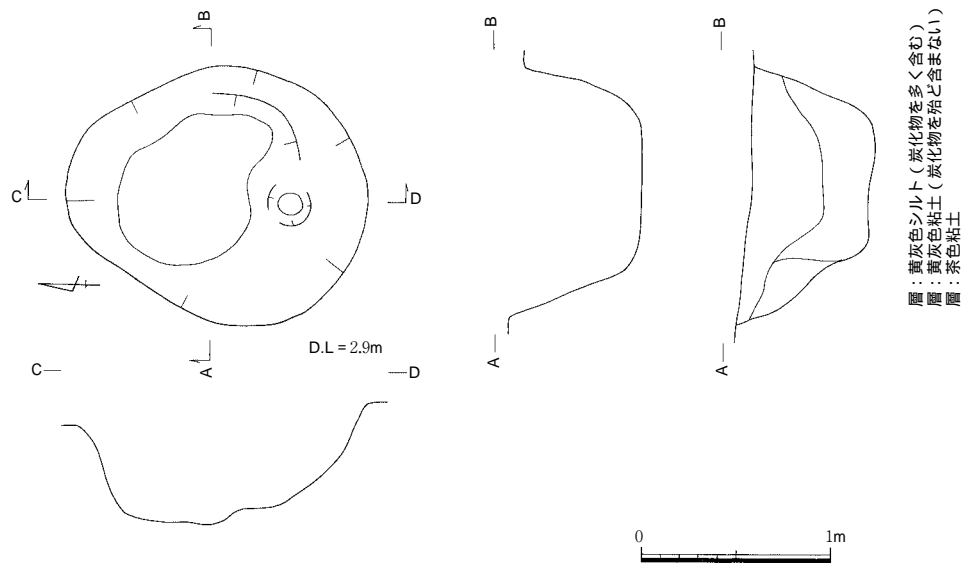


Fig.23 SK14 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

SK15 (Fig.24)

調査区南西寄り、SK14の西に隣接する。長軸2.66m、短軸1.30～1.86mの不整形を呈する。検出時には、径約90cmの灰色粘土を、不整形プランの黄色シルトの埋土が囲んだ状態であった。掘り進めていくと、西側に幅約86cmのテラス状の平場が張り出す、鉤状プランの土坑であることが判明した。深さは64cmを測り、平場は床面より約38cm高い。壁は東西は垂直に近く、南北はやや斜めに上がり、舟底状を呈する。埋土は 層：灰色シルトで炭化物を多く含む。 層：茶色粘土、 層：黄灰色シルト、 層：灰黄色シルトである。

遺物は土師器、須恵器、砥石などが出土している。土師器は甕(194・195)が多く、実測外遺物における細片数でも、煮炊具80点に対し、供膳具片は16点のみである。須恵器は杯(196～198)、高杯脚(199～201)の他、主に供膳具片が総量810g出土している。202は石英粗面岩製の砥石である。この他砂岩礫3点、粘土塊1点、製塩土器10g、鉄片1点、弥生土器片が出土している。これらの遺物のうち、弥生土器や鉄片は混入したものである。195と202が下層出土で他は 層からの出土である。

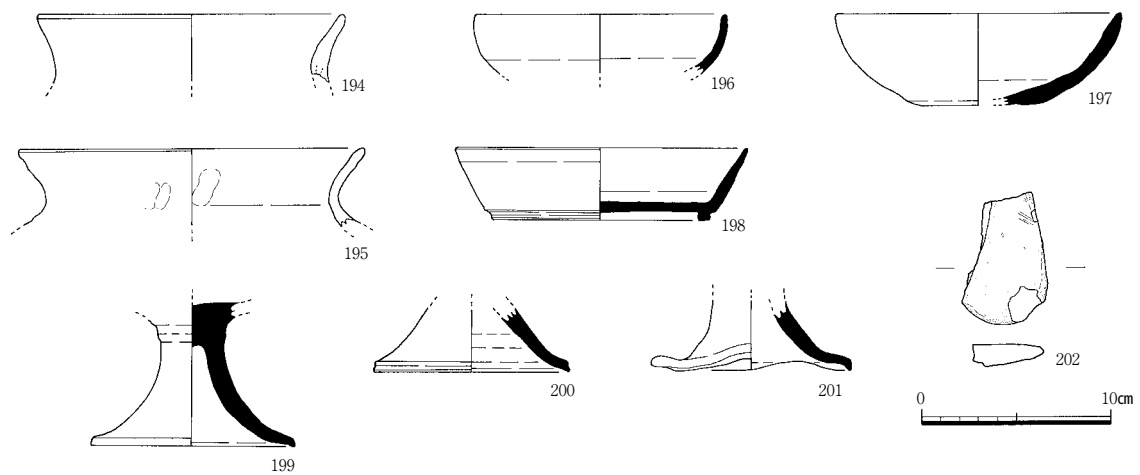
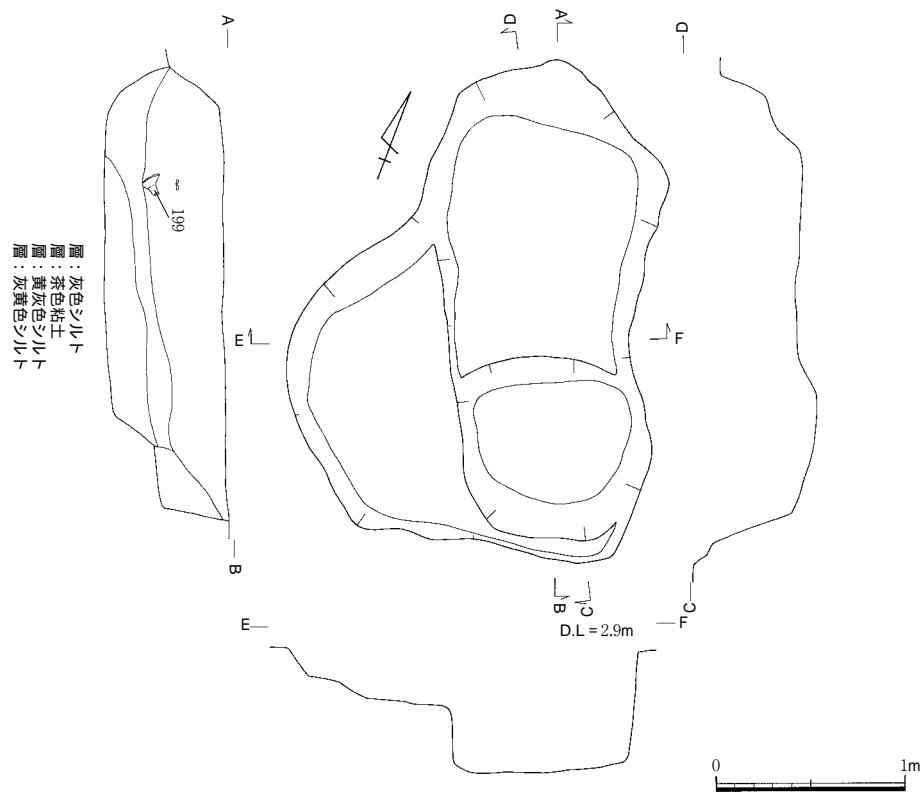


Fig.24 SK15 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

SK16 (Fig.25)

調査区東南寄りに位置する。長軸2.02m、短軸1.52mの長方形プランを有する土坑である。深さ16cmから24cmを測り、床はゆるやかに傾斜し、東側が深くなる。断面は浅い舟底状を呈する。埋土は 層：灰色シルト質粘土で灰・焼土を多く含む。 層：焼土層で橙色粘土を呈する。 層：黄灰

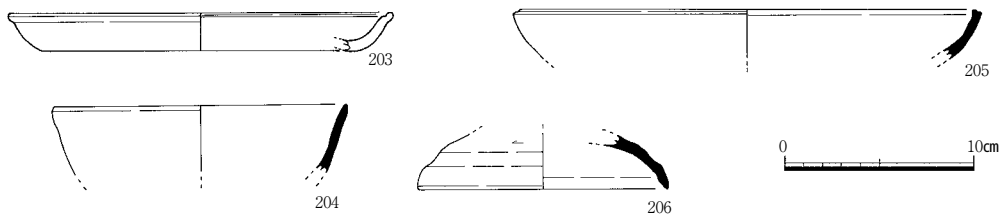
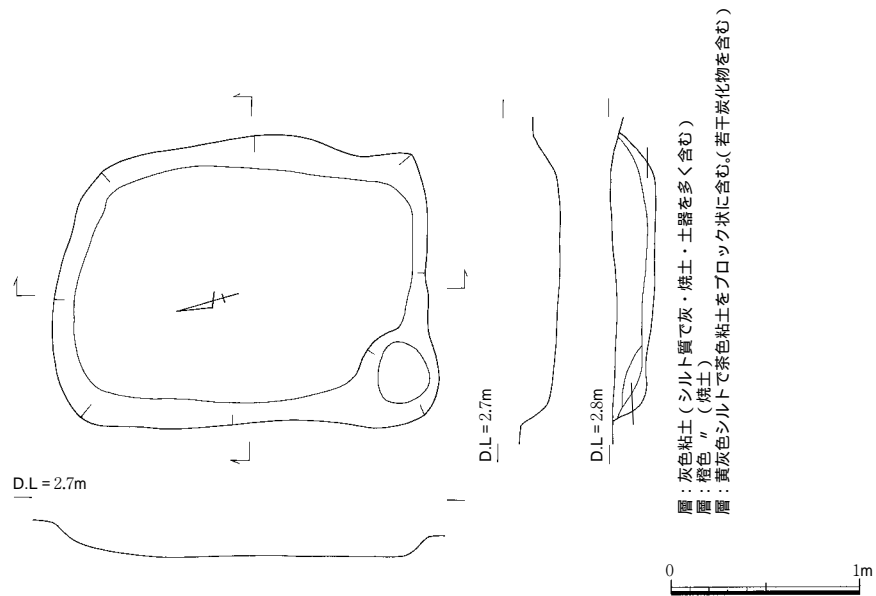


Fig.25 SK16 遺構平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

色シルトで茶色粘土をブロック状に含み、若干の炭化物を含む。

遺物は土師器、須恵器などが出土している。土師器は皿（203）、須恵器は杯（204）、鉢（205）、蓋（206）がみられる。他に製塩土器50g、鉄片1点、弥生土器細片が出土している。

SK25 (Fig.26)

調査区南西寄り、今回検出した土坑の中で最南に位置する。長軸2.26m、短軸1.56～1.82mの隅丸長方形プランの土坑である。深さ約28cmを測り、床面はほぼ水平である。埋土は 層：灰褐色シルトで炭化物を含む。 層：灰黄色粘土質シルト。 層：黄灰色粘土質シルト。 層灰黄色粘土で若干炭化物を含む。 層と 層は灰層で、東側にのみ堆積する。

遺物は土師器、須恵器などが出土している。土師器は蓋（207）の他、甕胴部細片が少量みられるのみである。須恵器は皿（208）、蓋（209・210）、杯（211～213）、高杯（214）、鉢（215・216）がみられる。蓋天井部や杯立ち上がり部にヘラケズリ調整がみられる個体が多く、丁寧なナデ調整が施される。他に激しく被熱した15cm大の角礫、鉄片2点、弥生土器片が出土している。これらは大半が 層からの出土であるが、灰と共に廃棄されたものとみられ一括性の高いものである。

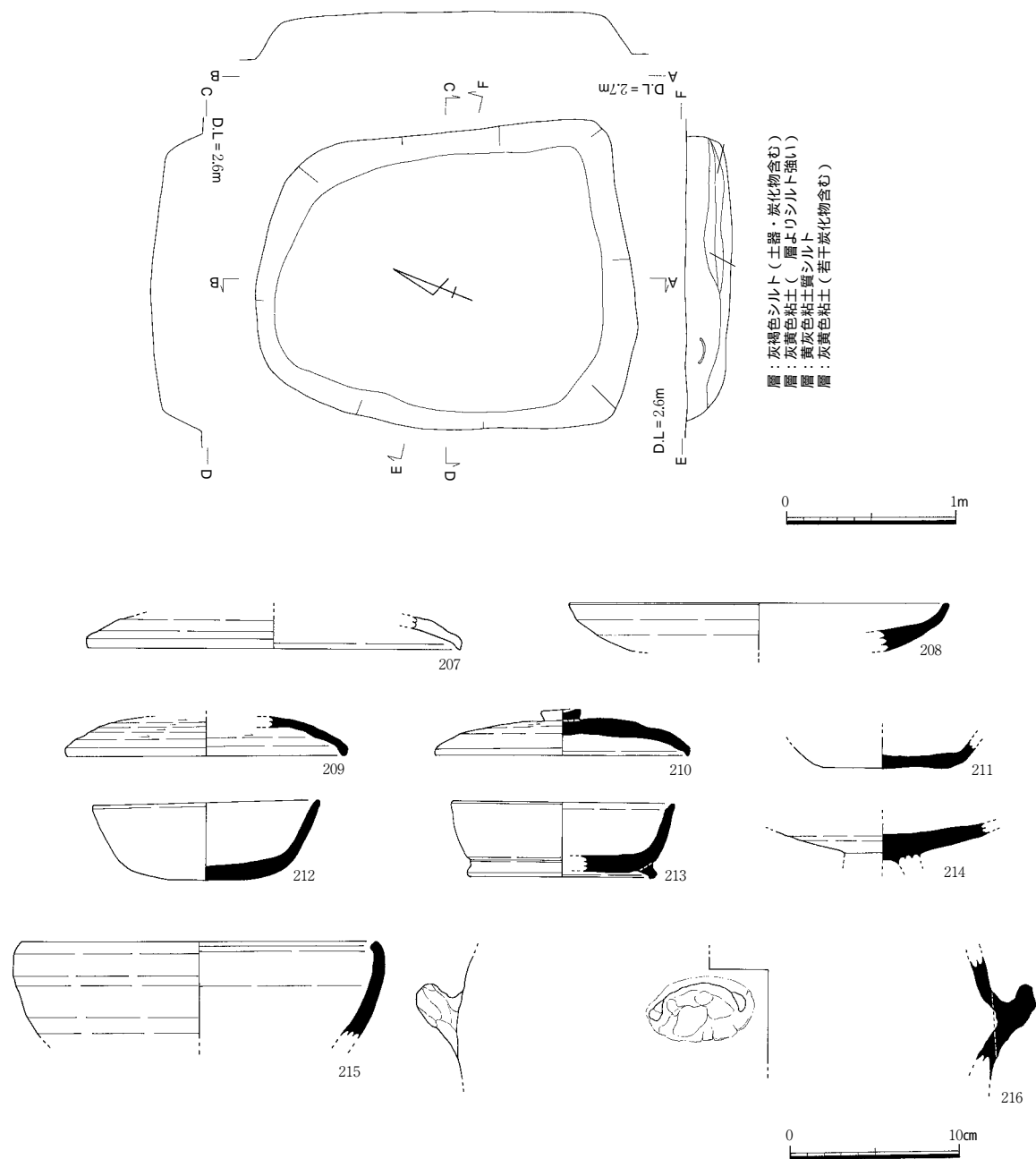


Fig.26 SK25 遺構平面・セクション・エレベーション及び土遺物実測図

(4) ピット (Fig.27・28)

P29

長軸78cm、短軸56~67cmを測り、楕円形プランを呈する。2段に掘られており、上段までの深さ10cm、2段目までは16cmを測る。柱根とみられる部分は17×15cmの円形で、検出面から床面までの深さは40cmを測る。埋土は黄色シルトで柱根部分は暗茶色粘土である。

出土遺物は土師器杯(217)の他、須恵器細片1点、土師器細片が90点余、被熱した砂岩礫がみられる。土師器細片のうち2点は搬入品とみられる供膳具の細片である。

P38

長軸52cm、短軸34~47cmを測り、隅丸方形プランを呈する。南寄りに22×18cmの掘り込みがあり、

柱根とみられる。段部までの深さ5cm、検出面から底面まで18cmを測る。埋土は黄色シルトで柱根部分は暗灰色粘土で炭化物を多量に含む。柱根部分は基本層序の第 層で検出され、ピット掘り形は第 層で確認された。

出土遺物は細粒砂岩の砥石兼用の叩き石(218)の他、須恵器片1点、土師器片8点、弥生土器片20点余、粘土塊1、被熱した礫がみられる。

P40

長軸54cm、短軸42cmを測り、隅丸方形プランを呈する。北寄りに21×17cmを測る柱根とみられる掘り形が確認された。段部までの深さ9cm、検出面から底面までは23cmを測る。埋土は南半分が暗灰色、北半分は黄色シルトである。埋土中に炭化物を含む。検出面で10×5cm大の礫が出土した。暗灰色部分は基本層序の第 層、黄色部分は第 層で検出された。

出土遺物は土師器杯(219・220)の他、土師器細片30点余、製塩土器片2点、弥生土器片5点、粘土塊1点がみられる。土師器片のうち底部片は、220と同様平高台である。

P41

長軸51cm、短軸29~41cmを測り楕円形を呈する。二段に掘られており、内側の堀込みは33×30cmを測る。段部までの深さ4cm、検出面から底面までの深さは12cmを測る。埋土は黄色シルトで基本層序の第 層で検出された。

出土遺物は土師器杯(221)、弥生土器片5点がみられる。

P51

長軸36cm、短軸31cmを測り楕円形を呈する。断面は南側に段部を有し、段部までの深さ15cm、検出面から底面までの深さ29cmを測る。埋土は暗灰色シルトで基本層序の第 層で検出された。

出土遺物は須恵器甕(222)の他、土師器片20点、弥生土器片3点がみられる。

P67

長軸34cm、短軸32cmを測りほぼ円形を呈する。深さ13cmで断面形は台形状を呈する。埋土は黄色シルトで基本層序の第 層で検出された。

出土遺物は須恵器皿(223)の他須恵器杯片、土師器甕片がみられる。

P68

長軸47cm、短軸35cm、深さ約10cmをはかり楕円形を呈する。埋土は黄色シルト混ざりの暗茶色である。

出土遺物は検出面から一個体分の土師器羽釜(225)が出土している。この他土師器杯(224)、弥生土器(226)、須恵器甕片1点、土師器片20点、弥生土器片20点、砂岩被熱礫がみられる。

(5) 包含層出土遺物 (Fig.29・30)

227~266は包含層出土の遺物である。土師器、須恵器、緑釉陶器、製塩土器、土錘などがみられる。228は精選された胎土で、内面に暗文が施される。258は精選された胎土で、全面丁寧なヨコナデ後ヘラミガキ調整を施し、下半はヘラケズリ調整である。法量がやや特殊である。

269と270は B区の攪乱からの出土である。

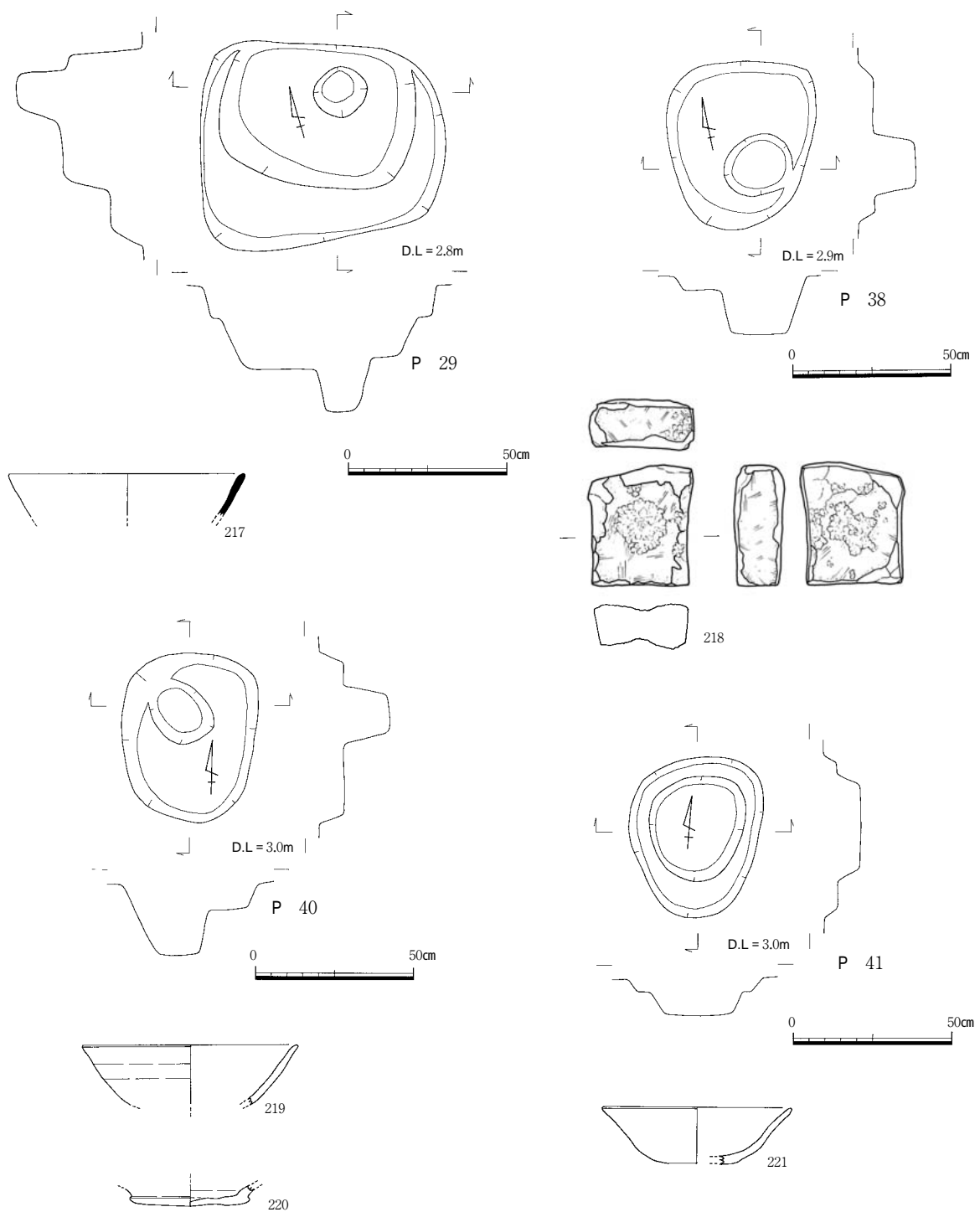


Fig.27 P29、P38、P40、P41 遺構平面・エレベーション及び出土遺物実測図（遺物はS=1/4）

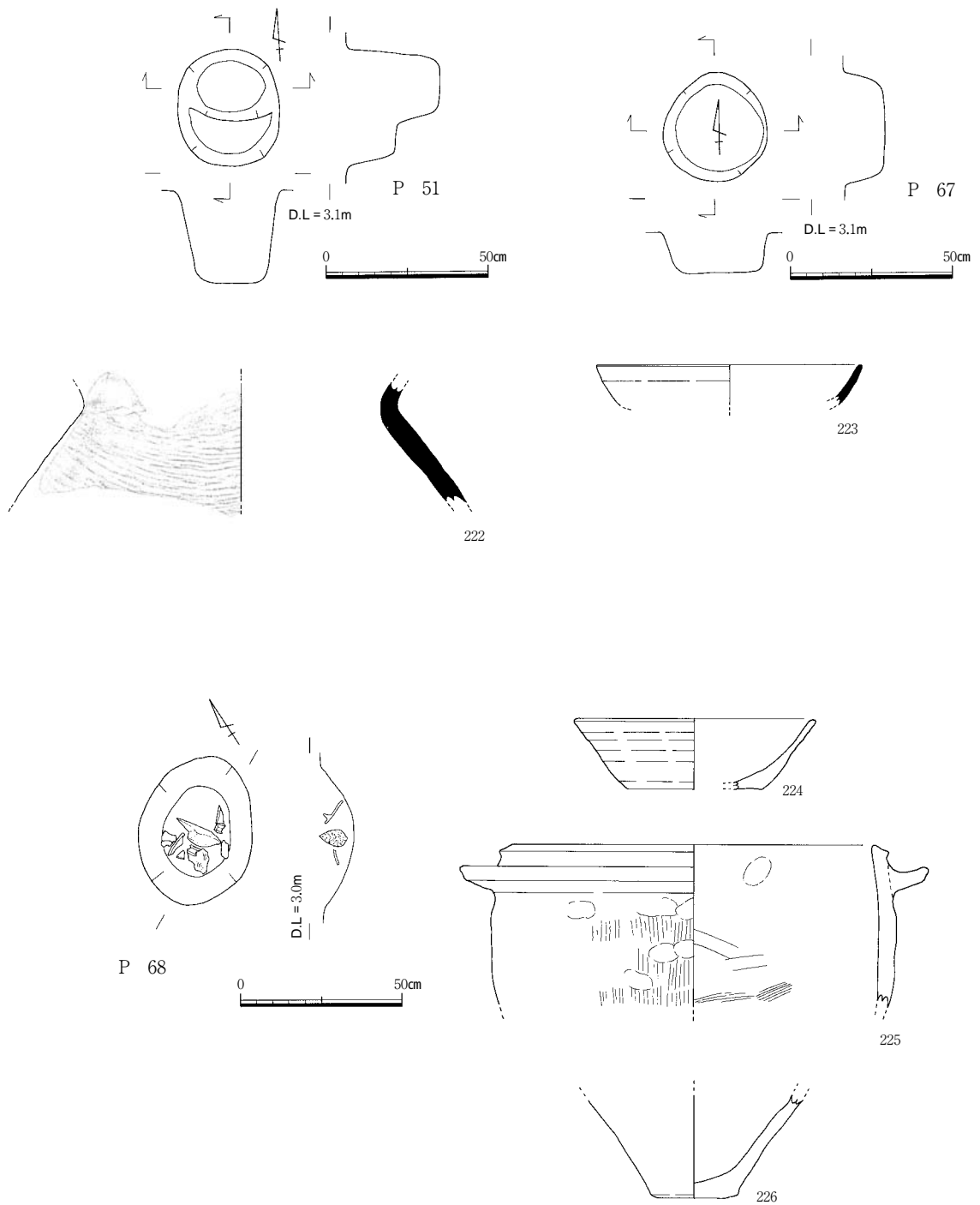


Fig.28 P51、P67、P68 遺構平面・エレベーション及び出土遺物実測図（遺物はS=1/4）

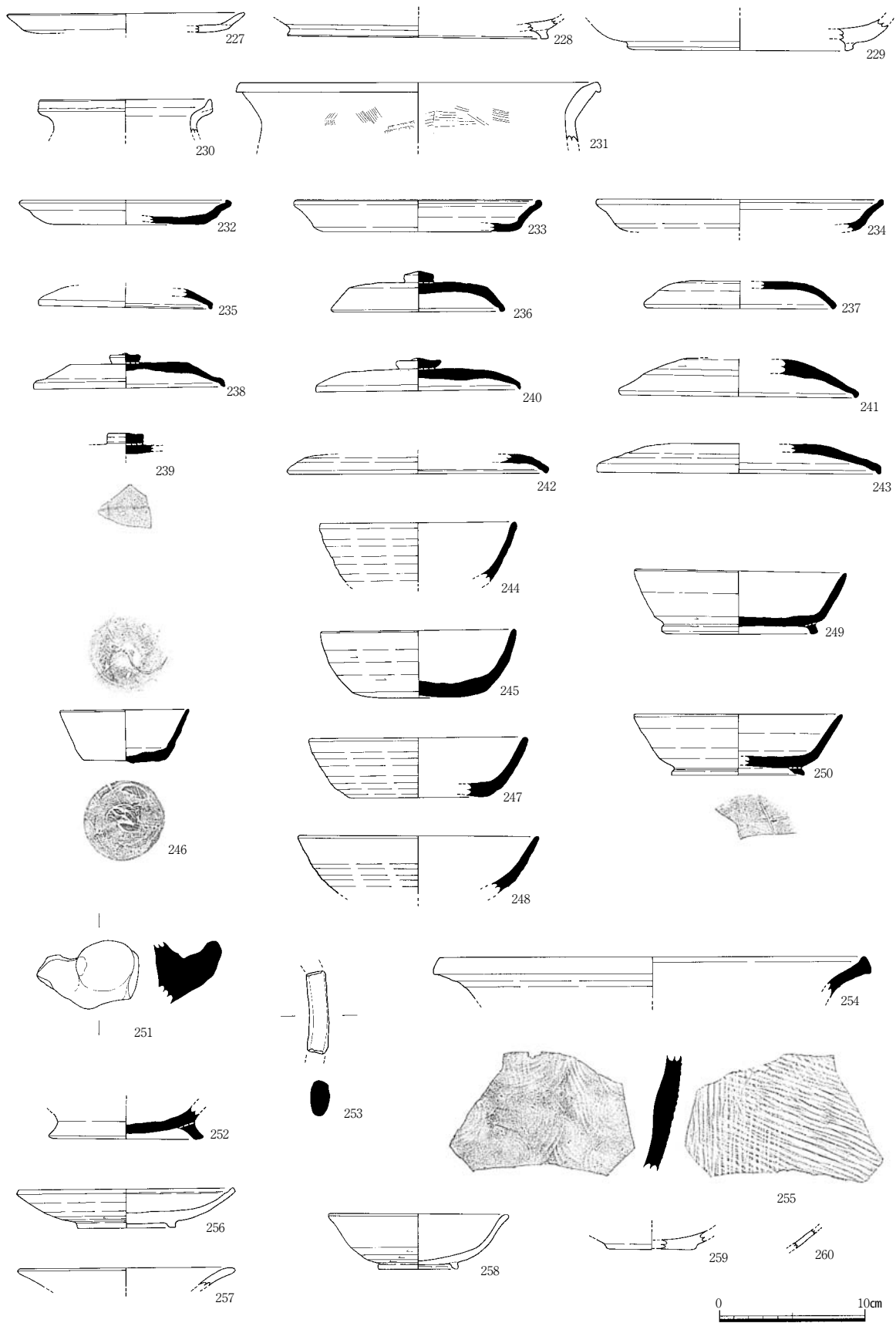


Fig.29 包含層出土遺物実測図(1)

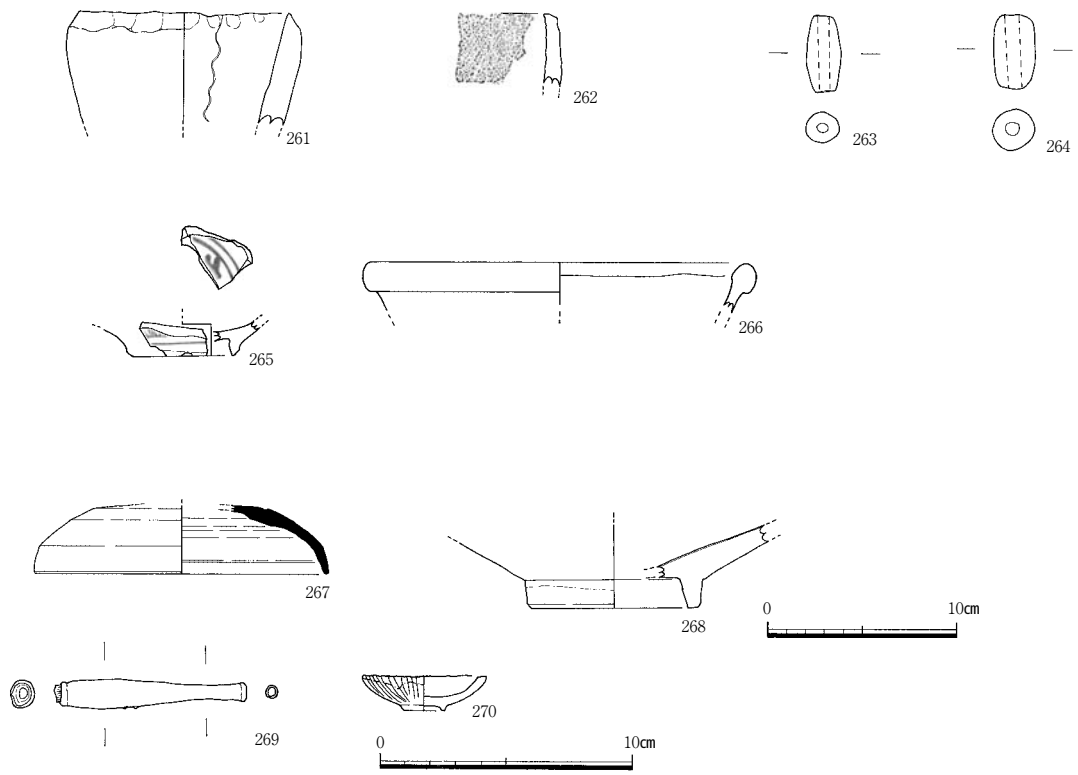


Fig.30 包含層出土遺物実測図(2)

第 章 考察

製塩土器について

はじめに

西分増井遺跡では、15基の土坑が確認されたが、このうち12基から製塩土器が出土している。これらは、出土状況や土層の堆積状況からも、一括性の高いものとして捉えることができる。これらの土坑の多くでは須恵器、土師器、土錘、製塩土器と共に、多量の灰や焼土が検出されている。高知県において製塩土器が出土している遺跡は12遺跡を数えるが、遺構出土のものは少なく、今回の他には下ノ坪遺跡⁽¹⁾、具同中山遺跡⁽²⁾、小籠遺跡⁽³⁾をあげ得るのみである。

日本における製塩土器の初現は縄文時代後・晩期に遡り、関東と東北において知られている⁽⁴⁾。西日本では、弥生時代 期に吉備地方南部で土器製塩技術が成立したとされる⁽⁵⁾。古墳時代前期には各地に広がり、後期になると限られた地域で生産が増大する。『延喜主計式』に記されている塩の貢納国は十八国で、全て古墳時代後期までに塩生産を開始した地域であり、その生産体制と流通機構を基盤として、律令国家が調庸塩の賦課国として包括的に掌握していったものとされる⁽⁶⁾。本県では他地域でみられるような古代を遡る時期の製塩土器や土器製塩遺跡の確認例はなく、全て律令期以降のものであり、消費地遺跡であると考えられる。製塩土器は赤彩土師器や陶硯、施釉陶器などに伴って、まとまった量が出土する 경우가多く、遺跡の性格と関連しているとみられる。古

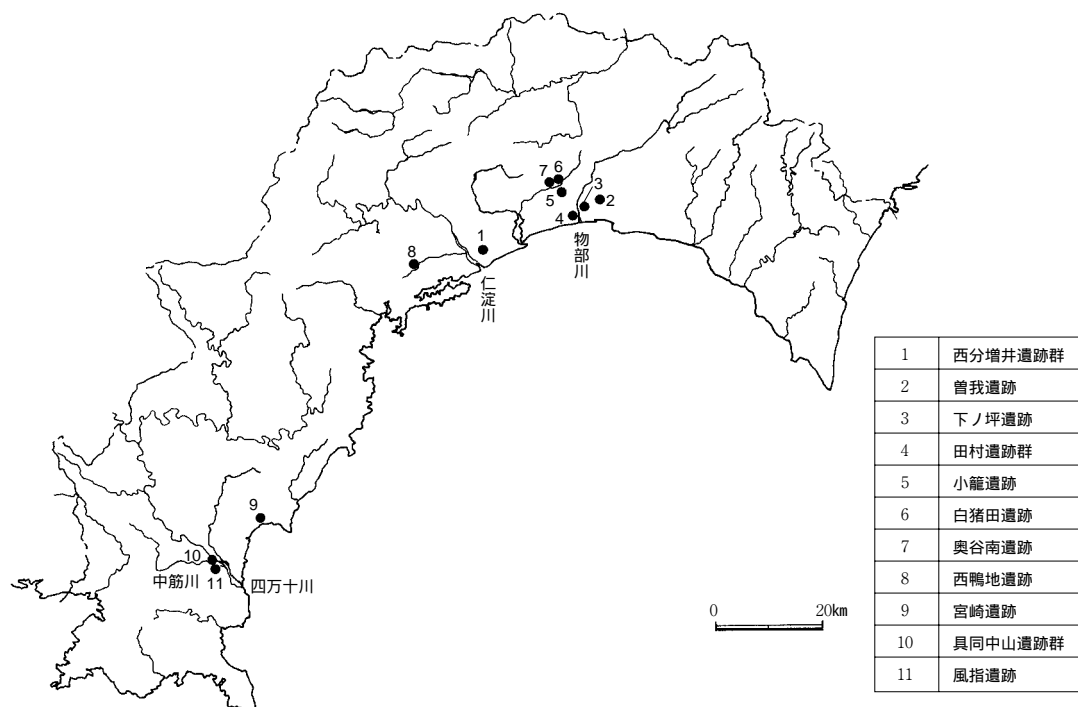


Fig.31 高知県の製塩土器出土遺跡位置図

Tab. 2 製塩土器出土遺跡一覧

	遺跡名	出土遺構	立地	製塩土器		須恵器・土師器以外の主な出土遺物
				分類		
1	西分増井遺跡	SK1、SK3、SK5、SK6、SK14、包含層	新川川の左岸	A-1 B-1 B-2	他多量	緑釉・黒色土器・土錘
2	曾我遺跡	SB6、包含層	山北川と香宗川に挟まれた自然堤防		体部片3	緑釉・灰釉・黒色土器・陶硯 赤彩土師器・墨書土器・土錘
3	下ノ坪遺跡	SB9~22 SA4、10、11 SK16、18、20~34 SD26、40 SX2 P14、15	物部川下流の左岸、 沖積平地上	A-1 B-2	他多量	緑釉・灰釉・黒色土器・搬入土器 陶硯・鉈尾・石鈎・赤彩土師器 墨書土器・八陵鏡・佐波理・篠鉢 土錘
4	田村遺跡		物部川下流の右岸、 自然堤防上			整理中
5	小籠遺跡	SK106、SK110	長岡台地の西端。古 代以前においては汽 水域に面していた。	A-1		灰釉・黒色土器・瓦
6	白猪田遺跡	包含層	2本の河川と丘陵地 に挟まれた扇状地		少量	
7	奥谷南遺跡	通路状遺構	平野を見下ろす山の 標高62~73m地点		底部片1	緑釉・黒色土器・転用硯・篠鉢・瓦
8	西鴨地遺跡	包含層	波介川上流域に形成 された沖積地	A-1	他に口縁4	緑釉・灰釉・黒色土器・鉈尾・銅鈎 斎串・土錘
9	宮崎遺跡	包含層	猿飼川とその支流の 合流部分、右岸。	B-3	他に口縁部 片1、胴部 片3	緑釉・黒色土器・転用硯・刻書 墨書土器・土錘
10	具同中山遺跡 (1999年度、 2000年度調査)	SK11、SK12、SK16 SK19、包含層(1999年 度)、SX2、SX4、包 含層(2000年度)	中筋川左岸の自然堤 防上	A-1 B-1 B-2 B-3 C-1 C-2	他に口縁部 片5、体部 片1、底部 片2	緑釉・灰釉・石鈎・銅鈎 土錘(1989・1990年度、1999年度調査分 含む)
11	風指遺跡	包含層	中筋川右岸の河岸段 丘上		体部片2	緑釉・黒色土器・篠鉢・土錘

代における塩の使用目的は、食用および調味料・食品加工用、鉄生産などに関わる工業用、儀礼・祭祀用などが考えられる⁽⁷⁾。ここでは、近年報告例が増加しつつある、県下の製塩土器の集成を行い、若干の検討を行う。なお、文中で用いる時期区分は池澤俊幸氏による土器編年に依った⁽⁸⁾。

1 製塩土器の分類

県下出土の製塩土器は、破片が多く、その全容を把握できる例は皆無であるが、復元可能な個体を用いて製作技法、形態、法量等から幾つかに分類することが可能である。

製作技法については、型作りであるか否かで分類することができる。型作りであるということは作業効率を高め、量産化を図るという意味で塩生産の画期⁽⁹⁾と考えられる。内面に布目痕またはそれに準ずるような圧痕を有する個体については、型作りであることが確定でき、土佐においては、内面の布目痕跡こそが「製塩土器」のメルクマールとされてきた。しかし2000年度の具同中山遺跡の調査において、内面に布目が観察できない製塩土器の存在が確認されており⁽¹⁰⁾、当地においてもいわゆる型作り成形とは異なる方法で製作された製塩土器の存在が示唆されることとなった。

次に形態であるが、砲弾型を呈するものと、口径に対する器高が低く、概ね逆三角形を呈するも

のが存在すると考えられる。なお底部形態については、尖底、尖底気味の丸底、平底の、3種が確認されているが、どの上部形態に対応するものが、現時点では確定できない。

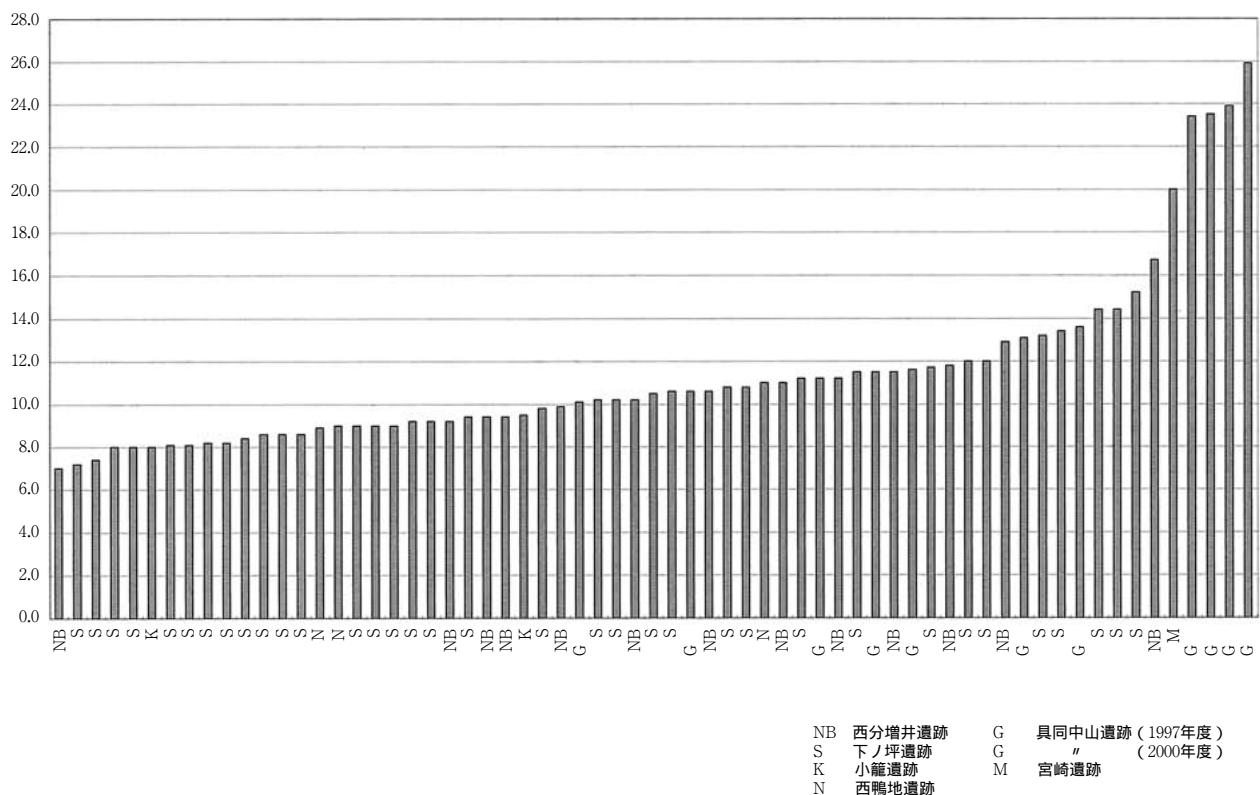
法量は、口径7～27cm前後までを測り、幾つかに法量分化が成されているとみられる。形態差を無視した口径のみの比較ではあるため、必ずしも法量差とはいえないが、7～15cm前後までは細かいピッチで推移するが、20cmを超える個体との間には隔たりがある（グラフ1）。

A - 1類 型作り成形で砲弾型を呈するもののうち、口径7～11cm前後を測るもの。内面に布目痕を有し、外面には指頭圧痕が残る。口縁端部は斜めに切り落としたものが多いが、ヨコナデや指の押圧により歪むもの、波状になるもの等がある。胎土は素地が粗く角粒を多く含み、焼成または二次焼成により比較的堅致である。色調は灰白、橙、浅黄橙等さまざまであり、同一個体でも部位や、内外面により色調が異なるものが存在する。

A - 2類 型作り成形で砲弾型を呈するもののうち、口径12～16cm前後を測るもの。他はA - 1類に準ずる。

B - 1類 型作り成形で逆三角形を呈するもののうち口径7～11cm前後を測るもの。他はA - 1類に準ずる。このうち西分増井遺跡出土のSK 1 出土の1点（Fig.11 - 19）は二次焼成を受けておらず、非常に薄手で胎土も精選され口縁部に刻みが施されたものであり、特徴的である⁽¹¹⁾。

B - 2類 型作り成形で逆三角形を呈するもののうち、口径12～16cm前後を測るもの。他はA - 1類に準ずる。



グラフ1 県内出土の製塩土器の口径

B - 3 類 型作り成形で逆三角形を呈するもののうち、口径20cmを超えるもので、器壁が厚く、胎土は素地が粗く砂粒を多く含む。二次焼成痕跡が激しく、赤褐色を呈し表面はもろく崩れやすい。表面の指頭圧痕が顕著である。

C - 1 類 型作り成形を示す布目痕が観察できないもので逆三角形を呈するもののうち、口径7～11cm前後を測るもの。胎土は精選された素地にチャート、頁岩の円粒を多く含み軟質である。色調は灰白、浅黄橙などである。

C - 2 類 型作り成形を示す布目痕が観察できないもので逆三角形を呈するもののうち、口径20cm以上を測る。他はB - 3 類との共通する特徴をもつ。

2 製塩土器出土遺跡

曾我遺跡⁽¹²⁾

野市町中ノ村に所在し、高知平野東部の山北川と香宗川に挟まれた自然堤防上に立地する。9世紀から11世紀代の企画性をもった掘立柱建物群、礎石建物、柵列、土坑、溝等が確認されている。土師器・須恵器の他、硯、二彩陶器、緑釉陶器、灰釉陶器が出土しており、中でも緑釉陶器は45片を数え、県下最多点数である。遺物と建物跡から「官衙的な色彩」のある遺跡とされる。製塩土器は細片3点が報告されている。

下ノ坪遺跡 (Fig.32 - 1～32)

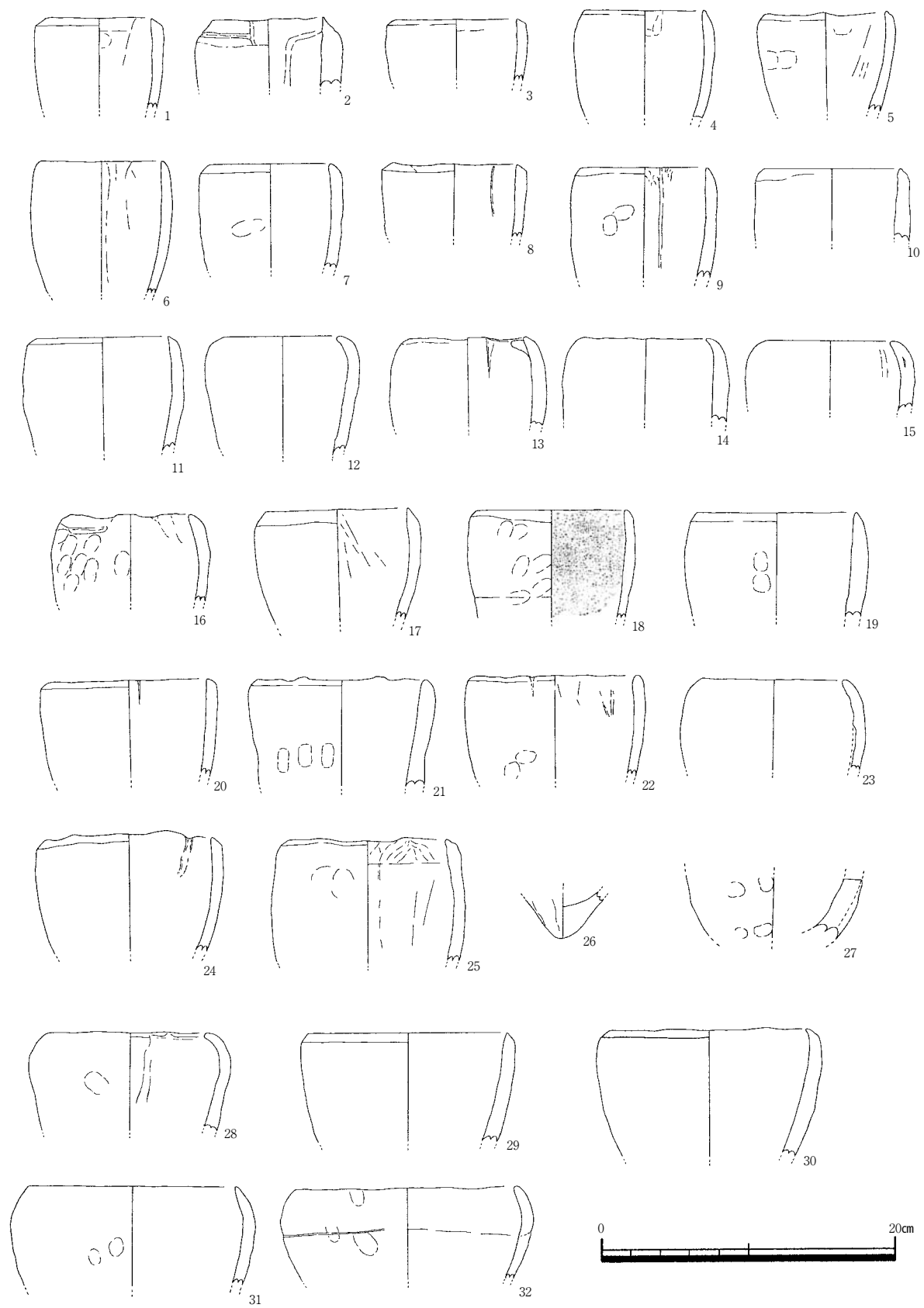
野市町上岡に所在し、物部川下流の左岸に位置する。弥生時代後期前葉・古墳時代後期・古代の複合遺跡である。古代では県下最大級の掘立柱建物群を含む、規則性を持つ建物配置による、掘立柱建物群が20棟以上検出されている。他に溝、土坑等も確認された。8世紀前葉から9世紀中頃に盛行する。製塩土器は13基の土坑 (SK16・18、20～22、27～34) の他、掘立柱建物、柵列、溝等、殆どの遺構から出土しているが、中でもSK28、SK34では製塩土器の重量が10kg近くを量り、突出している。また土錘、被熱石等と共に灰や焼土塊が廃棄されている土坑が存在する。注目される出土遺物としては四仙騎十獣八稜鏡、緑釉陶器火舎、各種搬入土器、革帯装具、陶硯、赤彩土師器、土錘、鍛冶滓、左波理があげられる。製塩土器はA - 1 類が29点、B - 2 類が5点口縁部、胴部片13点、底部片2点が報告されている。以下製塩土器が多く出土した土坑をあげる。

SK16 1.0×1.2mの円形プランを呈し、床面にはピット状の凹みを有する。深さは30～42cmを測る。焼土は含まれないが被熱・打割された大小の石が出土している。土師器・須恵器の供膳具および甕、羽口が出土している。

SK28 2.1×0.6m以上の隅丸方形プランを呈する。断面形はほぼ長方形で、上層の特に下半に焼土塊を多く含む。製塩土器を主とする土器は下半に集中している。製塩土器の総量は8.75kgである。

SK30 0.9×3.4mの溝状の土坑である。両端に段部を有する。完形を含む残存率の高い土器が面的に出土している。被熱、打割された川原石が出土している。

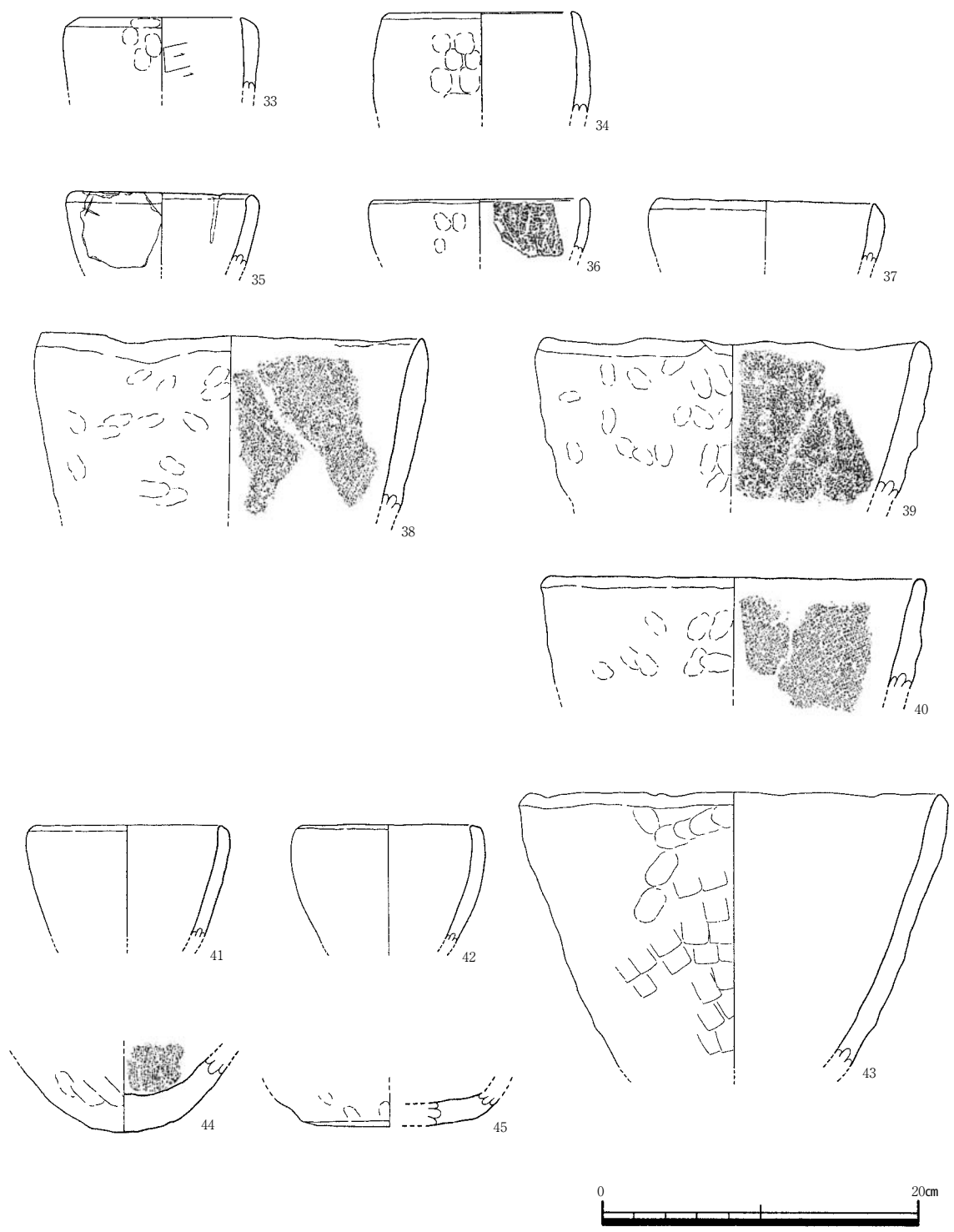
SK34 1.0×2.3mの不整形プランを呈する。上層に礫群を挟んで南に製塩土器が塊状に出土し、北に多量の炭化物が検出された。製塩土器の総量は9.49kgを測る。



A - 1類 : 1~25

B - 2類 : 28~32

Fig.32 下ノ坪遺跡出土の製塩土器



A - 1類 : 32, 33 B - 3類 : 37 - 39
 B - 1類 : 34 C - 1類 : 42, 43
 B - 2類 : 35, 36 C - 2類 : 44

Fig.33 具同中山遺跡出土の製塩土器

小籠遺跡

南国市岡豊町に所在し、長岡台地の西端に立地する。弥生時代前期から断続的にはあるが、18世紀までの遺構と遺物が確認されている。古代では9世紀初頭から10世紀初頭頃までの土坑や竪穴状遺構、掘立柱建物、溝が検出されている。当地は古代以前においては汽水域に面していたものとされ、その立地と検出遺構から水運を背景とした「津」的な性格付けがなされている。土師器、須恵器の他に緑釉陶器皿、畿内産黒色土器が出土している。製塩土器は貯蔵穴とされるSK106、SK110の二つの土坑から各1点ずつ出土しており、いずれもA-1類である。

SK106 長軸1.5m、短軸1.1mを測り、楕円形プランを呈する。深さ約60cmで断面長方形を呈する。遺物は土師器・須恵器供膳具と土師器甕が、集中して出土している。

SK110 長軸3.8m、短軸2.3mを測り楕円形プランを呈する。深さ26～34cmで断面形は皿状を呈する。遺物は土師器・須恵器供膳具、土師器鉢・甕、移動式竈の細片が出土している。

奥谷南遺跡⁽¹³⁾

南国市岡豊町に所在し、平野を見下ろす山の標高62～73mの地点に立地する。旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である。10世紀から11世紀に盛行する山岳寺院と、その付属施設と考えられる須恵器窯、炭窯、通路状遺構等が確認されている。製塩土器はこの通路状遺構から底部片1点が出土している。土師器、須恵器の他に楠葉型黒色土器B類椀や、斜面部下方からは猿投窯産緑釉陶器段皿が出土している。

西鴨地遺跡⁽¹⁴⁾

土佐市西鴨地に所在し波介川上流域に形成された沖積地に立地する。自然流路からではあるが、縄文時代から中世に至る遺物が出土している。古代に属する遺物は概ね8～9世紀代のものであり、土師器・須恵器の他、緑釉皿・椀、灰釉皿、畿内系黒色土器、銅製帯金具などが出土している。製塩土器はA-1類が3点と口縁部片4点と細片十数点が報告されている。

宮崎遺跡⁽¹⁵⁾

大方町加持に所在し猿飼川とその支流の合流部分、右岸に立地する。トレンチ調査でもあり遺構は確認されていないが、9世紀後半頃を中心とする遺物が出土しており、土師器・須恵器の他、京都系緑釉陶器碗・皿、黒色土器、墨書土器、刻書土器、須恵器転用硯、石硯等がみられる。製塩土器の中には刻書されたものが含まれる。報告者は、遺物から大方郷の郷家の周縁にあたる可能性を指摘している。B-3類が1点と、口縁部片1点、胴部片3点が出土している。細片には刻書が施されている。

具同中山遺跡 (Fig.33 - 33～45)

中村市具同に所在し、中筋川左岸の自然堤防上に立地する。1986年以来断続的に続けられてきた調査により、弥生時代から中世にかけての遺構と遺物が確認されている。古墳時代を中心とする河川祭祀遺跡として知られる。古代では、1986・1999年度調査で、石製・銅製の帯金具が出土している他、緑・灰釉陶器もみられる。1997年度に行われた調査では古代の土坑7基が確認されており、そのうち4基から製塩土器が出土している。また2000年度に行われた調査では古代の土坑9基、性格不明遺構3基、炭化物集中遺構4基が検出されており、9～10世紀初頭頃の土師器、須恵器、土錘が出土している。製塩土器が出土したのは土坑6基、性格不明遺構1基からである。2000年調査

で報告者は、土錘との供伴例が下ノ坪遺跡、曾我遺跡など他の遺跡でも見られることから「貢納用の海・水産物の加工生産に係る可能性」を示唆している。製塩土器はA - 1類が2点、B - 1類が1点、B - 2類が2点、B - 3類が3点、C - 1類が2点、C - 2類が1点ある。

SK11^(2a) 2.4×0.7mの不整楕円形を呈する。深さ12cmを測る。土師器・須恵器供膳具、土錘及び3～5cm大の角礫と1～3cm大の円礫が多く出土している。

SK12^(2a) 1.2×1.1mの円形プランを呈し、深さ24cmを測る。土師器・須恵器供膳具、土錘、鉄片が床面から出土している。

SK16^(2a) 1.7×0.8mの不整楕円形を呈し、深さ12cmを測る。土師器・須恵器供膳具、土錘が出土している。

SK19^(2a) 0.9×0.8mの円形プランを呈し、深さ18cmを測る。土師器・須恵器供膳具、土錘が出土している。

SK4^(2b) 1.0×0.9mの不整楕円形を呈し、深さ10cmを測る。浅い皿状で少量の土師器・須恵器、土錘、軽石が出土している。

SX2^(2b) 0.9×0.5mの範囲に、須恵器杯と製塩土器が炭化物・焼土と共に検出されている。掘り形はない。

風指遺跡⁽¹⁶⁾

中村市具同地区の南西部に位置し、中筋川右岸の河岸段丘上に立地する。8基の土坑と20数個のピットが確認された。出土遺物から9世紀中葉から10世紀初め頃を中心とし、緑釉陶器、黒色土器、篠鉢、100点余の土錘を含む。製塩土器は、包含層より出土した胴部片2点が報告されている。

今回調査された西分増井遺跡ではA - 1類10点、A - 2類3点、B - 1類2点、底部片2点、胴部、口縁部片2点を報告している。この他、少量の製塩土器が報告されている遺跡としては南国市白猪田遺跡⁽¹⁷⁾、南国市田村遺跡⁽¹⁸⁾をあげることができる。

まとめ

上記の諸遺跡における製塩土器各類の出土状況を見ると、まず県中央部では各遺跡ともA - 1・2類が大半を占めることがみとれる。一方県西部では、具同中山遺跡や宮崎遺跡において、口径20cm以上を測る大型のものがみられ、具同中山遺跡においてはA - 1類は少数である。A - 1・2類と分類した砲弾型で内面布目痕を有するものや、B - 1・2類の逆三角形で内面布目痕を有するものは、主に北部九州から長門で普遍的にみられる形態であると考えられ、焼き塩壺として塩の運搬時に使用されたものとして位置づけられている⁽¹⁹⁾。製塩工程は「煎熬」と「焼き塩」の2工程から作られることが知られており、古代製塩遺跡である福岡市『海の中道遺跡』では「煎熬用の甕である玄海灘式土器」と「焼き塩用の六連式土器」が認識されている⁽²⁰⁾。また岩本正二氏は紀伊地方の7～9世紀の製塩土器を四型式に分類し、9世紀前半頃までは「煎熬」と「焼き塩」は同一形態の土器で行われていたと想定している⁽²¹⁾。県下で出土している製塩土器は前述した西分増井遺跡出土の1点(Fig.11 - 19)を除けば、全て二次焼成をうけたものであるが、これらそれぞれの形態が、製塩のどの工程で使用されたかについては現段階では判断できない。

各遺跡の、製塩土器が出土している遺構を比較すると、下ノ坪遺跡、小籠遺跡、西分増井遺跡、

具同中山遺跡とも、一括性の高い廃棄土坑と考えられる。これらの土坑の平面形態、深さ等に規画性はみられないのであるが、出土遺物に土師器・須恵器・土錘を含み、被熱・打割された礫を伴ったり、灰・炭化物・焼土を検出面や埋土に含む等の共通性がみられる。しかし下ノ坪遺跡におけるSK28・SK34の10kg近い製塩土器の出土は、西分増井遺跡の土坑のうち最も多く製塩土器が出土したSK3・SK5でも約1kgであることを考えると、その集中度合いに著しい差がみられ、特種なものといえるかもしれない。また大型のB-3類、C-2類が出土している具同中山遺跡のSK4とSX2では供伴遺物の少なさや、不明確な掘り形など、やや異なる出土状況がみられる。これらのことから、A-1・2類、B-1・2類とB-3類、C-2類は、使用工程が異なる可能性が考えられ、また大型の製塩土器が県西部でしか出土していないことから、地域差の可能性も考慮しなければならない。

次に出土状態における時期的な変遷を概観してみる。県下においては7世紀代前後の資料が充実しておらず、土器様相も含め不明な部分が多いのが現状である。その為不十分な比較にしかならないが、製塩土器がまとまって出土している下ノ坪遺跡、西分増井遺跡の土坑出土遺物で比較を試みる。まず、¹⁾ - 2 ~ 3期に比定される下ノ坪遺跡SK16・18、西分増井遺跡SK1・6・8では、製塩土器は出土しているが少量である。しかし²⁾ - 4 ~ 7期(³⁾ - 4 ~ 5期：下ノ坪遺跡SK28・30、西分増井遺跡SK9・15 / ⁴⁾ - 6・7期：下ノ坪遺跡SK21・33・34、西分増井遺跡SK3・5・16) 中でも⁵⁾ - 6・7期には多量の製塩土器が、土坑に廃棄される状況がみられる。後続する期になると、同様の性格をもつ廃棄土坑である西分増井遺跡のSK2・4、また土坑ではないが下ノ坪遺跡のSA4やP14・15でも製塩土器の出土は急激に少なくなる。報告者に依れば⁶⁾(⁸⁾、土佐における古代の土器様相を供膳具からみて、⁷⁾ - 2 ~ 3期を1段階、⁸⁾ - 4 ~ 7期を2段階、⁹⁾ 期を3段階とし、2段階前半は「南四国における律令的土器様式の頂点を示す」段階、3段階は「平安時代前期における新しい土器様相の成立期」とし、¹⁰⁾ 期3段階への転換は律令的土器様式の払拭として捉えられている。土佐における製塩土器の出土のピークはこの第2段階にあたり、まさに当地の律令的土器様式とその消長を同じくしていると言える。

(註)

(1) 高知県野市町教育委員会『下ノ坪遺跡』1998年

(2) a. 高知県教育委員会/(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『具同中山遺跡群』2001年

b. 高知県教育委員会/(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『具同中山遺跡群 - 3』2002年

(3) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『小籠遺跡』1996年

(4) 近藤義郎『土器製塩の研究』青木書店 1984年

(5) 大久保徹也「古墳時代以降の土器製塩」『吉備の考古学的研究』(下) 山陽新聞社1992年

(6) 岸本雅敏「古代国家と塩の流通」『古代史の論点 都市と工業と流通』小学館1998年

(7)(6)に同じ

(8) 池澤俊幸「南四国における古代前期の土器様相 - 下ノ坪遺跡の成果を中心として - 」『下ノ坪遺跡』高知県野市町教育委員会 1998年

(9) 関川 妥「第4章 結語」『浜田遺跡・脇ノ浦遺跡・こうしんのう2号墳』(財)北九州教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1994年

- (10) 内面に布目が観察できないが、「非型作り成形」といえる「手づくね」を示す確証もなく、「型作り」であっても成形手法に違いがみられる可能性を考慮する必要がある。
- (11) 二次焼成を受けていない製塩土器について、註(3)によると「内外面とも同じような灰白色、まれに淡黄褐色を呈しているところから、二次的加熱を受けていない、つまり製塩煮沸に未使用であると判断し、製塩地へ製塩土器を供給する土器生産地と考えている。」とされている。
- (12) 高知県野市町教育委員会『曾我遺跡発掘調査報告書』1989年
- (13) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『奥谷南遺跡』2000年
- (14) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『西鴨地遺跡』2001年
- (15) 高知県大方町教育委員会『竹シマツ遺跡 宮崎遺跡』1992年
- (16) 高知県教育委員会『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書 風指遺跡 アゾノ遺跡』1989年
- (17) 出原恵三「第5章 まとめ」『白猪田遺跡』高知県南国市教育委員会 1997年
- (18) 1996年～2001年に調査された田村遺跡群発掘調査のF4区で確認されている。
- (19)(9)に同じ
- (20) 福岡市教育委員会『海の中道遺跡』1982年
- (21)(6)に同じ

第 章 まとめ

今回は、西分増井遺跡の中で A・B・C区の古代に属する遺構・遺物について報告した。主要な検出遺構は土坑であり、15基を数える。これらの土坑からは、一括性を有する比較的まとまった土器が出土しており、高知平野西部の土器編年の基礎的な資料となるものである。古代の土器については対岸の調査区 区（馬場末遺跡）からも出土していることから詳細な編年的位置付けや特徴については、次回の報告で述べることにし、ここでは土坑について若干の見解を述べてまとめたい。

南四国における古代の遺構検出例は、調査事例に照応して高知平野東部や物部川流域に多く、西部においては極めて僅少である。前者の代表的な遺跡としては土佐国衙跡⁽¹⁾や下ノ坪遺跡⁽²⁾、小籠遺跡⁽³⁾、十万遺跡⁽⁴⁾などを挙げるができる。後者の事例としては土佐市の光永・岡ノ下遺跡⁽⁵⁾や当遺跡が挙げられるに過ぎない。しかも前者は、下ノ坪遺跡や十万遺跡など規格性を持った掘立柱建物群の検出など大規模な遺構群を有しているのに対して、後者の事例は現状においては、明瞭な建物跡を伴う例は認められない。

今次調査で検出した土坑は、SK12とSK25を除けば調査区の中央部に比較的集中している。平面形態は、楕円形状を呈するものが多いものの規格性は認められず大きさ、深さもまちまちで、断面形態も舟底状や箱形、段状を呈するものなどさまざまである。ただこれらの土坑は、検出面や埋土に多量の炭化物、灰、焼け土を含むなど堆積状況には共通点が窺える。また供膳具、製塩土器を含んでいることも共通点として指摘することができよう。

これらの土坑の内、出土遺物の特徴から時期比定の可能なものは、SK 1・6・8・9・12・14・16・25の13基である。おおよそ以下のようにその変遷を捉えることができよう。

1期：SK 1・6・8・12

2期：SK 9・15・25

3期：SK 3・5・16

4期：SK 2・4

1～3期は、池澤俊幸氏の土器編年⁽⁶⁾の 期、4期は 期の範疇で捉えることができる。

高知平野における古代の土坑の最も一般的な事例としては、土佐国衙跡や小籠遺跡において比較的まとめて検出されている小竪穴状の方形土坑を挙げるができる。前者は金地地区のSX 4・5・13～15など10数基⁽¹⁾及び内裏地区のSK143・147など6基⁽⁷⁾を、後者はSK130・136の2基⁽³⁾を挙げるができる。これらの土坑は、一辺1.5～2.5m前後の方形プランを有し床面は平坦面をなしている。コーナー部に柱穴と考えられる小ピットや壁面に削出しの階段状遺構を伴うなどの共通点が認められる。大きさは不揃いであるが、平面形や付属施設に共通性が窺われる。これらの土坑は、国衙内裏地区のSK128の床面に炭化物の広がりが見られるものの埋土中には西分増井遺跡の諸例のような著しい灰や炭化物は認められない。

これらの土坑の周辺からは掘立柱建物跡が検出されていることから、土坑の性格については、建物と空間を共有する貯蔵穴として位置付けるのが妥当であろう。またこれらの土坑の時期は、総じて 期に属するものであり 期に遡る例は認められない。

以上のような国衙跡等で検出されている土坑と、今次、西分増井遺跡で検出した土坑とは、時期的な違いもさることながら、その性格において大きく異なるものであることは明らかである。それでは、どのような性格が考えられようか。一定の時間幅を持ちながらも埋土堆積状態や遺物に製塩土器を含むことや集合性を有することなどから見て、各遺構は空間を共有しながら、共通の目的の下に連続して営まれた遺構として捉えるのが妥当であろう。従って単なる廃棄土坑とは考えられず、祭祀との関連を有する土坑、祭祀に供した製塩土器や供膳具を「廃棄」し去った遺構、すなわち祭祀関連土坑として位置付けたい。期の土坑は、その数も規模においても矮小化していることが窺える。これは 期に盛行した祭祀の衰退を示すものとして捉えることもできよう。類似例を高知平野において見出すことは難しいが、強いて求めれば光永・岡ノ下遺跡のSK4やSK6、下ノ坪遺跡のSK20やSK34に見出すことができる。

次回報告の 区からは大量の緑釉陶器が出土しており、西方には大寺廃寺跡が存在しており、当遺跡を含めて周辺は高知平野西部における古代史の中心舞台であったことが明らかとなっている。今次報告した調査区は、古代の祭祀空間として捉えることができよう。

(註)

- (1) 廣田佳久『土佐国衙跡発掘調査報告書 第9集』高知県教育委員会 1989年 他
- (2) 小松大洋・出原恵三・池澤俊幸『下ノ坪遺跡』高知県野市町教育委員会 1998年
- (3) 出原恵三・泉 幸代・浜田恵子・藤方正治『小籠遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター1996年
- (4) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生『十万遺跡発掘調査報告書』高知県香我美町教育委員会1988年
- (5) 廣田佳久・伊藤 強・田中涼子『光永・岡ノ下遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター2000年
- (6) 池澤俊幸「南四国における古代前期の土器様相 - 下ノ坪遺跡の成果を中心として - 」『下ノ坪遺跡』高知県野市町教育委員会 1998年
- (7) 三谷民雄『土佐国衙跡発掘調査報告書 第12集』高知県南国市教育委員会 2001年

遺物觀察表

遺物観察表1(土器)

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	器種 H(土師器) S(須恵器)	法量 (cm)				器高 指数	胎 土	色 調	特 徴	残存	備 考
				器高	口径	底径	胴径						
Fig10	1	SK1	H 皿	2.25	14.2	-	-	-	長石、石英 粒を多く含 む。	橙	外底不定方向のヘラケズリ+ ナデ。	準完	非回転台成 形。搬入品。
"	2	"	H 蓋	2.2	21.0	-	-	-	精土。雲母 を含む。	"	内面ナデ+暗文。外面ナデ+ 全面ヘラミガキ。口縁部よ り7mm上強いナデにより凹 む。	1/6	"
"	3	"	H 皿	-	19.2	-	-	-		"	内外面ヨコナデ	口縁1/6	
"	4	"	H 脚	-	15.0	-	-	-	チャート、火 山ガラスの砂 粒を含む。	明赤褐	内面上半ヨコナデ、下半横 方向のハケ。外面縦方向の ハケ+ヨコナデ+縦方向の ヘラミガキ。166と同一か。	脚裾1/4	搬入品。
"	5	"	S 蓋	3.1	17.2	-	摘み径 2.6	-		内面橙、 外面灰	天井部外面ヘラケズリ+ヨコ ナデ、内面不定方向のナデ。体部 内外面ヨコナデ。口縁端部は凹 状を呈す。ロク口回転右回り。	1/2	
"	6	"	"	-	14.9	-	-	-		灰白	内外面ヨコナデ	細片	
"	7	"	S 杯	-	14.0	-	-	-	チャートの 細粒を含む	"	内外面ヨコナデ。端部僅か につまみ出し、強いヨコナ デ。	細片	
"	8	"	"	-	13.2	-	-	-		灰	内外面ヨコナデ。内面黒色 の自然釉が掛かり、焼膨れ る。	口縁2/5	
"	9	"	"	-	15.0	-	-	-	チャートの 細粒を含む	"	内外面ヨコナデ	口縁1/4	
"	10	"	"	-	14.4	-	-	-	精土	灰白	内外面ヨコナデ	口縁1/12	
Fig11	11	"	"	-	-	9.7	-	-		"	内外面摩耗著。外底丁寧な ナデ。しっかりした貼付高 台が外方に張り出す。	底1/2	
"	12	"	"	-	-	10.1	-	-	チャート他 の細粒を含 む	にぶい黄橙	内外面摩耗著。外底ナデ。 しっかりした貼付高台が外 方に張り出す。	底1/2	
"	13	"	"	-	15.0	-	-	-	"	灰	内外面ヨコナデ	口縁1/8	
"	14	"	"	3.6	14.0	11.4	-	-	チャートの 砂粒を含む	"	体部内外面ヨコナデ。内底不定 方向のナデ。外底ヘラ切り+弱 いヘラケズリ。高台は外縁ぎ りに付く。ロク口回転右回り。	1/3	
"	15	"	"	4.3	13.7	8.9	-	-		内面灰、 外面灰褐	体部内外面丁寧なヨコナデ。 底部内外面丁寧なナデ。ロ ク口回転右回り。	2/5	
"	16	"	"	-	13.5	-	-	-	チャートの 砂粒を含む	灰	内外ヨコナデ。受け部は僅 かに凹む。端部は丸くおさ める。	1/6	
"	17	"	S無頸壺	-	13.4	-	-	-	"	灰白	内外面ヨコナデ。	口縁1/10	
"	18	"	S 甕	-	22.2	-	-	-	チャート他 の砂粒を含 む	灰	摩耗著。内面ヘラケズリ後 ナデか。内外自然釉掛かる。	細片	

遺物観察表 2 (土器)

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	器種 H(土師器) S(須恵器)	法量 (cm)				器高 指数	胎 土	色 調	特 徴	残 存	備 考
				器高	口径	底径	胴径						
Fig11	19	SK1	製塩土器	-	11.2	-	-	-	チャート、 頁岩の砂粒 を含む。	浅黄	内面布目圧痕。外面縦方向 のナデ。二次焼成は認めら れず。	口縁1/4	
"	20	"	土 錘	全長 6.8	全幅 2.0	全厚 1.7	孔径 0.8	-	チャート、 火山ガラス 他の砂粒を 含む。	黒灰		準館	重量19.2 g
Fig12	26	SK2	H 器種 不明	-	-	-	-	-	チャート他 の細粒を含 む	橙	内外面ヨコナデ。焼成堅致。	細片	搬入品。
"	27	"	H 杯	-	-	8.0	-	-	赤色風化礫 粗粒を含む	にぶい橙	外底ナデ	底1/4	
"	28	"	"	-	-	7.5	-	-	火山ガラス を含む	"	内外ヨコナデ。高台脇強い ナデにより凹む。	底1/4	
"	29	"	"	-	-	9.2	-	-		浅黄橙	外面ヘラミガキ。内外摩耗。	底1/8	
"	30	"	"	-	13.2	9.2	-	22		にぶい橙	内外面ヨコナデ。外底丁寧 なナデ。摩耗。	1/4	
"	31	"	"	-	13.0	-	-	-	チャートの 砂粒を含む	にぶい黄橙	内外面ヨコナデ。内外面摩 耗。	1/8	
"	32	"	H 甕	-	21.6	-	-	-	チャート他 の細粒を多 く含む	"	内外面ナデ、胴部外面粗い 木理のハケ。外面ススケ。	細片	
"	33	"	黒色土器碗	-	14.7	-	-	-	精土。雲母 を含む。	内面暗灰、 外面にぶ い黄橙	内黒。内面ヘラミガキ。	細片	搬入品。
Fig13	34	SK3	H 皿	1.9	15.9	11.9	-	12	精土。赤色 風化砂粒を 含む。	浅黄橙	内外面摩耗	1/8	
"	35	"	"	2.1	16.2	10.9	-	13	チャート他 の細粒を含 む	にぶい黄橙	内面ナデ、外面摩耗。外底 切り離し後不定方向のヘラ ケズリ。内底に凹凸を認む。	完形	非回転台成 形か。
"	36	"	"	2.2	15.4	-	-	-	精土。赤色 風化砂粒を 含む。	淡黄	内外面ヨコナデ、底部内面 指頭圧痕による凹凸有り。 外底ナデ。端部つまみ出し。	準完	
"	37	"	"	1.75	17.4	14.6	-	10		橙	外底は切り離し+ヘラケズリ+ ヘラミガキ。内底にもヘラミガ キ。	1/3	
"	38	"	H 杯	-	-	8.4	-	-	精土。赤色 風化砂粒を 含む。	浅黄橙	外底切り離し後弱いヘラケ ズリ+ヘラミガキ。体部内 外面ヨコナデ。外底ススケ。	1/2	
"	39	"	"	2.9	13.7	9.4	-	21.2		"	内外ヨコナデ	1/8	
"	40	"	"	3.2	15.2	9.0	-	21		橙	内外ヨコナデ+ヘラミガキ。	1/8	
"	41	"	H 甕	-	14.8	-	-	-	チャート他 の細粒を含 む	にぶい黄褐	頸部に上下 2 本の強いナデ により突帯状に作り出す。 内面ナデ。	細片	

遺物観察表3(土器)

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	器種 H(土師器) S(須恵器)	法量 (cm)				器高 指数	胎 土	色 調	特 徴	残存	備 考
				器高	口径	底径	胴径						
Fig13	42	SK3	S 皿	1.6	15.0	7.1	-	10.7	チャート、 頁岩他の砂 粒を含む。	灰黄	外底ナデ、他は強いヨコナ デ。切り離した後ナデ。外面 に火禿有り。	1/4	
"	43	"	"	1.9	15.3	12.2	-	12.4		灰白。内 外底暗灰	体部外面ナデ+ヘラミガキ。 外底平行圧根。	1/4	
"	44	"	S 杯	-	14.8	-	-	-	精土	灰白	口縁内面にごく弱い沈線。 内外ヨコナデ。	口縁1/8	
"	45	"	"	3.83	9.8	6.2	-	38.8		"	内外ヨコナデ、外底ナデ。	1/4	
"	46	"	S 高杯	-	-	-	-	-	精土	"	脚内外ヨコナデ。杯部内面 丁寧なナデ。	脚部2/3	
"	47	"	製塩土器	-	12.9	-	-	-	チャート他 の細粒を含 む	にぶい黄橙	内面布目圧痕	細片	
"	48	"	"	-	11.8	-	-	-	"	灰白	二次焼成を受け還元色を呈 す。よく焼き締る。	細片	
"	49	"	"	-	9.9	-	-	-	"	淡黄	内面布目圧痕	細片	
"	50	"	"	-	7.0	-	-	-	チャート他 の細粒を多 く含む	灰	内面布目圧痕。二次焼成を 受け還元色を呈す。	口縁1/8	
"	51	"	"	-	10.6	-	-	-	チャート、 火山ガラス 他の細粒を 含む。	灰黄	内面縦方向の布痕。二次焼 成を受け還元色を呈す。焼 き締る。	細片	
"	52	"	"	-	-	-	-	-	チャート他 の細粒を多 く含む。	にぶい橙	内面下から上へのヘラケズ リ。よく焼き締る。	細片	
"	53	"	土 錘	全長 4.5	全幅 1.2	全厚 1.1	孔径 0.4	-				完形	重量5.1 g
"	54	"	"	全長 3.9	全幅 1.2	全厚 1.2	孔径 0.5	-	チャート他 の砂粒を多 く含む	にぶい橙		一端欠損	重量5.2 g
"	55	"	"	全長 5.2	全幅 1.2	全厚 1.1	孔径 0.4	-	精土	にぶい黄褐		完形	重量6.0 g
"	56	"	"	全長 4.6	全幅 1.0	全厚 0.8	孔径 0.4	-	"	にぶい橙		完形	重量3.7 g
"	57	"	"	全長 5.5	全幅 1.2	全厚 1.2	孔径 0.4	-	"	"		準完	重量7.1 g
"	58	"	"	全長 5.8	全幅 1.2	全厚 1.2	孔径 0.5	-	"	"	両端面、面取り。	完形	重量8.1 g
"	59	"	"	全長 4.7	全幅 2.2	全厚 (1.8)	孔径 0.6	-	チャートの 砂粒を含む	"	両端面、面取り。	1/4欠損	重量19.6 g

遺物観察表4(土器)

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	器種 H(土師器) S(須恵器)	法量 (cm)				器高 指数	胎 土	色 調	特 徴	残存	備 考
				器高	口径	底径	孔径						
Fig13	60	SK3	土 錘	全長 5.0	全幅 2.0	全厚 2.0	孔径 0.5	-	精土	灰白	両端面、面取り	完形	重量16.8 g
Fig14	61	SK4	H 皿	1.6	12.0	7.6	-	13.3		にぶい橙	内外摩耗。ヘラ切り後ヘラケズリ+ナデ。	2/5	
"	62	"	"	1.5	13.6	-	-	11		"	内面摩耗。外底切り離し後ヘラケズリ+ナデ。	2/5	
"	63	"	"	1.7	15.2	11.6	-	11.2		内面灰褐、 外面にぶい橙	内外ヨコナデ。切り離し後ヘラケズリ+ナデ。口縁外面全体にススケ。	1/2	
"	64	"	H 蓋	-	-	-	摘み径 2.8	-	チャート他 の細粒を含む	にぶい橙	内外面摩耗	細片	
"	65	"	H 杯	-	-	7.8	-	-	"	橙	内外面摩耗	1/3	
"	66	"	"	-	-	6.2	-	-	チャート、 火山ガラス 他の細粒を含む。	にぶい橙	底部ヘラ切り後ヘラケズリ+ナデ。立ち上がり部強いナデ。内面摩耗。	底1/3	
"	67	"	"	-	-	9.0	-	-	チャートの 細粒を含む	橙	内外面摩耗	1/5	
"	68	"	"	-	-	10.0	-	-	チャート他 の細粒を含む	"	内外面摩耗	底1/6	
"	69	"	"	-	-	10.0	-	-	"	"	内外摩耗。ヨコナデ基調。高くしっかり外方にふんばる高台。	底1/3	
"	70	"	H 甕	-	22.4	-	-	-	チャート、 金雲母を含む。	内面にぶい橙、 外面にぶい赤褐	口縁内外ヨコナデ。体部外面ハケ、他はナデ。	細片	
"	71	"	"	-	24.0	-	-	-	石英、雲母 粒を含む。	にぶい橙	口縁内外ヨコナデ、口唇部は強いヨコナデにより凹状を呈す。胴部外面、頸部内面粗い木理のハケ、他はナデ。胴部内面ススケ。	口縁1/6	
"	72	"	S 蓋	-	17.0	-	-	-	精土	灰白	内外回転ナデ	細片	
"	73	"	S 杯	-	-	8.4	-	-	チャート他 の細粒を含む	"	外底ナデ、他はヨコナデ。外底にヘラ記号有り。	底1/6	
Fig15	74	SK5	H 皿	1.68	15.0	13.0	-	-	チャート、 石英他の砂 粒を含む。	内面橙、 外面黄橙	内面密なヘラミガキ。体部外面ヨコナデ+ヘラミガキ。外底ヘラ切り+不定方向のヘラミガキ。	1/3	
"	75	"	"	1.5	11.8	5.0	-	-	精土	橙	内面全面ヘラミガキ。体部外面ヨコナデ+ヘラミガキ。外底摩耗するがヘラミガキとみられる。74と同一か。	口縁1/6	
"	76	"	"	-	15.2	-	-	-	"	淡赤橙	内外摩耗。ヘラミガキありか。	細片	
"	77	"	"	1.8	14.6	-	-	-	チャート、 石英他の砂 粒を含む。	内面橙、 外面にぶい橙	内面ヘラミガキ、体部外面ヨコナデ。外底摩耗のため不明。口縁内面スス。	1/8	非回転土師器の可能性あり。

遺物観察表5(土器)

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	器種 H(土師器) S(須恵器)	法量 (cm)				器高 指数	胎 土	色 調	特 徴	残存	備 考
				器高	口径	底径	胴径						
Fig15	78	SK5	H 皿	-	16.6	-	-	-	チャートの 細粒を含む	にぶい橙	摩耗。内外底ヘラミガキ。 粘土帯接合部で剥離。	1/4	
"	79	"	"	1.8	18.0	13.2	-	10	チャート他 の細粒を含む	"	内外面摩耗	口縁1/12	
"	80	"	H 高杯	-	16.6	-	-	-	チャートの 細粒を含む	橙	内面摩耗。体部ヨコナデ+ ヘラミガキ。外底ヘラミガ キ。78と同一か。	3/4	
"	81	"	H 蓋摘み	-	-	-	摘み径 2.6	-		にぶい橙	摩耗	摘み完	
"	82	"	H 蓋	2.35	12.6	-	摘み径 2.0	-	赤色風化砂 粒を含む	"	摩耗。天井部外面ナデ、摘 み上面ヨコナデ。	3/4	
"	83	"	"	-	17.6	-	-	-	チャートの 細粒を含む	浅黄橙	外面ヨコナデ。内面摩耗。	口縁1/8	
"	84	"	H 杯	3.0	13.0	8.0	-	23		橙	外面ヨコナデ+外底丁寧な ナデ。内面摩耗のため調整 不明。	1/3	
"	85	"	"	3.4	13.2	7.9	-	26	チャートの 砂粒を含む	"	体部は内外ヨコナデ+ヘラ ミガキ。全面摩耗のため単 位は不明瞭。	3/4	
"	86	"	"	3.7	14.0	9.0	-	-		"	内外ヨコナデ+ヘラミガキ。 外面摩耗。外底ヘラ切り+ ヨコナデ。	4/5	
"	87	"	"	3.2	14.0	10.0	-	23		"	内外ヨコナデ+ヘラミガキ。 外面摩耗。外底ヘラミガキ。	1/6	
"	88	"	"	3.4	14.6	9.1	-	23	精土	淡黄	体部内外ヨコナデ。口縁部 内面一条の強いヨコナデに より凹む。外底ヘラ切り後 粗雑なナデ。	1/6	
"	89	"	"	2.98	13.0	7.2	-	23		にぶい橙	内外ヨコナデ+ヘラミガキ。 内面摩耗。外底丁寧なナデ 調整。	1/4	
"	90	"	"	3.2	15.9	9.6	-	21	精土	橙	内面ヨコナデ+ミガキ、外 面ヨコナデ。外底丁寧なナ デ。	1/3	
"	91	"	"	5.3	15.6	7.3	-	-	"	にぶい黄橙	貼付高台。内面全面すまの ない丁寧なヘラミガキ。外 面ヨコナデ+ヘラミガキ、 体部下半はヨコナデ。外 底丁寧なヨコナデ。焼成堅 致。	1/5	
Fig16	92	"	H 杯か	-	-	-	-	-		橙	内外面摩耗。外底平行圧根。	底1/8	
"	93	"	H 杯	-	-	11.2	-	-	精土	にぶい橙	外底丁寧なナデ。内外摩 耗。	底1/3	
"	94	"	"	-	-	10.4	-	-	"	浅黄橙	外面ヨコナデ、外底丁寧な ナデ。内面摩耗のため調整 不明。	底1/3	
"	95	"	"	-	-	9.5	-	-	チャートの 細粒を含む	にぶい黄橙	内外面摩耗のため調整不明。 粘土紐(巾1.5cm)単位を認 める。	底準完	

遺物観察表6(土器)

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	器種 H(土師器) S(須恵器)	法量 (cm)				器高 指数	胎 土	色 調	特 徴	残存	備 考
				器高	口径	底径	胴径						
Fig16	96	SK5	H 杯	-	14.4	-	-	-		にぶい赤橙	内外ヨコナデ。摩耗。	1/5	
"	97	"	"	-	14.6	-	-	24		にぶい橙	内外ヨコナデ+ヘラミガキ。	1/6	
"	98	"	"	-	-	9.4	-	-	精土	浅黄橙	内底全面ヘラミガキ。外面ヨコナデ。外底丁寧なヨコナデ。貼付高台剥離。焼成堅致。91と同一か。	底1/4	
"	99	"	H 甕	-	18.7	-	-	-	チャートの砂粒を多く含む	内面にぶい黄橙、外面橙	口縁外面ヨコナデ、内面横位のハケ。胴部外面縦位のハケ。内外ススケ。	口縁1/6	
"	100	"	"	-	26.4	-	-	-	チャートの角礫を多く含む	にぶい褐	口縁外面ヨコナデ、胴部外面縦位のハケ、内面横位のハケ。	口縁1/12	
"	101	"	S 皿	-	15.8	-	-	-	精土	灰	外底平行圧根。他はヨコナデ。外底削り+ナデ。ロク口右回転。	口縁1/4	
"	102	"	S 杯	2.4	17.2	13.4	-	-		灰白。底部のみ内外暗灰。	体部内外ヨコナデ。摩耗。	1/10	
"	103	"	S 皿	2.0	21.0	16.0	-	-		灰白	外底丁寧なナデ。平行圧根あり。他は内外ヨコナデ。	口縁1/8	
"	104	"	"	-	-	13.8	-	-		"	外底ヘラ切り+ナデ、内面横ナデ。摩耗。	底1/2	
"	105	"	S 蓋	3.7	18.5	-	摘み径 2.7	-	精土	"	天井部内外面粗いナデ、他は内外ヨコナデ。	1/2	
"	107	"	"	-	19.8	-	-	-		"	内外面ヨコナデ	細片	
"	108	"	"	-	24.4	-	-	-	チャート他の細粒を含む	"	内外面ヨコナデ。内外摩耗。	細片	
"	109	"	S 杯	-	-	5.9	-	-	精土	"	内面ヨコナデ。外底ヘラ切り+ナデ。平行圧根あり。	底部のみ	
"	110	"	"	-	-	5.7	-	-	"	"	体部内外ヨコナデ。内底ナデ、外底ヘラ切り+粗いナデ。外底粘土紐の単位認む(巾1cm)。内面に赤色の塗料付着。	底4/5	
"	111	"	"	-	12.0	-	-	-	"	"	内外ヨコナデ。摩耗。	細片	
"	112	"	"	-	14.0	-	-	-	"	"	内外丁寧なヨコナデ	口縁1/8	
"	113	"	"	-	13.4	-	-	-	"	"	内外ヨコナデ。摩耗。	口縁1/6	
"	114	"	"	-	-	8.0	-	-	"	灰	外底および立ち上がり部ナデ、他は回転ナデ。内外摩耗。	底1/3	

遺物観察表7(土器)

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	器種 H(土師器) S(須恵器)	法量 (cm)				器高 指数	胎 土	色 調	特 徴	残存	備 考
				器高	口径	底径	胴径						
Fig16	115	SK5	S 杯	-	-	8.6	-	-	精土	灰白	外底ナデ、平行圧根あり。 他はヨコナデ。	底1/4	
"	116	"	"	-	-	8.8	-	-		"	外底へら切り+丁寧なナデ、 他はヨコナデ。	底1/3	
"	117	"	"	-	-	9.8	-	-	精土	"	内外ヨコナデ。外底へら切 り+ナデ。	1/6	
"	118	"	S 壺	-	15.0	-	-	-	細粒を若干 含む	灰	内外ヨコナデ。焼成堅緻。	細片	
"	119	"	緑釉陶器皿	-	-	-	-	-	精土	淡黄、釉 色緑灰白	内外面に透明度の高い釉。	細片	
"	120	"	製塩土器	-	10.2	-	-	-	チャート、 石英他砂粒 を多く含む	にぶい黄橙	内面布目圧痕	口縁1/6	
"	121	"	"	-	9.2	-	-	-	チャート他 の砂粒を多 く含む	"		口縁1/8	
"	122	"	"	-	9.4	-	-	-	チャート他 の細粒を多 く含む	灰白	二次焼成を受け還元色を呈 す。	口縁1/5	
"	123	"	"	-	11.5	-	-	-	チャートの 細粒、角粒 を含む	にぶい黄橙	内面布痕跡	口縁1/8	
"	124	"	"	-	-	-	-	-	石英、チャ ート他砂粒 を多く含む	にぶい黄		底完	
"	125	"	土 錘	全長 3.3	全幅 1.1	全厚 0.9	孔径 0.4	-	精土	にぶい橙		完形	重量3.0g
"	126	"	"	全長 4.7	全幅 1.1	全厚 1.1	孔径 0.5	-		にぶい黄橙			重量4.0g
"	127	"	"	全長 4.1	全幅 1.1	全厚 1.0	孔径 0.5	-		灰白			重量3.0g
"	128	"	"	全長 5.1	全幅 0.9	全厚 1.0	孔径 0.4	-		"			重量3.6g
"	129	"	"	全長 4.7	全幅 0.9	全厚 0.8	孔径 0.4	-		"			重量3.4g
"	130	"	"	全長 4.8	全幅 1.2	全厚 1.2	孔径 0.5	-	精土	にぶい橙	両端面、面取り		重量6.3g
"	131	"	"	全長 5.8	全幅 1.2	全厚 1.2	孔径 0.4	-		"	上下は切断したようなシャ ープな面をなす。		重量8.3g
Fig17	132	SK6	H 皿	-	19.9	-	-	-		内面橙外 面にぶい 橙	内外面ヨコナデ、内面は後 暗文を施す。	口縁1/16	

遺物観察表 8 (土器)

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	器種 H(土師器) S(須恵器)	法量 (cm)				器高 指数	胎 土	色 調	特 徴	残存	備 考
				器高	口径	底径	胴径						
Fig17	133	SK6	H 皿	-	20.6	-	-	-	チャート他の細粒、火山ガラスを含む。	橙	内面ヨコナデ+ヘラミガキ、外面ヨコナデ+暗文風ヘラミガキ。内面摩耗。	1/16	
"	134	"	H 蓋	-	12.1	-	-	-	精土	"	外面ヨコナデ+ヘラミガキ。内面摩耗。	口縁1/4	
"	135	"	"	-	-	-	摘み径 2.1	-	"	"	丁寧なナデ		
"	136	"	"	2.6	16.0	-	-	-		明赤褐	摘み剥離。内外面丁寧なヘラミガキ。天井部ヘラケズリ+ヘラミガキ。	4/5	搬入品か。
"	137	"	S 杯	-	14.0	-	-	-	精土	淡黄	内外ヨコナデ。摩耗。	口縁1/8	
"	138	"	H 杯	3.2	25.0	10.0	-	22	"	橙	内外ヨコナデ。外底丁寧なナデ。内面摩耗。	口縁1/5	
"	139	"	H 甕	-	11.4	-	-	-	チャート、火山ガラス、長石の砂粒を多量に含む。	"	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面右下がりのハケ。	1/16	
"	140	"	"	-	32.0	-	-	-	チャート、火山ガラス他の砂粒を含む。	明赤褐	口縁部内外面ヨコナデ。	1/16	
"	141	"	"	-	24.0	-	-	-	チャート他の砂粒を多く含む	にぶい赤褐	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面タテ方向のナデ。	1/16	
"	142	"	S 蓋	-	18.0	-	-	-	精土	灰白	内外ヨコナデ。硬。外面一部自然釉。	細片	
"	143	"	S 杯	-	11.0	-	-	-	チャート他の砂粒を含む	灰	内外ヨコナデ。外面下半ヘラケズリ。硬。	口縁1/10	
"	144	"	"	-	14.6	-	-	-		灰白	内面丁寧なヨコナデ。外面ヘラミガキのように丁寧なナデ。	口縁1/6	
"	145	"	"	5.0	16.2	9.4	-	31	チャート他の細粒を含む	"	内面ヨコナデ。外面丁寧なナデ。外底不定方向のヘラケズリ+丁寧なナデ。内底摩耗。	1/3	
"	146	"	"	-	-	8.0	-	-		灰	内外面摩耗	底1/3	
"	147	"	"	-	-	10.4	-	-		灰白	内外ヨコナデ。外底ヘラ切り+ナデ。	底1/6	
"	148	"	S 脚	-	-	-	-	-	精土	"	内外丁寧なヨコナデ	1/3	
"	149	"	S 壺か	-	8.2	-	-	-	チャート他の砂粒を含む	灰	内外ヨコナデ。内外自然釉。硬。	口縁1/3	
"	150	"	S 壺	-	-	-	-	-	チャート他の細粒を含む	内面灰、外面濃灰	内外ヨコナデ	肩部1/4	

遺物観察表9(土器)

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	器種 H(土師器) S(須恵器)	法量 (cm)				器高 指数	胎 土	色 調	特 徴	残存	備 考
				器高	口径	底径	胴径						
Fig18	151	SK6	製塩土器	-	9.4	-	-	-	チャートの細粒、火山ガラスを含む。	灰白	内面布目圧痕	細片	
"	152	"	"	-	-	-	-	-	チャートの細粒を含む	にぶい橙	内面布目圧痕	細片	
"	153	"	"	-	-	-	-	-	"	"	内面布目圧痕	底部細片	
"	154	"	土 錘	全長 4.0	全幅 1.2	全厚 1.2	孔径 0.4	-		"		完形	重量4.5g
Fig19	156	SK8	H 皿	1.3	15.0	12.0	-	-	精土	橙	内面ヘラミガキ。外面下半は剥落して凹凸する。	細片	非回転台成形。搬入品。
"	157	"	H 杯	4.9	30.3	15.8	-	-	"	"	赤彩。器表剥離。内外丁寧なヨコナデ。外底ヘラケズリ+ナデ+塗布。	1/2	搬入品か
"	158	"	"	-	14.0	-	-	-		にぶい橙	内外摩耗	口縁1/8	
"	159	"	H 甕	-	23.2	-	-	-	チャートの砂粒を多く含む	明赤褐	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面ヨコナデ、外面タテ方向のナデ。	口縁1/4	
"	160	"	S 蓋	-	-	-	摘み径 3.0	-	チャート他の砂粒を含む	灰		摘み完	
"	161	"	S 杯	-	-	10.0	-	-		"	内外面ヨコナデ。内外底ナデ。	底1/8	
"	162	"	"	-	-	7.95	-	-	精土。火山ガラスを含む	"	内外面ヨコナデ。外底丁寧なヨコナデ。ヘラ記号有り。	底完	
"	163	"	S 鉢	-	14.8	-	-	-	チャート、火山ガラスの細粒を含む。	"	内外ヨコナデ。把手は欠損。取り付け部は指ナデ。	口縁1/4	
"	164	"	土 錘	全長 5.8	全幅 2.2	全厚 2.0	孔径 0.6	-	精土。火山ガラスを含む。	にぶい黄橙	一方は未貫通。面取り。	準完	重量31.0g
Fig20	166	SK9	H 高杯	-	26.7	-	-	-		明赤褐	内面ナデ後ヘラミガキか。口縁部へ逃げるナデ。	細片	非回転台成形か。搬入品。
"	167	"	S 皿	2.0	15.2	12.0	-	-		灰白	体部内外面ヨコナデ。内底同心円状の当て具痕+弱いナデ。外底ミガキ状調整。植物による圧痕有り。	1/4	
"	168	"	S 蓋	-	-	-	摘み径 2.85	-	精土	灰	内外面丁寧なヨコナデ	天井部 1/6	
"	169	"	"	-	18.6	-	-	-	"	灰白	内外面摩耗	1/6	
"	170	"	"	-	19.2	-	-	-	"	"	天井部内外面ナデ。内面は丁寧。他はヨコナデ。	1/4	

遺物観察表10(土器)

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	器種 H(土師器) S(須恵器)	法量 (cm)				器高 指数	胎 土	色 調	特 徴	残存	備 考
				器高	口径	底径	胴径						
Fig20	171	SK9	S 蓋	-	21.8	-	-	-	精土	灰白	内外ヨコナデ。天井部外面ナデ。平行圧根有り。	1/6	
"	172	"	"	-	23.5	-	-	-	"	"	天井部内外面不定方向のナデ。他はヨコナデ。粘土紐接合部で剥離。	1/5	
"	173	"	S 杯	2.25	8.3	5.0	-	-	"	にぶい黄橙	外面立ち上がり部ヘラケズリ、他はヨコナデ。内面摩耗。焼成悪。	1/8	
Fig21	174	SK10	S 蓋	1.5	17.0	-	-	-		灰	内外面ヨコナデ	細片	
"	175	SK11	土 錘	全長 4.0	全幅 1.2	全厚 1.1	孔径 0.5	-	チャートの 細粒を含む	橙	片側面取り	一部欠損	重量3.9g
Fig22	176	SK12	H 皿	3.4	18.0	14.7	-	-		"	外底は粗いナデのため指頭圧痕残る。部分的に弱いヘラケズリ。	準完	非回転台成形。搬入品。
"	177	"	"	-	15.8	-	-	-	雲母、火山ガラス他の細粒を含む。	"	内面暗文風のヘラミガキ。内外面摩耗。	口縁1/8	搬入品か
"	178	"	S 皿	-	19.6	-	-	-	チャート他の細粒を含む	灰	内外面摩耗	細片	
"	179	"	S 蓋	-	15.4	-	-	-	チャートの細粒を含む	"	天井部内外面ナデ。他はヨコナデ。ロクロ回転右回り。	1/4	
"	180	"	"	-	-	-	-	-	チャート他の細粒を含む	"	内外面ヨコナデ	細片	
"	181	"	S 杯	-	14.7	-	-	-	"	灰黄	外面ヨコナデ。調整時砂粒(巾1.5mm)による凹みが廻る。	口縁1/5	
"	182	"	S 杯身	-	11.2	受け 部径 13.5	-	-	"	灰	内外面ヨコナデ	1/8	
"	183	"	S 壺蓋	-	8.4	-	-	-		灰白	立ち上がり内外ヘラケズリ。内面ナデ。外面オリーブ灰色の自然釉がかかる。	1/3	
"	184	"	S 甕	-	30.0	-	-	-	チャート他の細粒を含む	灰	内外面ヨコナデ	口縁1/12	
"	185	"	"	-	-	-	26.8	-	"	"	内面同心円上の、外面平行のタタキ+ハケ。焼膨らむ。一部自然釉がかかる。	胴部2/5	
Fig23	187	SK14	H 皿	-	16.9	-	-	-		橙	外面摩耗のため剥落。口縁部内面弱いナデにより、沈線状に凹む。内面暗文風のヘラミガキ。	細片	搬入品
"	188	"	H 甕	-	16.0	-	-	-	チャート他の細粒を多く含む	"	内外面摩耗。胴部外面縦方向のハケ。	口縁1/4	
"	189	"	S 蓋	-	18.1	-	-	-	チャート他の砂粒を含む	灰白	天井部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。ロクロ回転右回り。	1/4	

遺物観察表11(土器)

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	器種 H(土師器) S(須恵器)	法量 (cm)				器高 指数	胎 土	色 調	特 徴	残存	備 考
				器高	口径	底径	胴径						
Fig23	190	SK14	S 杯	-	17.1	-	-	-	チャート他の細粒を含む	灰白	内外面ヨコナデ。	1/8	
"	191	"	"	-	-	9.6	-	-	"	"	内外面ヨコナデ	1/4	
"	192	"	S 摺鉢	-	-	9.8	-	-	チャート他の砂粒を含む	灰	内外面ナデ	底1/2	
"	193	"	製塩土器	-	16.7	-	-	-	"	淡黄	二次被熱痕跡無し	細片	
Fig24	194	SK15	H 甕	-	16.2	-	-	-	チャート他の砂粒を多く含む	にぶい黄橙	内外面摩耗。接合部で剥離。	口縁1/4	
"	195	"	"	-	18.0	-	-	-	チャート他の砂粒を含む	"	口縁部外面ハケ。内外面摩耗。	1/8	
"	196	"	S 杯	-	13.1	-	-	-	"	灰	内外面ヨコナデ	口縁1/6	
"	197	"	"	4.9	15.0	6.0	-	-	"	灰白	内外面摩耗のため荒れる	1/4	
"	198	"	"	3.75	15.3	11.4	-	22	チャートの細粒を含む。	灰	体部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	1/3	
"	199	"	S 高杯	-	-	10.8	-	-	チャート他の細粒を含む	灰白	内外面摩耗。焼成軟質。	脚部準完	
"	200	"	"	-	-	10.3	-	-	精土	"	内外面ヨコナデ	裾部1/3	
"	201	"	"	-	-	10.5	-	-	"	"	裾部内面強いナデ。内外面摩耗。	脚部準完	
Fig25	203	SK16	H 皿	2.0	23.6	-	-	-	"	にぶい黄橙	内外面ヨコナデ	細片	
"	204	"	S 杯	-	15.6	-	-	-	チャート他の細粒を含む	灰黄	内面ヨコナデ。外面摩耗。	細片	
"	205	"	S 鉢	-	23.8	-	-	-	精土	灰	外底ヘラケズリ。内底ナデ。他はヨコナデ。	細片	
"	206	"	S 蓋	-	13.1	-	-	-	チャート他の砂粒を含む	オリーブ灰	内外面ヨコナデ。外面下半ヘラケズリ。	1/8	
Fig26	207	SK25	H 蓋	-	22.0	-	-	-	外面淡黄、内面黒灰。	淡黄	内外面摩耗。天井部内面黒斑。	細片	
"	208	"	S 皿	-	20.4	-	-	-	チャート他の砂粒を含む	灰白	焼成軟質。摩耗。	口縁1/3	

遺物観察表12 (土器)

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	器種 H(土師器) S(須恵器)	法量 (cm)				器高 指数	胎 土	色 調	特 徴	残存	備 考
				器高	口径	底径	胴径						
Fig26	209	SK25	S 蓋	-	16.4	-	-	-	チャート他 の砂粒を多 く含む	灰	天井部内・外面ヘラケズリ+ ヨコナデ。口縁部内外面ヨ コナデ。ロク口回転右回り。	1/8	
"	210	"	"	2.7	14.9	摘み径 2.35	-	-		灰白	天井部外面ヘラケズリ+ナ デ。体部内外面ヨコナデ。 ロク口回転右回り。	準完	
"	211	"	S 杯	-	-	8.0	-	-	チャート他 の細粒を含 む	"	内外面摩耗	底完	
"	212	"	"	4.6	13.4	7.9	-	34	"	"	体部内外面ヨコナデ。底部 ヘラ切り後ナデ。焼成軟質。 摩耗。	4/5	
"	213	"	"	4.4	13.1	11.0	-	31	"	灰	体部内外面ヨコナデ。内底ナデ。 外底ヘラケズリ+ナデ。高台接 合部(底側)強いナデにより凹 む。ロク口回転右回り。	1/4	
"	214	"	S 高杯	-	-	-	-	-	チャート他 の砂粒を含 む。	内面灰白、 外面灰黄	内底ナデ。外面ヘラケズリ+ ナデ。ロク口回転右回り。	底3/4	
"	215	"	S 鉄鉢	-	21.0	-	-	-	精土	灰白	内外面丁寧なヨコナデ。	1/7	
"	216	"	"	-	-	-	33.6	-	"	内面灰白、 外面灰	内外面ヨコナデ。把手部分 および取り付け部の内面指 頭圧痕顕著。	胴周1/8	
Fig27	217	P29	S 杯	-	14.8	-	-	-	"	灰白	内外面丁寧なヨコナデ	細片	
"	219	P40	H 杯	-	13.5	-	-	-	チャートの 砂粒を含む	にぶい橙	内外面ヨコナデ	細片	
"	220	"	"	-	-	7.6	-	-		橙	内外面摩耗	細片	
"	221	P41	"	3.6	12.0	5.0	-	-		にぶい黄橙	内外面摩耗	1/3	
Fig28	222	P51	S 甕	-	-	-	-	-	チャートの 砂粒を含む	灰	内面ヨコナデ。外面平行タ タキ。	肩部1/10	
"	223	P67	S 皿	-	16.2	-	-	-	精土	"	内外面ヨコナデ	細片	
"	224	P68	H 杯	4.3	14.8	8.2	-	-	チャート他 の砂粒を含 む	にぶい橙	内外面ヨコナデ	1/8	
"	225	"	H 羽釜	-	22.0	-	-	-	チャート、 角閃石、石 英、長石を 含む。	にぶい黄橙	体部外面縦方向の粗い木理 のハケ。内面上半ナデ、下 半横または斜め方向のハケ。 口縁および鐙部ヨコナデ。	1/2	
"	226	"	弥生土器 甕	-	-	5.4	-	-	チャート他 の砂粒を含 む	にぶい橙	内面横方向のナデ。外面煤 け。	底1/4	
Fig29	227	包含層	H 皿	1.4	16.3	14.0	-	-		灰黄	内外面摩耗。内外底黒斑。 断面に粘土紐接合部を認め る。	口縁1/8	

遺物観察表13(土器)

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	器種 H(土師器) S(須恵器)	法量 (cm)				器高 指数	胎 土	色 調	特 徴	残存	備 考
				器高	口径	底径	胴径						
Fig29	228	包含層	H 皿か	-	-	17.9	-	-	精土	橙	内面暗文。外面ヨコナデ。	細片	
"	229	"	H 皿	-	-	15.5	-	-		"	内外面摩耗	細片	
"	230	"	H 甕	-	11.7	-	-	-	チャート他の砂粒を多く含む	"	内外面摩耗。口縁部外面煤け。	口縁1/3	
"	231	"	"	-	24.4	-	-	-	チャートの角粒を含む	明赤褐	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面タテハケ。煤け。	口縁1/8	
"	232	"	S 皿	1.7	14.0	10.7	-	-	精土	灰白	天井部外面ヘラ切り後丁寧なナデ。内面ヨコナデ。他はヘラケズリ+ヨコナデ。	1/3	
"	233	"	"	2.2	16.8	13.0	-	13.1	"	"	外面火罨。内外底丁寧なナデ。体部ヨコナデ。	口縁1/4	
"	234	"	"	2.2	19.4	-	-	-	"	"	内外丁寧なヨコナデ。口縁つまみ上げ+ヨコナデ。	口縁1/8	
"	235	"	S 蓋	-	11.8	-	-	-	"	灰黄褐	内外ヨコナデ。端部つまみ出し+ヨコナデ。	口縁1/4	
"	236	"	"	2.3	11.4	-	摘み径 2.1	-	"	灰白	丁寧。天井部外面ケズリ+粗いナデ。中央部分のみ内外面とも丁寧なナデにより滑らか。他はヨコナデ。口縁端部つまみ出し+ヨコナデ。	1/3	
"	237	"	"	1.9	12.8	-	-	-	チャートの砂粒を含む	灰黄	天井部外面ケズリ。他はヨコナデ。ロクロ回転右回り。	細片	
"	238	"	"	2.4	12.9	-	摘み径 2.1	-	精土	灰白	丁寧。天井部外面ヘラ切り後ナデ。平行圧根。内面丁寧なナデ。端部つまみ出し+ヨコナデ。	2/3	
"	239	"	"	-	-	-	摘み径 2.5	-	"	"	内外面丁寧なナデ。内底に十字のヘラ記号。	摘み完	
"	240	"	"	2.3	14.0	-	摘み径 3.1	-	チャートの砂粒を含む	外面灰、内面黄灰	天井部外面ケズリ。他はヨコナデ。ロクロ回転右回り。	1/4	
"	241	"	"	2.6	16.0	-	-	-	精土	灰白	外面ケズリ+ヨコナデ。天井部内面ナデ。他はヨコナデ。口縁端部つまみ出し。ロクロ回転右回り。	1/7	
"	242	"	"	-	17.6	-	-	-	"	"	内外面丁寧なヨコナデ。ロクロ回転右回り。	口縁1/10	
"	243	"	"	2.0	19.3	-	-	-	"	"	内面ケズリ+ヨコナデ。外面ヨコナデ。	1/6	
"	244	"	S 杯	-	13.4	-	-	-	"	"	内外面丁寧なヨコナデ	1/8	
"	245	"	"	4.7	13.2	9.2	-	-	チャートの砂粒を多く含む	灰	口縁部外面および内面ヨコナデ。外面ケズリ。外底ナデ。ロクロ回転右回り。	1/3	

遺物観察表14 (土器)

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	器種 H(土師器) S(須恵器)	法量 (cm)				器高 指数	胎 土	色 調	特 徴	残存	備 考
				器高	口径	底径	胴径						
Fig29	246	包含層	S 杯	3.5	8.8	5.6	-	-	チャート他 の砂粒を含 む	灰黄	外底中央ヘラ切り後未調整。 周囲はナデ。体部内外面ヨ コナデ。外面下端ヘラケズ リ。外底平行圧根。	3/4	
"	247	"	"	4.1	14.8	9.7	-	-	精土	灰	内面全面自然釉。外面一部 薄い釉がかかる。外面ヨコ ナデ。外底ヘラ切り+ナデ。	1/6	
"	248	"	"	-	16.2	-	-	-	"	灰白	内外面丁寧なヨコナデ	細片	
"	249	"	"	4.4	14.4	10.7	-	27.1	"	"	丁寧。体部外面下半ケズリ。他は ヨコナデ。内底中央はナデ。外底 ヘラ切り+丁寧なナデ。高台置付 はヨコナデにより凹状を呈す。貼 付高台。ロクロ回転右回り。	2/3	
"	250	"	"	4.2	14.2	9.0	-	-	"	"	丁寧。内底ナデ。体部内外 面丁寧なヨコナデ。外底× 印のヘラ記号。高台置付も ヨコナデにより凹状を呈す。	1/3	
"	251	"	S 把手	-	-	-	-	-	"	"	全面摩耗		
"	252	"	S 壺	-	10.6	-	-	-	"	"	内底粗いナデ。外底丁寧な ナデ。高台丁寧なヨコナデ。 しっかりと八の字に踏ん張 る。	底1/4	
"	253	"	S 把手 (5.7 × 1.3 × 2.4)	-	-	-	-	-	"	灰	平瓶の把手か		
"	254	"	S 甕	-	29.0	-	-	-	チャートの 砂粒を含む	灰白	内外面ヨコナデ	細片	
"	255	"	"	-	-	-	-	-	精土	灰黄	内面同心円状の当て具痕。 外面平行のタタキが交差し て施される。	細片	
"	256	"	緑釉陶器	2.7	14.7	6.7	-	-	"	灰白	薄い緑色の釉で全面施釉。 素地須恵質。体部下半ケズ リ。削り出し高台か。高台 端部丸味を帯びる。	1/5	
"	257	"	緑釉陶器 碗か皿	-	14.9	-	-	-	精土	淡黄	内外面淡い緑色の薄い釉。 素地土師質。	細片	
"	258	"	H 椀	4.8	12.0	5.4	-	27.6	"	"	内外面とも摩耗するが全面 丁寧なヨコナデ+ミガキ。 特種な法量。ロクロ回転左 回り。	3/5	
"	259	"	緑釉陶器 碗	-	-	6.0	-	-	"	淡黄、釉色 灰オリーブ	内外面、高台脇も施釉。素 地土師質。	底1/2	
"	260	"	緑釉陶器 碗か皿	-	-	-	-	-	"	灰白、釉色 オリーブ黄		細片	
Fig30	261	"	製塩土器	-	11.0	-	-	-	チャートの 砂粒を含む	浅黄橙	内外面摩耗。外面横方向の ナデ。表面一部剥落。	口縁1/3	
"	262	"	"	-	-	-	-	-	"	橙	内面布目圧痕	細片	
"	263	"	土 錘	全長 4.1	全幅 1.8	全厚 1.7	-	-	"	にぶい橙	摩耗。両端面面取り。	完形	重量10.4 g

遺物観察表15 (土器)

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	器種 H(土師器) S(須恵器)	法量 (cm)				器高 指数	胎 土	色 調	特 徴	残存	備 考
				器高	口径	底径	胴径						
Fig30	264	包含層	土 錘	全長 4.0	全幅 2.2	全厚 2.2	-	-		灰黄	両端面面取り	完形	重量17.4 g
"	265	"	碗 か	-	-	5.5	-	-		灰白	景德鎮窯系。内面二重圈線、 外面芭蕉葉の連続文か。	細片	
"	266	"	甕	-	19.8	-	-	-		内外面浅黄	尾戸焼。不透明な白色釉。 素地チョコレート色。	細片	
"	267	攪乱	S 蓋	-	15.3	-	-	-	チャート他 の砂粒を含 む	灰	天井部中央外面粗いケズリ。 内面ナデ。他はヨコナデ。 口ク口回転左回り。	1/8	
"	268	"	鉢	-	-	9.2	-	-		外面褐色、 内面暗灰 黄、断面 にぶい橙	唐津焼。削り出し高台。高 台内露体。外面褐釉、内面 二彩手。	1/6	
"	269	"	煙 管 (7.6)	全幅 1.1	全厚 1.0	-	-				断面円形。全面に緑青がま わる。		
"	270	"	白磁紅猪口	1.4	4.9	1.6	-	-		灰白	肥前。外面下位露体。	完形	

遺物観察表16 (石器)

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	器 種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				全長	全幅	全厚	重量 (g)		
Fig11	21	SK1	砥石	5.3	5.6	1.1	34.6	砂岩製	
"	22	"	"	7.8	7.8	0.9	61.9	砂岩製	
"	23	"	"	11.0	8.2	3.2	540.0	砂岩製。三面に使用痕。裏面に叩き痕有り。	
"	24	"	"	15.8	9.0	5.8	850.0	砂岩製。三面に使用痕。	
"	25	"	"	19.9	15.0	4.0	1813.0	砂岩製。一面に使用痕。	
Fig18	155	SK6	"	10.4	6.1	3.5	219.0	石英粗面岩製。四面に使用痕。	
Fig19	165	SK8	軽石	7.8	7.5	4.4	76.5		
Fig22	186	SK12	叩き石	13.3	7.9	3.3	705.0	石英粗面岩製	
Fig24	202	SK15	砥石	7.0	4.5	1.2	34.0	石英粗面岩製。裏面にも使用痕有り。	
Fig27	218	P38	叩き石・砥石	7.5	6.6	3.0	245.0	細粒砂岩製。5面に使用痕。	

写真図版



調査前全景（西から）



同 上（北西から）

PL 2



SK 1



SK 1 (土器出土)



SK 3 ・ 11



SK 3 遺物出土状況



SK 5 遺物出土状況



同 上



SK5 セクション



SK5 完掘



SK 3 セクション



SK 3 遺物出土状況



SK 6 セクション



SK 6 セクション



SK 6 完掘状況



SK 8 セクション



SK 8 遺物出土状況



SK 8 遺物出土状況 (土師器)



SK 8 完掘状況



SK 9 完掘状況



SK12完掘状況



SK12 (土師器)



SK15完掘状況



SK16セクション



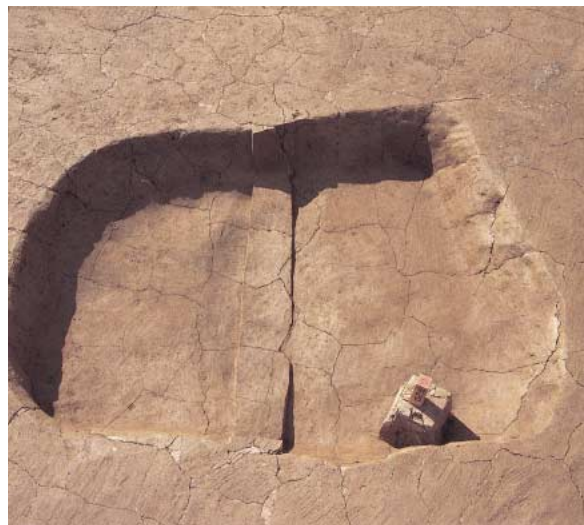
SK16完掘状況



SK25



SK25セクション



SK25完掘状況



A区完掘状況（南から）



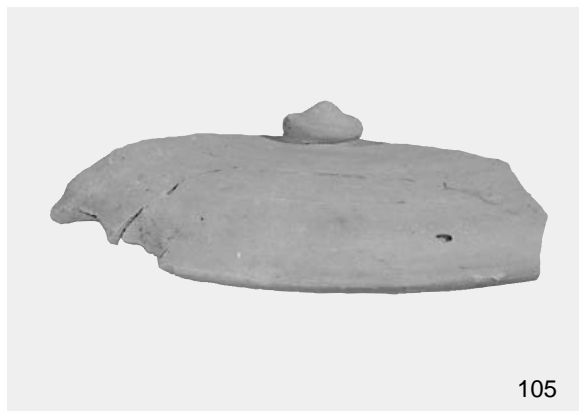
同 上（西から）



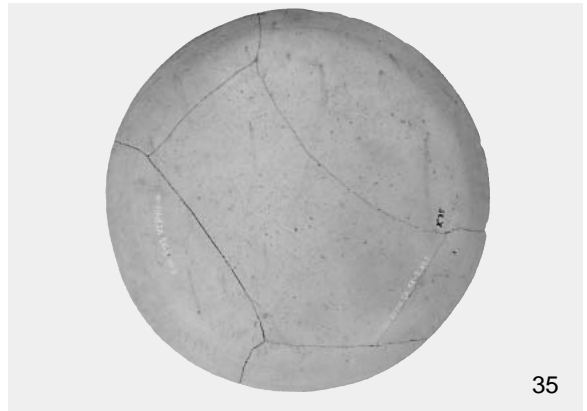
須恵器蓋 (5) ・ 同杯 (8・15) 土師器杯 (30・85・86) ・ 同皿 (63)



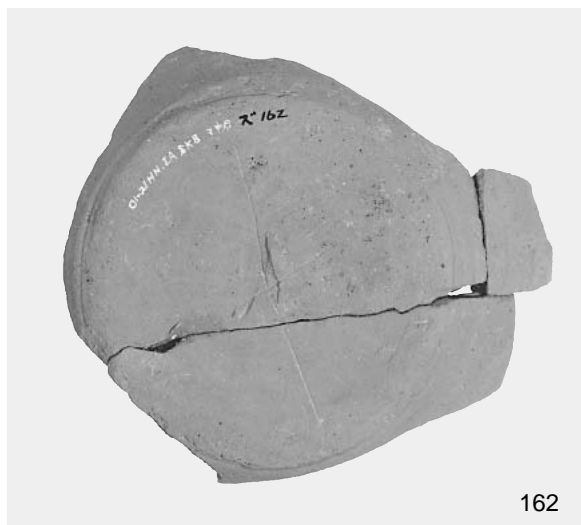
須恵器脚部 (201) ・同蓋 (210・238) ・同杯 (212・213) ・同鉄鉢 (215) ・同鉢 (216) 土師器羽釜 (225)



須恵器蓋 (105) ・同杯 (197・198) ・同鉢 (163) ・同播鉢 (192) 土師器皿 (157)



須恵器杯 (250) 土師器皿 (1・35・176)



須恵器杯 (11 ・ 14 ・ 162 ・ 249) 同脚部 (46) 製塩土器 (267)



24



24



24



155



155



155



218



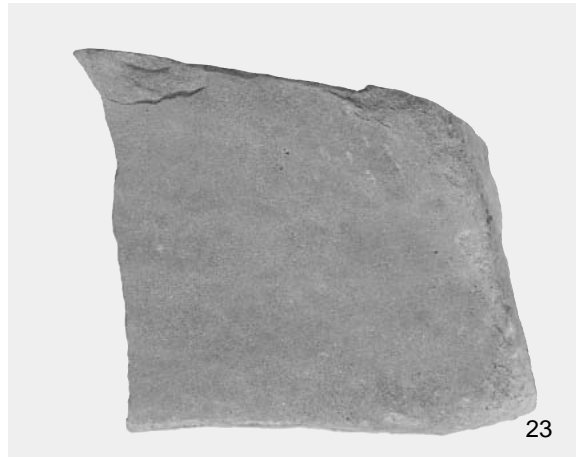
218



218



23



23

砥 石

報告書抄録

ふりがな	にしぶんますいせき							
書名	西分増井遺跡							
副書名	新川川広域河川改修に伴う西分増井遺跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第80集							
編著者名	出原恵三・山本純代							
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原1437 - 1 TEL 088 - 864 - 0671							
発行年月日	2003年2月							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °	東経 °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしぶんますい 西分増井 いせき 遺跡	こうちけん 高知県 あがわぐん 吾川郡 はるのちょう 春野町 なるおか ちゅうおう 成岡、中央	39383	340015	33° 29 50	133° 29 50	2001年10月1日 ~ 2002年3月10日 2002年4月8日 ~ 7月30日	1700m ²	河川改修 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西分増井 遺跡	集落跡 祭祀跡	古代	土坑15基	土師器 須恵器 製塩土器		遺跡の位置は世界 標準座標で表記		

8世紀代を中心とする祭祀関連土坑を15基検出した。土坑出土の須恵器・土師器は一括性の高いものであり、高知平野西部の土器編年の基準となる。

西分増井遺跡

2003年2月

編集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原1437 - 1

電話 (088) 864 - 0671

印刷 (有)西村謄写堂